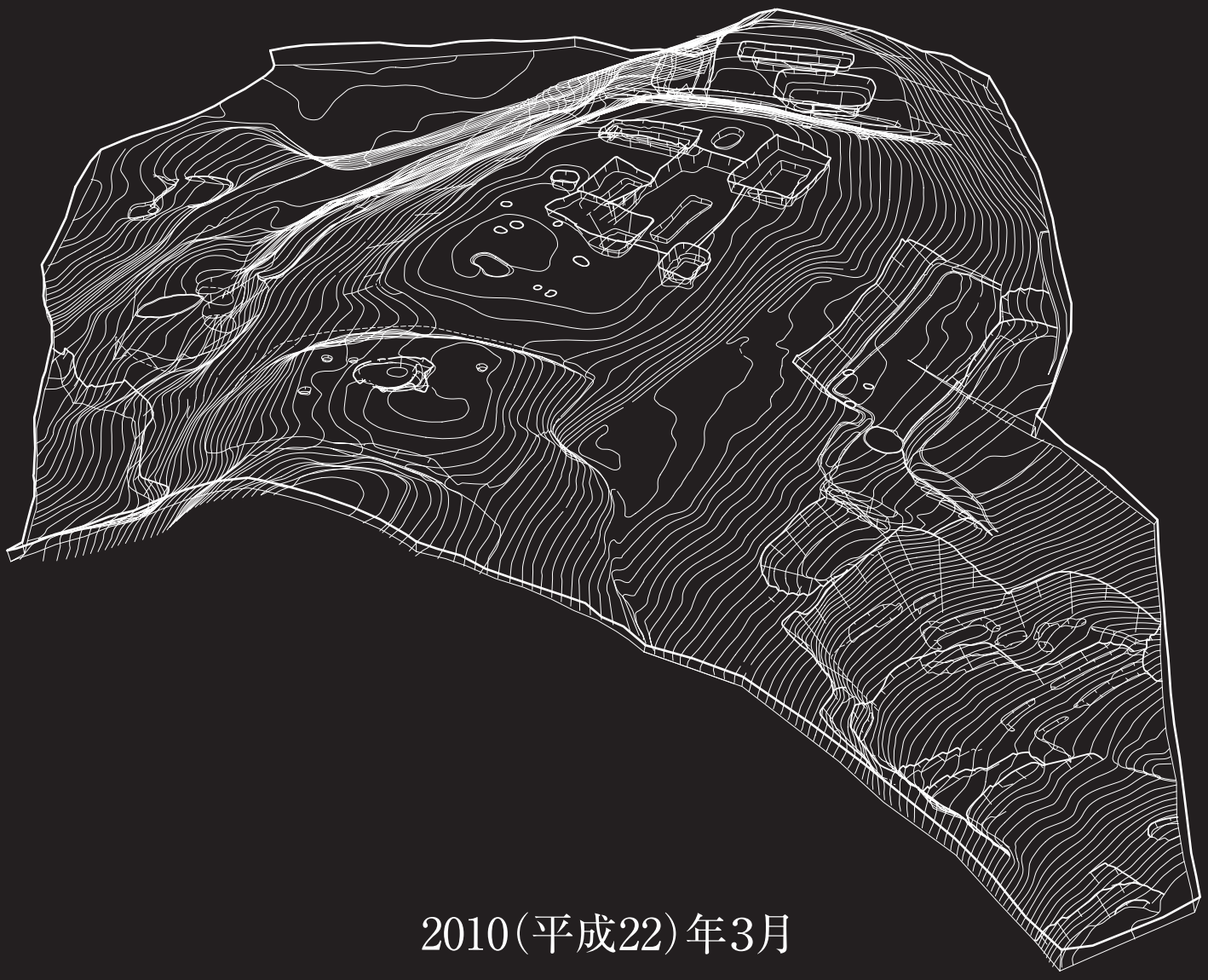
兵庫県文化財調査報告　第377冊

豊 岡 市

耕地谷古墳群・耕地谷城跡

― 国道426号交通円滑化事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―



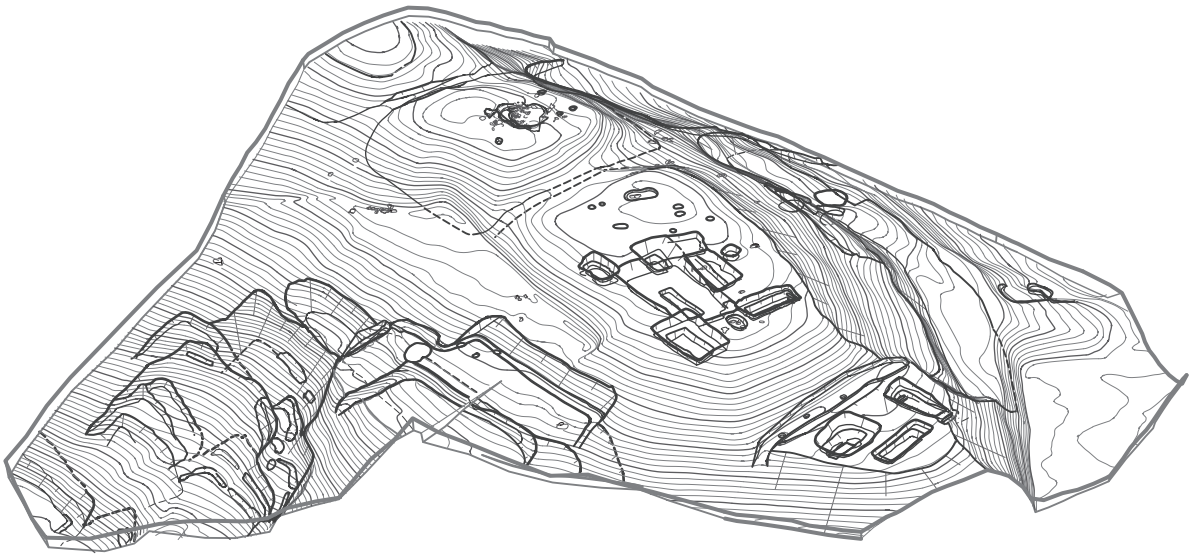
2010（平成22）年3月

兵庫県教育委員会

豊 岡 市

耕地谷古墳群・耕地谷城跡

― 国道426号交通円滑化事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 ―



2010（平成22）年3月

兵庫県教育委員会

例　　言

1　本書は豊岡市九日市下町に所在する耕地谷古墳群および耕地谷城跡の発掘調査報告書である。

2　この調査は国道426号交通円滑化築事業に伴うもので、兵庫県但馬県民局県土整備部豊岡土木事務所の依頼を受けて、平成15年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が本発掘調査を実施した。

3　整理作業については兵庫県但馬県民局県土整備部豊岡土木事務所の依頼を受けて、平成20年度および平成21年度に兵庫県立考古博物館において実施した。

4　遺物写真の作成にあたっては、㈱タニグチフォトと委託契約を交わして、兵庫県立考古博物館において撮影した。

5　本文の執筆は第１章および第３章第１・２節、第５章第２節を西口圭介が、第２章および第３章第３節、第５章第１節を上田健太郎が、第６章を石井智大が行った。本書の編集は、古谷章子の補助を得て、上田が担当した。また、第４章においてはパリノ・サーヴェイ株式会社に耕地谷古墳群出土土器胎土分析ならびにヤリガンナ付着木質の樹種同定を依頼し、その結果を掲載している。

6　本報告にかかわる遺物・写真は、兵庫県立考古博物館で保管している。

7　調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。
豊岡市教育委員会、瀬戸谷晧・潮崎誠・宮村良雄（豊岡市教育委員会）、肥後弘幸（㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター）（敬称略、順不同）

凡　　例

1　図版中における座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標系の数値を使用している。なお、平面直角座標系は第Ⅴ系を使用し、方位は座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を基準としている。

2　遺物は原則として、掲載順に通し番号を付けて掲載している。また、石製品にはS、玉類にはJ、鉄製品にはF、布製品にはTをそれぞれの頭に付加し、土器と区別を図っている。

3　本書に掲載した地図のうち、第１図は豊岡市発行の都市計画図「豊岡市４」（昭和36年８月測図、昭和46年４月修正）を、第４図は国土交通省国土地理院発行の２万５千分の１の地形図（図幅名「豊岡」「江原」）を改変して使用している。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と経過
第１節　分布調査・確認調査の経緯と経過……1
第２節　本発掘調査の経緯と経過……1
第３節　出土品整理・報告書作成作業の経過と体制……4

第２章　遺跡をめぐる環境
第１節　地理的環境……5
第２節　歴史的環境……6

第３章　発掘調査の成果
第１節　基本層序について……11
第２節　上層遺構（耕地谷城跡）の成果……13
第３節　下層遺構（耕地谷古墳群）の成果……18

第４章　耕地谷古墳群出土遺物の自然科学的分析
第１節　土器の胎土分析……29
第２節　木質の樹種同定……33

第５章　まとめ
第１節　耕地谷古墳群について……35
第２節　耕地谷城跡の時期と性格……41

第６章　考 察
第１節　耕地谷古墳群における墓壙内破砕土器配置……43

表　目　次

第１表　耕地谷古墳群・耕地谷城跡周辺の主要遺跡……8
第２表　出土土器一覧表……28
第３表　出土石製品一覧表……28
第４表　出土玉類一覧表……28
第５表　出土鉄製品一覧表……28
第６表　分析試料一覧および胎土分類……29
第７表　薄片観察結果……30
第８表　耕地谷古墳群埋葬主体一覧……36

挿　図　目　次

第１図　本発掘調査位置図……2
第２図　事業計画範囲と本発掘調査区……3
第３図　円山川の流域と勾配……4
第４図　耕地谷古墳群・耕地谷城跡周辺の主要遺跡……9
第５図　土層観察のための各トレンチ配置図……11
第６図　各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度……31
第７図　胎土中の砂の粒径組成……31
第８図　砕屑物・基質・孔隙の割合……31
第９図　ヤリガンナ付着木質……33
第10図　丹後半島の方形台状墓の埋葬類型……36
第11図　各埋葬主体における出土鉄製品・玉類……37
第12図　耕地谷２号墳の土師器と類例……39
第13図　墓壙内破砕土器配置の執行率……44

図　版　目　次

図版１　兵庫県・豊岡市・耕地谷古墳群および耕地谷城跡の位置
図版２　調査前平面図
図版３　調査区土層断面図①（１トレンチ）
図版４　調査区土層断面図②（東西トレンチ）
図版５　調査区土層断面図③（４トレンチ）
図版６　上層遺構（耕地谷城跡）平面図
図版７　上層遺構（耕地谷城跡）遺構配置図
図版８　東郭平面図・断面図
図版９　中央郭・西郭平面図
図版10　北平坦部１平面図・断面図
図版11　南平坦部１平面図・断面図
図版12　南斜面平坦部面群平面図・断面図
図版13　南斜面平坦部２・３平面図・断面図
図版14　集石土坑SX001・南平坦部SD001石組
図版15　下層遺構（耕地谷古墳群）平面図
図版16　１号墳平面図
図版17　１号墳断面図
図版18　SX101
図版19　SX101墓壙内破砕土器配置状況
図版20　SX102
図版21　SX103
図版22　２号墳平面図
図版23　２号墳断面図
図版24　２号墳主体部配置図
図版25　SX201
図版26　SX202～ＳX204
図版27　SX205
図版28　SX206
図版29　SX207
図版30　SX208
図版31　３号墳・４号墳平面図・断面図
図版32　上層遺構（耕地谷城跡）出土遺物
図版33　下層遺構（耕地谷古墳群）出土土器
図版34　下層遺構（耕地谷古墳群）出土玉類・鉄製品・布製品

写 真 図 版 目 次

写真図版１	空中写真	上	調査区遠景（北から）
		下	調査区遠景（北東から）
写真図版２	空中写真	上	調査区遠景（北西から）
		下	調査区遠景（南東から）
写真図版３	空中写真	上	調査区遠景（東から）
		下	調査区近景（北東から）
写真図版４	空中写真	上	調査区近景（東から）
		下	調査前状況（真上から）
写真図版５	空中写真	上	耕地谷城跡上層（真上から）
		下	耕地谷城跡下層・耕地谷古墳群（真上から）
写真図版６		上	調査前全景（西から）
		中	調査前の尾根（北東から）
		下	調査前南平坦部（南西から）
写真図版７		上	調査前北平坦部（西から）
		中	拡張区着手前状況（北東から）
		下	拡張区表土剥ぎ状況（北東から）
写真図版８		上	南壁東半部
		中上	東西土手３・４号墳間
		中下	東西土手２・３号墳間
		下	北４トレンチ土層断面全景（南から）
写真図版９		上	北４トレンチ中央部断面（南東から）
		中上	北４トレンチ中央部断面（北東から）
		中下	北テラス通路東西土手断面（西から）
		下	北５土手断面（東から）
写真図版10		上	南４土手断面（北から）
		中上	南４南平坦部（北東から）
		中下	南４南平坦部（北から）
		下	南３土手断面北半（北東から）
写真図版11		上	北・南４土手断面全景（北東から）
		中上	北４土手断面（北東から）
		中下	南平坦部３盛土状況（北から）
		下	拡張区南北土手断面北半（南西から）
写真図版12		上	東郭・中央郭（西から）
		中	東郭（西から）
		下	中央郭・西郭（西から）
写真図版13		上	中央郭検出状況（西から）
		中	中央郭（西から）
		下	中央郭全景（西から）
写真図版14		上	集石土坑SX001（南から）
		中	SX001半裁状況（東から）
		下	SX001下部断面（東から）
写真図版15		上	西郭（西から）
		中	西郭近接（西から）

		下	郭外の状況（西から）
写真図版16		上	尾根上の郭全景（西から）
		中	南平坦部西コーナーと集石（南東から）
		下	SD301（南から）
写真図版17		上	北平坦部（南西から）
		中	北平坦部１（南西から）
		下	北平坦部１（西から）
写真図版18		上	北平坦部２（南西から）
		中	北平坦部通路状遺構（南西から）
		下	北平坦部通路状遺構（南東から）
写真図版19		上	北平坦部１柱穴（東から）
		中	北盛土部分（南東から）
		下	北盛土清掃作業状況（南西から）
写真図版20		上	南平坦部（北西から）
		中	南平坦部西コーナー（南東から）
		下	南平坦部東コーナー（南西から）
写真図版21		上	SD001集石（北西から）
		中	SD001集石（南東から）
		下	SD001西部（南東から）
写真図版22		上	SD001土層断面（南西から）
		中	SD001列石検出状況（北西から）
		下	南平坦部清掃作業状況（北西から）
写真図版23		上	南斜面南平坦部２（南西から）
		中	南平坦部２・３（西から）
		下	南平坦部２・３（北西から）
写真図版24		上	拡張区（北から）
		中	南平坦部２・３及び拡張区（北西から）
		下	拡張区の玄武岩（北西から）
写真図版25		上	拡張区全景（北西から）
		中	拡張区中段（北西から）
		下	拡張区中段と下段（北西から）
写真図版26	古墳群	上	墳頂から南東方向を望む（北西から）
		中	１・２号墳全景①（南西から）
		下	１・２号墳全景②（南西から）
写真図版27	１号墳	上	１号墳墓壙検出状況（南西から）
		中	１号墳埋葬主体全景（南西から）
		下	SX101・SX102（南西から）
写真図版28	SX101	上	SX101全景（南西から）
		中	SX101棺頭部付近（南東から）
		下左	墓壙内破砕土器（東部）出土状況（北東から）
		下右	墓壙内破砕土器（西部）出土状況（北東から）
写真図版29	SX101	上	SX101墓壙完掘状況（北東から）
	SX102	中	SX102全景（南西から）
		下	SX102墓壙完掘状況（南西から）
写真図版30	SX102	上	SX102棺内鉄器出土状況（南東から）

		中	SX102棺内東側鉄鏃出土状況（南東から）
		下	SX102棺内西側ヤリガンナ出土状況（北東から）
写真図版31	SX103	上	SX103全景（南東から）
		中	SX103墓壙完掘状況（南東から）
		下上	SX103棺東部鉄器出土状況（南西から）
		下下	SX103棺東部鉄器出土状況アップ（南東から）
写真図版32	２号墳	上	２号墳主体部全景（南西から）
	SX201	中	SX201全景（南西から）
		下	SX201棺付近（南東から）
写真図版33	SX201	上	SX201棺内鉄器出土状況（北西から）
		中	SX201裏込め土内礫出土状況（南東から）
		下	SX201墓壙完掘状況（南西から）
写真図版34	SX202	上	SX202検出状況（北東から）
		中	SX202墓壙土層断面（北東から）
		下	SX202墓壙完掘状況（南西から）
写真図版35	SX203	上	SX203・SX204全景（南西から）
	SX204	中	SX204全景（南西から）
		下	SX204墓壙完掘状況（南西から）
写真図版36	SX205	上	SX205全景（南西から）
		中	SX205墓壙完掘状況（南西から）
		下	SX205墓壙完掘状況（北西から）
写真図版37	SX206	上上	SX206全景（北西から）
		上下	SX206墓壙完掘状況（北西から）
	SX207	下上	SX207全景（南西から）
		下下	SX207墓壙完掘状況（南西から）
写真図版38	SX208	上	SX208土器棺上部検出状況（南東から）
		中	SX208土器棺下部検出状況（南東から）
		下	SX208墓壙完掘状況（北西から）
写真図版39	３号墳	上	２号墳と３号墳（西から）
		中	３号墳墳丘（西から）
		下	２・３号墳間付近墳裾から墳丘斜面（北から）
写真図版40	３号墳	上	３号墳墳丘（南西から）
	４号墳	中上	３・４号墳作業状況（北東から）
		中下	３・４号墳墳丘斜面清掃状況（北東から）
		下	３・４号墳間溝須恵器出土状況（左・南から・右東から）
写真図版41	遺物	上	２号墳出土土器
		下左	SX101出土管玉
		下右	SX201出土ヤリガンナ付着水銀朱
写真図版42	分析	胎土薄片（顕微鏡写真）	
写真図版43	遺物	上層遺構（耕地谷城跡）出土土器①	
写真図版44	遺物	上層遺構（耕地谷城跡）出土土器②	
写真図版45	遺物	上層遺構（耕地谷城跡）出土土製品・石製品・鉄製品	
写真図版46	遺物	下層遺構（耕地谷古墳群）出土土器①	
写真図版47	遺物	下層遺構（耕地谷古墳群）出土土器②	
写真図版48	遺物	下層遺構（耕地谷古墳群）出土玉類・鉄製品・布製品	

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　分布調査・確認調査の経緯と経過

兵庫県但馬県民局県土整備部豊岡土木事務所は、円山川左岸の豊岡市九日市下町から西側の戸牧に抜ける（国）426号豊岡バイパス道路改築事業を計画した。事業計画路線のうち、九日市下町から戸牧に抜ける間の山地部分に関してはトンネル工法が設計されており、トンネル部分を除く東西両端部分を調査対象に分布調査・確認調査を実施した。このうち、本報告書の対象である耕地谷古墳群・耕地谷城跡は、事業範囲内の東側（九日市側）に該当する。

１　分布調査の経過

平成14年度に豊岡土木事務所の依頼を受け、分布調査（遺跡調査番号　2002103）を実施した。踏査を行った結果、九日市下町側では谷の南側に存在する尾根の一部が事業予定地にかかり、その尾根上にある周知の遺跡（耕地谷古墳群）に工事範囲が及ぶことが判明した。さらに周知の古墳に加え、尾根先端・南北両斜面において平坦地の存在が確認でき、中世段階では山城に改変されていることが推定された。なお、踏査時に谷の開口部の畑地において、須恵器片が採集されている。

以上の結果から九日市下町側では、耕地谷古墳群及び山城跡が谷の開口付近の工事範囲内に存在することが明らかになり、須恵器片の存在から谷内において遺物包含層が存在する可能性が想定されることを含め、埋蔵文化財が包蔵される可能性が高いと判断された。

調査期間　平成14年６月21日　　調査面積　12,300㎡

調査主体　兵庫県教育委員会

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　　主査　別府洋二

２　確認調査の経過

分布調査の結果をもとに、豊岡土木事務所長からの依頼（平成14年11月５日付け但馬（豊土）第1144号）を受け、平成14年度に確認調査を実施した。九日市下町側では水田・平坦地・丘陵平坦部にトレンチを設定した。調査の結果、周知の耕地谷古墳群に設定したトレンチにおいて、墳丘裾部と考えられる落ち込みを検出した。

調査期間　平成14年12月16日～18日　　調査面積　40㎡

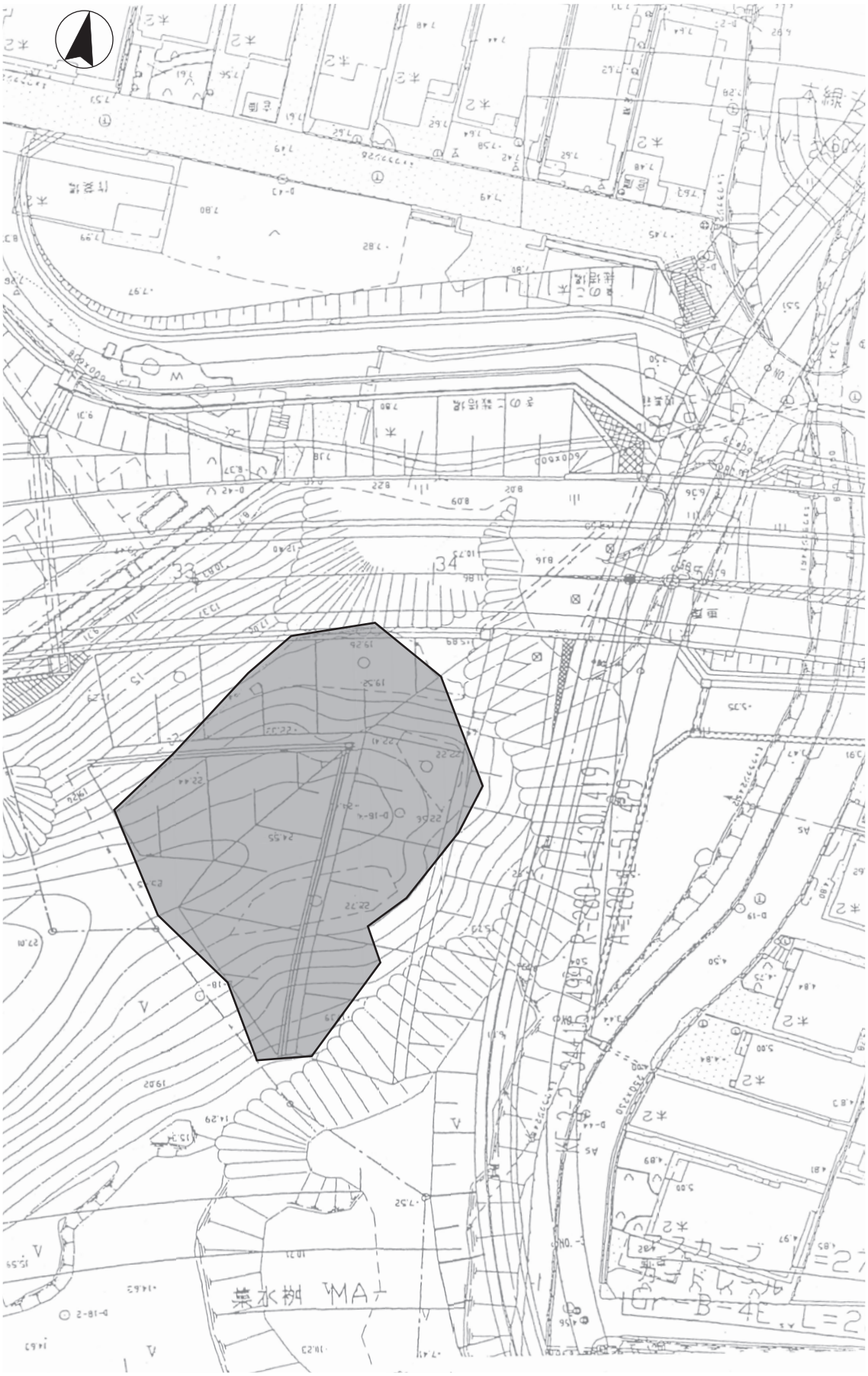
調査主体　兵庫県教育委員会

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　　主査　渡辺　昇

第２節　本発掘調査の経緯と経過

確認調査の結果を踏まえ、但馬県民局県土整備部豊岡工事事務所より依頼（平成15年３月28日付但馬（豊土）第1718号）を受け、本発掘調査を実施した。調査に先立って現況の空中写真測量を行った後、すべて人力によって伐開・掘削・精査を実施した。本発掘調査は当初、尾根上に立地する４基の古墳を対象としていたが、調査の進捗に伴い、古墳を改変し戦国期の山城と思われる城郭遺構が構築されていることが判明した。山城に関連する遺構が南側斜面にまで及ぶことから調査区を南側に拡張し、遺構面の空中写真測量を当初予定より一回増やし、上層（山城跡）・下層（古墳群）の計２回実施した。

第１図　本発掘調査位置図（S＝1/3,000）



第２図　事業計画範囲と本発掘調査区（S＝1/500）

調査期間　平成15年５月13日～７月18日　　調査面積　707㎡

調査主体　兵庫県教育委員会

調査担当　兵庫県教育委員会埋蔵文化財

調査事務所

調査第１班　主査　西口圭介、主査　藤田　淳、技術職員　上田健太郎

調査参加者　石井智大（現 三重県埋蔵文化財センター）、三好　玄（現 大阪府教育委員会）、櫻井雅子、野村大作

調査工事委託　泉建設株式会社

空中写真測量委託　株式会社アコード

第３節　出土品整理・報告書作成作業の経過と体制

出土品の整理作業は平成20年度および平成21年度に、兵庫県立考古博物館において実施した。実施した内容は、土器・石器の水洗い・ネーミング・接合補強・実測・拓本・復元・写真撮影、金属器の保存処理・実測・写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷である。

平成20年度

調査担当職員

主査　西口圭介、主任　上田健太郎

整理担当職員

担当課長補佐　岡田章一（工程管理担当）

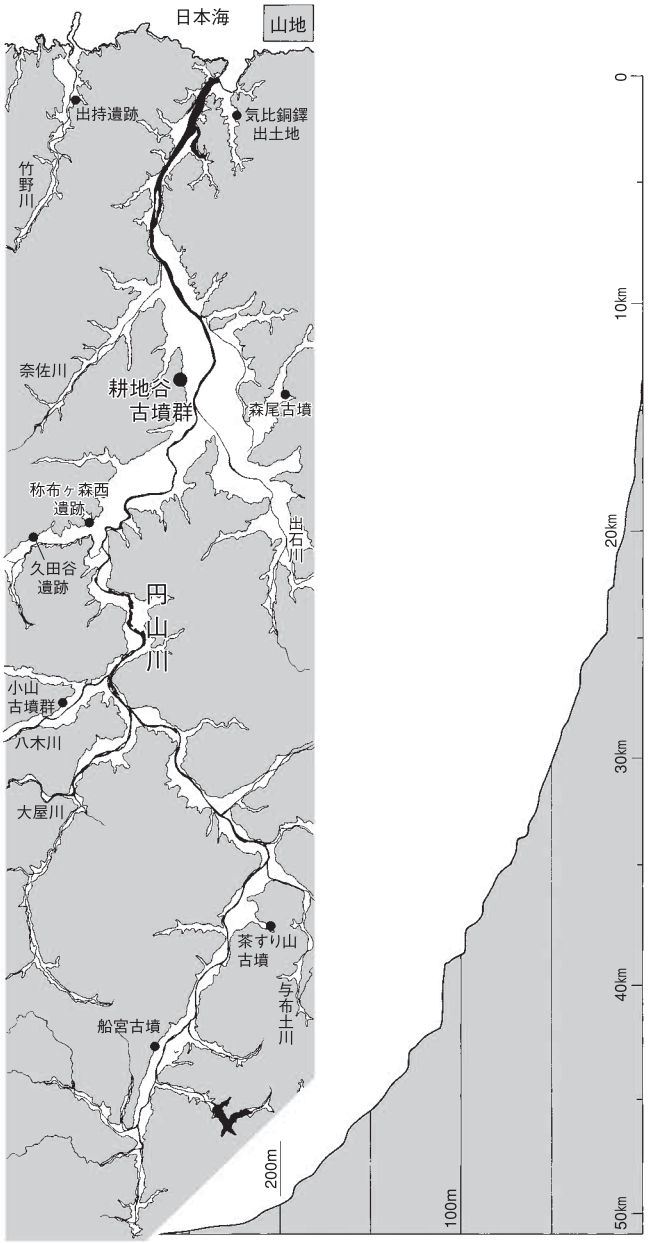
主査　岡本一秀　（保存処理担当）

非常勤嘱託員

吉田優子・三好綾子・荻野麻衣（接合等担当）

増田麻子（実測・トレース等担当）

大前篤子・藤井光代・長濱重美・有馬利耶子（保存処理担当）



第３図　円山川の流域と勾配

平成21年度

調査担当職員　担当課長補佐　西口圭介、主任　上田健太郎

整理担当職員　担当課長補佐　岡田章一（工程管理担当）

非常勤嘱託員　古谷章子（実測・トレース・レイアウト等担当）

吉田優子・三好綾子・荻野麻衣（復元等担当）

第２章　遺跡をめぐる環境

第１節　地理的環境

豊岡市の概要

耕地谷古墳群・耕地谷城跡が所在する豊岡市は、兵庫県域の北東端に位置する。市域の規模は、東西38.8㎞、南北32.2㎞、面積697.66㎢であり、市町面積としては兵庫県内最大（県域の8.3%）である。このうち地目別土地面積では、山林が265.14㎢と市域の38％を占め最も大きく、次いで田の47.33㎢（6.8%）、宅地の15.97㎢（2.3%）、畑の11.82㎢（1.7%）などが市域の主な構成要素となっている。

行政区画としては平成の大合併（平成17年４月１日）において旧豊岡市と隣接する出石郡出石町・但東町、城崎郡城崎町・竹野町・日高町が合併して現在の姿に至っている。現在では、東は京都府京丹後市、与謝郡与謝野町、福知山市、西は美方郡香美町、南は養父市、朝来市に接し、北は日本海に面している。

豊岡市の人口は89,549人（平成22年２月１日現在）を数え、経済的にも但馬地域の中心的位置を占めている。気候は典型的な日本海型気候に属しており、年平均気温は14.6℃と温暖である。年平均降水量は約2,000㎜程度と多雨であり、冬季は山間部で降雪が多い。夏はフェーン現象により気温が上昇することが多く、８月の月平均気温は兵庫県下他地域より高い傾向にある。冬は強い北西の季節風の影響を受け曇りや雪の日が多く、年間気温の季節変化が大きい。

産業面では、水稲を中心に平地部の多品目野菜や神鍋高原のキャベツやスイカのほか、大豆、そば、ブドウ栽培に重点が置かれている農業をはじめ、漁業、林業、畜産業や、工業では地場産業として著名な鞄や、プラスティックや電子部品、食料品、金属製品といった製造業が主な産業構造となっている。

交通網では、広域幹線道路の東西軸として北側に国道178号、南側に国道482号が通り、それらを国道312号と国道426号が南北に繋いでいる。なお、豊岡市までの延伸が計画されている北近畿豊岡自動車道や、山陰道の一環として鳥取豊岡宮津自動車道が整備中である。鉄道網では、南北方向にJR山陰本線が縦断し、京都府丹後地域とは豊岡駅から北近畿タンゴ鉄道宮津線により結ばれている。1994年にはコウノトリ但馬空港が開港し、大阪国際空港までの所要時間約30分と高速ネットワークを担っている。

周辺の地形および地質と円山川

豊岡盆地周辺の山地及び丘陵地は、標高が200～400ｍの低山帯となっている。耕地谷古墳群・耕地谷城跡は市街地南西の丘陵上に立地し、この丘陵は盆地東西幅が約４㎞と最大となるあたりの盆地西壁をなす山塊を構成する。この山塊は旧豊岡・日高行政区境の標高258.9mの尾根から東側に派生しつつ上佐野集落の北側で徐々に北向きに転じ、JR豊岡駅の南側へと突き出している。豊岡盆地内部の低地は、主に円山川とその支流である出石川が盆地底に形成した氾濫平野と扇状地性低地からなり、氾濫平野は盆地底の大部分を占めるが、盆地の縁辺部や支谷は、若干傾斜をもつ扇状地性低地となっている。

円山川は、兵庫県朝来市生野町円山（標高640m）に源を発する一級河川である。朝来市からほぼ北流し、養父市、豊岡市を経て豊岡市津居山で日本海に注ぐ但馬地域随一の河川で、幹川流路延長68㎞、その流域面積1,300㎢にも及ぶ。流域面積の約83％は山地等で占められている。養父市内では大屋川、八木川、稲葉川等の支川を合わせて豊岡盆地を貫流し、豊岡市において出石川、奈佐川等を合わせる（第３図）。

地質的には、基盤岩は豊岡盆地東側において主に中生代の花崗岩類で、南側は先第三紀～新第三紀系の流紋岩類、安山岩類、北西側は主に北但層群と呼ばれる先第三紀～新第三紀系の礫岩、砂岩、泥岩類の互層となっている。 盆地底を形成している地質は、洪積世～沖積世に形成された未固結層である。

第２節　歴史的環境

旧石器時代

森尾の大内谷２号墳の横穴式石室調査中に国府型ナイフ形石器が採集されている。

縄文時代

早期の押型文土器は後述する高原や山間部の遺跡のほかに、低地の香住・ヱノ田遺跡においても出土している。この三開山の周辺低地には中谷、長谷、荒原の３つの貝塚が立地し、豊岡盆地が汽水域であった状況を示す。中谷貝塚が中期から晩期にかけて営まれ、貝層にはヤマトシジミが主体となり汽水域であったことが窺われる。荒原貝塚も汽水域に棲む貝類で構成され、カキの剥き身作業場とされる。長谷貝塚でも良好な貝層が豊富に残り、荒原貝塚の母村的性格が指摘されている。

一方高原地帯では草創期から晩期まで連綿と続く日高町神鍋遺跡や早期から前期にかけての山宮遺跡が扇状地上の段丘面に展開する。山間部では奈佐谷奥部に位置する辻遺跡では、早期の押型文土器が採集され、中期末から後期前葉にかけて円形竪穴住居跡や関連の遺構や石柱、石棒が注目される。石棒は角柱状石材も認められ、同時期の竹野町見蔵岡遺跡とともに代表的な製作遺跡である。

弥生時代

六方寺川の川床（駄坂川原遺跡）から前期中葉から中期前葉に至る土器、石器、木器、骨角器のほか、陶塤が出土している。駄坂川原遺跡を見下ろす低丘陵上の駄坂舟隠遺跡では、同時期の方形周溝墓群が営まれる。加陽の出石川川床遺跡で前期後葉から中期初頭にかけての土器が、女代神社遺跡でも前期の土器が採集されている。宮内黒田遺跡からは前期後葉の壺や甕の破片が出土している。このほか、奈佐川左岸の宮井条里制遺跡で後期の土器が、葦田神社遺跡でも弥生土器および伐採斧が採集されている。

集落では、ヱノ田井走遺跡で中期中葉と後期の竪穴住居跡が確認されているほか、立石岡田遺跡、亀ヶ崎遺跡群、中ノ郷深谷遺跡でも中期後半の、女代神社南遺跡では後期の竪穴住居が確認されている。

墳墓では、後期の早い段階に上鉢山・東山墳墓群で造墓活動が開始され後期前葉まで続く。墓壙内破砕土器配置が41主体中35例で認められ、後期を通じて豊岡盆地内の墳墓群で主体となる。香住門谷墳墓群は後期前葉から中葉にかけて、加陽土ヶ鼻遺跡では後期中葉から末にかけて、立石墳墓群では後期後葉から末にかけて尾根筋上に造墓活動が展開される。半坂墳墓群では後期中葉のみのごく短期間に方形周溝墓や木棺墓群が営まれる。妙楽寺墳墓群は後期後葉から末にかけて耕地谷古墳群の北側の尾根に営まれ、複数の大型の埋葬施設に鉄剣が副葬されているのが特徴的である。後期末には岩井・本井墳墓群や、東海系パレススタイル壺を持つ鎌田若宮墳墓群、此隅山南東尾根の御屋敷遺跡の木棺墓が営まれる。

銅鐸は扁平鈕式の流水文銅鐸が気比で4口、女代神社遺跡で突線鈕Ⅱ式銅鐸の鰭部分が採集されている。また、日高町久田谷で突線鈕Ⅴ式の破砕された破片117片が出土している。気比三号銅鐸は茨木市東奈良遺跡出土鋳型によるもの、気比四号銅鐸は堺市陶器鐸と同笵であることが判明している。

古墳時代

北但馬で最初に登場する前期の首長墳は森尾古墳である。1917年（大正六）の大規模な削平により墳形は不明ながら３基の竪穴式石室があったとされ、正始元年銘と考えられる神獣鏡、方格規矩鏡や三角縁神獣鏡、銅鏃、鉄鏃、鉄斧、鉄剣、ヤリガンナ、精美な棒状石杵が副葬されていた。続く首長墳と考えられる城崎町小見塚古墳も1914年（大正三）に土砂採掘中に発見され、当時の記録から底部に砂利を敷き詰めた粘土槨であったと推測される。但馬地域で最も古い特徴を持つ円筒埴輪や、甲冑、三角縁神獣鏡や変形四獣鏡などが出土している。さらに次の段階の首長墳として挙げられるのは大型の方墳である出石町入佐山３号墳で、長さ4.8mにも及ぶ長大な組合式木棺を埋葬主体とする。第１主体からは「君

宜高官」銘をもつ後漢鏡の方銘四獣鏡が破砕された状態で副葬され、仿製四獣鏡、直刀、槍、鉄剣、鉄鏃、鉄斧、鉄鎌、ヤリガンナ、ガラス玉が出土したほか、砂鉄150gが含まれていたことが特筆される。

前期後半から末にかけ立石107-1号墳では獣形鏡が、カチヤ古墳では棺外の副葬施設から珠文鏡が出土している。北浦18号墳では、長大な組合式木棺から乳文鏡ないしは珠文鏡と刀子が布に巻かれたと考えられる状態で、土師器転用枕とともに出土している。また、入佐山１号墳や舟隠１号墳、納屋ホーキ古墳はいずれも前期後葉から末頃にかけての前方後円墳とみられる。上鉢山の東向かいの丘陵上には前期後半から中期にかけて長谷・ハナ古墳群が築かれ、２主体から珠文鏡１面と鏡式不明の１面が出土している。中筋丘陵西麓の中郷深谷古墳群でもほぼ同時期の大小２基の方墳が調査され、うち１号墳は多数埋葬の台状墓系統のものである。埋葬施設は竪穴式石室や組合式石棺もしくは組合式木棺、土器棺からなり、２主体から連弧文鏡が１面ずつ出土している。出石町御屋敷墳墓群では、２つの竪穴式石室からそれぞれ獣形鏡が１面ずつ出土している。一方、中期初頭頃とされる半坂峠古墳群南尾根１号墳では土器棺４基を埋葬主体とする点で特筆される。加陽土ヶ鼻遺跡でも布留式甕を土器棺に使用している。

耕地谷古墳群の立地する山塊では、稜線上に周溝をもつ円墳を中心とする古墳群が分布する。北側は丘陵先端の宝林谷古墳群から北から順に七ツ塚址古墳群、見手山古墳群、妙楽寺・大谷古墳群、大谷山頂古墳群、そして耕地谷古墳群と続く。南側では上佐野にむかって、乞食谷古墳群、西光寺谷古墳群、勝妙寺谷古墳群、雷神社古墳群、上佐野古墳群、ホーキ古墳群と続いている。

旧豊岡市域には大内谷古墳群など一部を除いて横穴式石室がほとんど認められず、主要なものでは周辺で日高町楯縫古墳群や岩倉古墳群のほか、城崎町二見谷古墳群では家形石棺を納めた大型の横穴式石室が認められる。横穴式石室導入期には大師山古墳群で６世紀前半から後半にかけて竪穴系横口式石室を埋葬施設とする古墳がまとまって造営されており、見手山丘陵上には６世紀後半に前方後円墳に竪穴系横口式石室をもつ見手山１号墳が築かれる。竪穴系横口式石室の例では、他に出石町カヤガ谷１号墳がある。また、ほぼ同時期にまで残存している竪穴式石室の例には、北浦27-4号墳がある。

横穴式石室が寡少な一方で横穴墓が顕著である。北浦横穴墓および門谷横穴墓群では縦長で奥側がやや幅広となる古相のものが含まれ、横穴式石室の影響下に成立したことが指摘されている（瀬戸谷2005）。

集落では加陽遺跡や香住･ヱノ田遺跡で前期の、女代神社南遺跡では後期の竪穴住居跡が確認されている。

飛鳥～平安時代

白鳳時代に創建された三宅廃寺では瓦積みの基壇のほか鴟尾や軒丸瓦が出土しており、奈良時代まで存続していたとみられる。但馬国府は第１次が出石町域、第２次が日高町域に推定地が想定されるものの、現在までのところ確定には至っていない。九日市付近は「和名類聚抄」の城崎郡新田郷に比定される。奈佐川右岸の福成寺遺跡では二彩、銅製の鉈尾・丸鞆、風字硯や蹄脚硯が出土しており、城崎郡衙推定地とされている。香住・ヱノ田遺跡では奈良時代の火葬墓とされる墓遺構が確認されている。平安時代にかけて女代神社南遺跡や香住・ヱノ田遺跡で掘立柱建物跡群が確認されている。

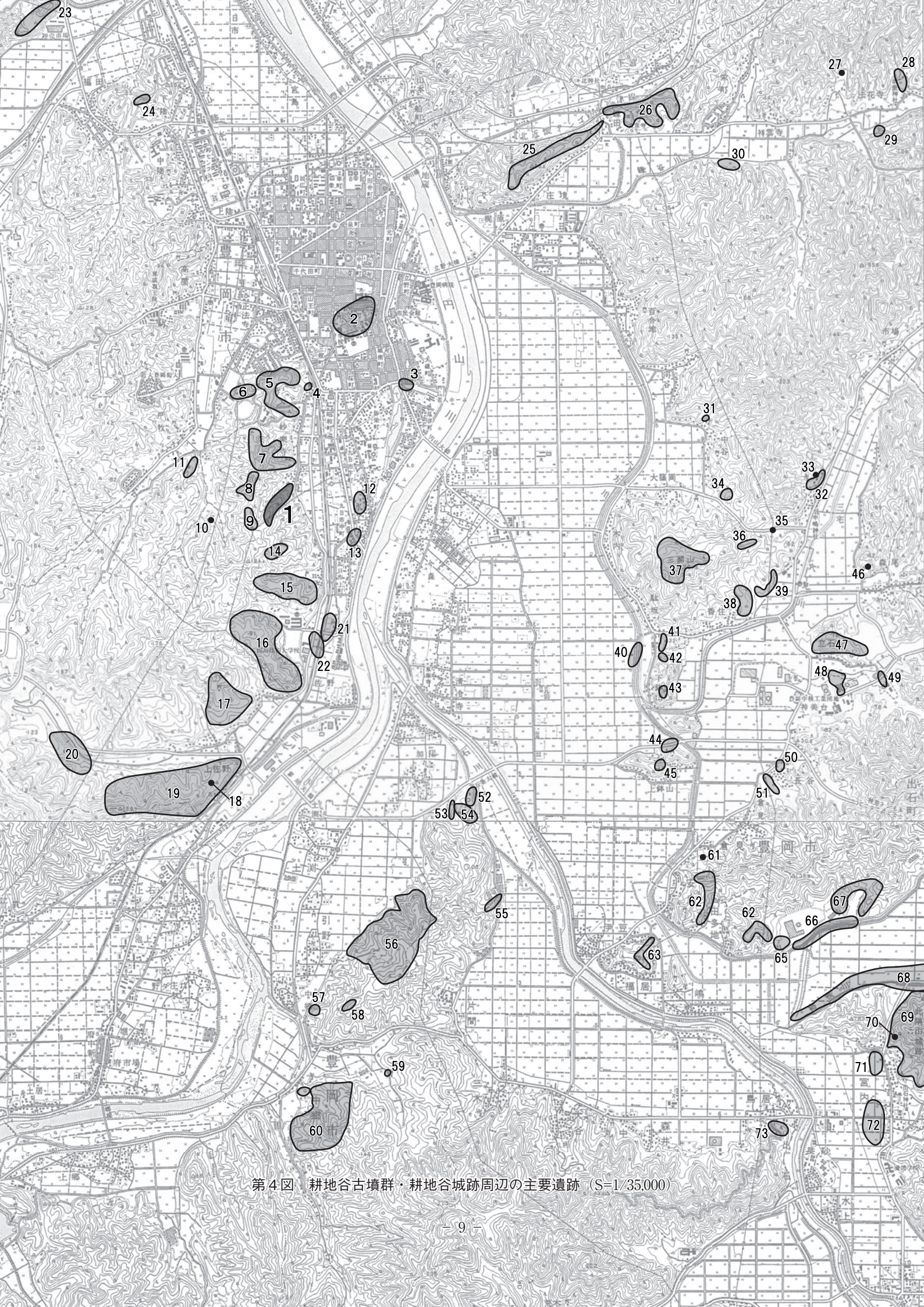
窯業生産では、三江谷奥部の法花寺地区では６世紀末に須恵器窯跡群の操業が開始され、奥野タワタリ１号窯、市場神無１・２号窯や三宅瓦窯などが８世紀にかけて稼働する。円山川の西側では６世紀後半代から７世紀にかけて倉吉窯跡、イチゴ谷１・２号窯、宮ノ谷窯跡により須恵器生産が行われる。また、耕地谷古墳群の立地する丘陵から谷を挟んだ西側の丘陵斜面に築かれた戸牧１号窯では７世紀前葉から中葉にかけて須恵器生産が営まれ、その後は内町窯に引き継がれる。

中世

南北朝動乱期の1337年（延元二）、足利直義党の山名時氏が丹波から但馬に入り、三開山城を拠点と

第１表　耕地谷古墳群・耕地谷城跡周辺の主要遺跡

第4図	遺跡番号	遺跡の名称	よみがな	遺跡の所在地	時代	種類
1	101661～667	耕地谷古墳群・耕地谷城跡	こうちだに	豊岡市九日市下町	古墳・中世	古墳・城館
2	101470～472	豊岡城周辺遺跡	とよおか	豊岡市京町	中世	城館
3	101473	塩津遺跡	しおつ	豊岡市塩津	弥生	散布地
4	101466～469	見手山横穴墓群	みてやま	豊岡市妙楽寺	古墳	古墳
5	101458～464	文教府裏古墳・妙楽寺経塚・妙楽寺城址	ぶんきょうふうら・みょうらくじ	豊岡市妙楽寺	古墳・中世	古墳・城館・他
6	101445～454	七ツ塚址古墳	ななつづか	豊岡市正法寺	古墳	古墳
7	101550～555・635～648	見手山古墳群・妙楽寺遺跡群・山城址・墳墓群・妙楽寺・大谷古墳群	みてやま・みょうらくじ・みょうらくじ・おおたに	豊岡市妙楽寺	弥生・古墳・中世	墳墓・古墳・城館
8	101649～660	大谷山頂古墳群	おおたにさんちょう	豊岡市妙楽寺	古墳	古墳
9	101792	比丘尼城址	びくに	豊岡市九日市下町	中世	城館
10		戸牧窯跡	とべら	豊岡市戸牧	飛鳥	生産遺跡
11	101545～548	マムシ谷古墳群	まむしだに	豊岡市戸牧	古墳	古墳
12	101670	妙経寺址	みょうきょうじ	豊岡市九日市中町	中世	寺院
13	101882	御屋敷遺跡	おやしき	豊岡市九日市中町	中世	城館
14	101793～795	乞食谷古墳群	こじきだに	豊岡市九日市中町	古墳	古墳
15	101796～857	西光寺谷古墳群	さいこうじだに	豊岡市九日市上町	古墳	古墳
16	101858～878	勝妙寺谷古墳群	しょうみょうじだに	豊岡市九日市上町	古墳	古墳
17	102358～418	雷神社古墳群	いかずちじんじゃ	豊岡市佐野	古墳	古墳
18	102880	ホーキ古墳	ほーき	豊岡市上佐野	古墳	古墳
19	102695～793	ホーキ古墳群	ほーき	豊岡市上佐野	古墳	古墳
20	102794～821	上佐野古墳群	かみさの	豊岡市上佐野	古墳	古墳
21	102160	女代神社遺跡	めしろじんじゃ	豊岡市九日市上町	弥生・古墳	散布地
22	102161	女代神社南遺跡	めしろじんじゃみなみ	豊岡市九日市上町	弥生～中世	集落
23	10348～354	亀ヶ崎遺跡群	かめがさき	豊岡市福田	弥生・古墳・中世	集落・城館
24	100633	下陰・池ノ内古墳群	しもかげ・いけのうち	豊岡市下陰	古墳	古墳
25	100732～757	庄境古墳群	しょうざかえ	豊岡市庄境	古墳	古墳
26	100758～792	若宮古墳群	わかみや	豊岡市鎌田	古墳	古墳
27	104035	シイダニ窯跡	しいだに	豊岡市法花寺	古墳～白鳳	窯跡
28	104036～104040	コヤマ窯跡・タニオカ窯跡	こやま・たにおか	豊岡市法花寺	古墳～奈良	窯跡
29	104027～029	カマド１・２号窯跡・中世墓	かまど	豊岡市法花寺	古墳・中世	窯跡・墳墓
30	101013	五反田遺跡	ごたんだ	豊岡市祥雲寺	弥生～中世	集落・他
31	101683	中谷貝塚	なかんたに	豊岡市中谷	縄文	貝塚
32	104093	三宅廃寺	みやけ	豊岡市三宅	白鳳～奈良	寺院
33	104092	三宅瓦窯	みやけ	豊岡市三宅	白鳳～奈良	生産遺跡
34	101699	半坂遺跡	はんざか	豊岡市大篠岡	弥生	墳墓
35	101938	カチヤ古墳	かちや	豊岡市三宅	古墳	古墳
36	101932～937	半坂峠古墳群	はんざかとうげ	豊岡市大篠岡	古墳	古墳
37	101918	三開山城址	みひらきさん	豊岡市木内他	中世	城館
38	102022	エノ田遺跡群（香住門谷墳墓群）	えのだ	豊岡市香住	弥生	墳墓
39	101942	エノ田遺跡群（井走遺跡）	えのだ	豊岡市香住	縄文～中世	集落
40	102424	川原遺跡	かわはら	豊岡市駄坂	弥生	散布地・貝塚
41	102481～491	舟隠古墳群・舟隠遺跡	ふなかくし	豊岡市駄坂	古墳～中世	古墳・寺院
42	102477～480	舟隠遺跡	ふなかくし	豊岡市駄坂	弥生	墳墓
43	102437	下鉢山城址	しもはちやま	豊岡市下鉢山	中世	城館
44	103060	東山墳墓群	ひがしやま	豊岡市上鉢山	弥生	墳墓
45	102971	上鉢山城址	かみはちやま	豊岡市上鉢山	中世	城館
46	102033	森尾古墳跡	もりお	豊岡市森尾	古墳	古墳
47	102534～586	北浦古墳群・北浦横穴墓墳	きたうら	豊岡市森尾	古墳	古墳
48	102667～674	立石墳墓群（96～103号地点）	たていし	豊岡市立石	弥生～古墳	墳墓
49	102603	立石・岡田遺跡	たていし・おかだ	豊岡市立石	弥生他	散布地
50	103168	長谷貝塚	ながたに	豊岡市長谷	縄文	貝塚
51	103172～181・185	ハナ古墳群	はな	豊岡市長谷	古墳	古墳
52	102893	加陽城址	かや	豊岡市加陽	中世	城館
53	102894	加陽遺跡	かや	豊岡市加陽	縄文～中世	散布地
54	102895～943	加陽・向山古墳群	かや・むこうやま	豊岡市加陽	古墳	古墳
55	103304～320・340	土屋ヶ鼻墳墓群・土屋ヶ鼻古墳群	つちやがはな	豊岡市加陽	弥生・古墳	古墳
56	103419～506・601～689	大師山古墳群	だいしやま	豊岡市引野	古墳	古墳
57	104096	朝日遺跡群	あさひ	豊岡市中郷	弥生・古墳・中世	墳墓・古墳・城館
58	103577	引野城址	ひきの	豊岡市引野	中世	城館
59	103848	葦田神社前遺跡	あしだじんじゃまえ	豊岡市中郷	弥生	散布地
60	103690～757	深谷古墳群	ふかたに	豊岡市中郷	古墳	古墳
61	620034	下安良城山古墳	しもやすらしろやま	豊岡市出石町安良	古墳	古墳
62	620021～029	田多地古墳群・田多地経塚	ただち	豊岡市出石町田多地	古墳・中世	古墳・他
63	620009～013	箱根山古墳群	はこねやま	豊岡市出石町伊豆	古墳	古墳
64	620035～039	田多地小谷古墳群	ただちこたに	豊岡市出石町田多地	古墳	古墳
65	620047～057	田多地引谷古墳群	ただちひきたに	豊岡市出石町田多地	古墳	古墳
66	620125	砂入遺跡	すないり	豊岡市出石町袴狭	縄文～平安	他（祭祀）
67	620042～046	カヤガ谷古墳群	かやがたに	豊岡市出石町袴狭	古墳	古墳
68	620124	袴狭遺跡	はかざ	豊岡市出石町袴狭	弥生～平安	官衙
69	620214	此隅山城跡	このすみやま	豊岡市出石町宮内・袴狭	中世	城館
70	620215	御屋敷遺跡	おやしき	豊岡市出石町宮内	古墳	古墳
71	620383	宮内堀脇遺跡	みやうちほりわき	豊岡市出石町宮内	弥生～近世	集落・城館
72	620231	宮内黒田遺跡	みやうちくろだ	豊岡市出石町宮内	弥生	散布地
73	620232	鳥居城跡	とりい	豊岡市出石町鳥居	中世	城館



第４図　耕地谷古墳群・耕地谷城跡周辺の主要遺跡（S=1/35,000）

する。1353年（正平八）年頃、南朝に降り足利直冬党となった時氏は水運の便のある九日市庭を拠点とするようになる。時氏はその後将軍義詮に帰参し５ヶ国の守護職を宛がわれるも、山名氏が但馬守護となるのは時氏の５男時義の代になってからである。

耕地谷城の南東約700mの九日市上町には、いまだ特定はされないものの但馬守護山名氏の居館推定地（九日市城）が想定されている。山名氏は戦闘時には出石町の此隅山城を本城とし、平常時には九日市の居館を守護所としたと考えられる。また北約500mの現在但馬文教府の位置する標高70mの見手山丘陵上（通称神武山）には、守護所の詰め城として最有力候補である妙楽寺城が立地する。妙楽寺城は1391年（明徳二）の明徳の乱の際に山名時熙（時義の子）が立て籠もり陥落しているが、戦国末期（天正期）の羽柴秀長による但馬侵攻の際まで城塞化していたとされる。耕地谷城跡の背後から北に分岐する標高110mの尾根筋上には比丘尼城が立地する。詰め城の見方もあるが曲輪は未整備であり、土塁と堀切が設けられている。円山川を挟んだ東側の三開山から上鉢山にかけては北から三開山城、下鉢山城、上鉢山城が立地し、妙楽寺城はもとより耕地谷城からもこれらを眺望できる。旧豊岡・日高行政区境に近い円山川右岸の中筋地区では標高125mの丘陵上に引野城、そこから西側に派生する標高約50mの尾根突端に朝日城が築かれる。朝日城において天正年間に築かれた北斜面の段状遺構に関して村落の農民層が築城･籠城に深く関与していた解釈がなされており、耕地谷城の段状遺構を解釈する上で興味深い。

出石川を遡った円山川との合流点に程近い中筋丘陵の北端の標高10～50mにかけての尾根筋上において、南北朝期から戦国期に加陽氏により加陽城が築かれたとされる。出石川をさらに遡った鳥居には此隅山城から出石川を挟んだ眼下の丘陵上に立地する鳥居城において発掘調査が行われ、16世紀後半とされる主郭の下に北東に延びる郭三段と北側の山裾に設けられた竪堀が確認されている。

妙楽寺城の立地する見手山丘陵東麓には、少なくとも明徳の乱前後には延暦寺系の妙楽寺が成立しており、丘陵性の寺域そのものが城塞化し妙楽寺城となったことが窺える。但馬文教府の造成工事中には中世石造物や室町時代の大錫杖頭や宝珠杵など密教法具が採集されている。また、耕地谷古墳群・耕地谷城跡の本発掘調査とほぼ同時期に本発掘調査が行われた妙楽寺ヒシロ遺跡では、平坦部上の掘立柱建物跡と斜面をコンターラインに沿ってカットした帯状のテラスに設けられた五輪等や石造物を伴う火葬墓・土壙墓群が確認され、武士階級の集団墓域として山名氏との関連が考えられる。

近世以降

関ヶ原合戦以後、但馬における城郭は豊岡、出石の２城のみとなり、豊岡城は1644年（正保元）城主杉原氏の断絶を機に廃城となる。九日市下町村は杉原氏断絶に伴い幕府領となる一時期を除いて、近世を通じて豊岡藩領に属した。1871年（明治四）には但馬・丹波・丹後の三国にまたがる豊岡県が設置され、1876年（明治九）には二分して兵庫県と京都府に併合され、豊岡市が兵庫県に属する形となった。

参考文献（紙幅の都合により、各調査報告書については割愛した。）
潮崎誠・宮村みゆき 1998「女代神社南遺跡発掘調査概要報告」『とよおか発掘情報』第６号
瀬戸谷晧 2002『但馬の古代１』シリーズ但馬Ⅰ　但馬文化協会
瀬戸谷晧 2005『但馬の古代２』シリーズ但馬Ⅱ　但馬文化協会
兵庫県教育委員会 1980『昭和55年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』
兵庫県教育委員会編 1982『兵庫県の中世城館・荘園遺跡』
兵庫県史編集専門委員会 1992『兵庫県史』考古資料編　兵庫県
山根実生子他 2001「第２編　北近畿の主要な遺跡」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会
前田豊邦 1996「第五章　但馬国」村川行弘編『兵庫県の考古学』地域考古学叢書　吉川弘文館

第３章　発掘調査の成果

第１節　基本層序について

１　基本的な堆積状況の概要

調査区の現況は雑木林である。樹木の生育により土壌化された表土層の直下には、流土層である褐色土層が一面に広がっており、尾根上では厚さ約15㎝程度、斜面では厚さ30～40㎝程度堆積している。

今回の調査区内において検出した遺構は、上層では城郭遺構（山城跡)、下層では古墳群である。古墳群については後述のとおり盛土の残存は少なく、墳丘はほぼ地山面において検出されている。このため、表土・流土下から地山面が露出する箇所が多い。しかし、上層の山城跡に伴う平坦面遺構は南北両斜面に山土を盛り出して構築しており、この部分に関しては盛土下から古墳群構築以降に堆積した流土及び山城構築時の旧地表が出現している。

２　各トレンチにおける土層堆積状況

調査区内の尾根筋ラインに平行する方向に東西トレンチを、直行する方向に西側から１・２・３・４・５トレンチを設定し土層の観察を行った（南北トレンチ)。なお、３トレンチは南側では南平坦面の土層堆積状況を確認するため、北側では北平坦面から２号墳墳丘斜面にかけての土層堆積状況を観察するために設けており、両者はつながらない。５トレンチは北平坦部から２号墳墳丘斜面にかけての土層堆積状況を観察するため北側のみに設けている。

東西トレンチの概要

調査区を縦断するトレンチである。１層は表土及び表土下の流土である。６層は２号墳・３号墳にかけて存在しており、両古墳の墳丘盛土が流れたものであろう。５層は山城に伴う溝SD301の埋土である。８層～12層は中央郭（１号墳)･東郭（２号墳）間に掘られている区画溝SD101の堆積土である。少なくとも８層～11層は山城に伴う。12層は１号墳の区画に伴う溝の堆積土の可能性がある。13層は地山層であるが、やや東よりの地点において窪みをみせている。この部分が２号墳の墳丘裾部と考えられる。

第５図　土層観察のための各トレンチ配置図

１トレンチの概要

４号墳の墳丘を横断する調査区西壁に設定した。表土（１層）・表土下の流土（２・３層）以下より尾根上には地山が出現している（４層）。北斜面側には５層・６層・７層といった砂質埴壌土がブロック状に堆積しており、これらは、盛土の可能性がある。山城跡が更に広がっていた可能性も残るが、今回の調査範囲では明らかではない。

８層・10層は大きく下方へ流れる締まりにかける流土である。５層・６層・７層を山城に伴う盛土と考えるならば、山城構築以前の堆積土である可能性が高い。

これに対し、14層～17層は墳丘裾部から墳丘斜面に溜まる堆積土の可能性が高い。

４トレンチの概要

中央郭（２号墳）を南北方向に横断するトレンチである。墳丘上の堆積は、表土及び表土下の流土である。本トレンチにおいて堆積の厚い部分は、いずれも墳丘裾部において認められる。

北トレンチでは通路上空間を縦断しており、縞状の堆積を見せる23層～25層・27層～30層は、盛土と考えられる。中層に位置する26層・31層～33層・43層・44層は土壌化する明褐色土であり、郭が構築される以前の旧地表である。更に下層、地山面が大きく窪む部分は２号墳の北面の周溝（区画溝）と考えられ、その直上に堆積する56層は、最も早くに堆積した墳丘盛土からの流土と考えられる。

南トレンチでは、山城に伴う南平坦面１～３の盛土が存在しており（平坦面１：６層～８層、平坦面２：３層～16層、平坦面３：18層）、更に下層では、地山が丸く窪みを見せている。これは北トレンチと同じく南面の周溝（区画溝）と考えられ、20層が堆積土と考えられる。

３　拡張区の概要

拡張区は、南平坦部１の下方に位置する。現況及び南平坦部１の存在から、下方にも同様の平坦部の存在する可能性が確実視された段階で、調査区を設定した。拡張部分の調査面積は約160㎡、上端から下端までの比高差は約６ｍ、斜度は25°を測る。

拡張区の堆積状況は、表土及び表土下の褐色土（流土）からなり、直下より地山が出現している。平坦部遺構が複数検出されているが、これらは全て山側の区画溝付近のみ残っており、盛り出した土は全て流れ去った状況である。

第２節　上層遺構（耕地谷城跡）の成果

１　遺構の概要（図版６・写真図版５）

幅30m前後の尾根上に営まれた古墳群を利用し、かつ整形して営まれた、小規模な山城遺構である。山城遺構は、１号墳・２号墳・３号墳の頂部を削平して造り出した平坦面（郭）各１箇所、削平によって生じた土を、敷き伸ばし積み上げた帯状の盛土部分１箇所、２号墳・３号墳間の周溝を拡張し利用した堀切、３号墳間・４号墳間の周溝を拡張し利用した堀切、尾根斜面をコの字にカットした段状遺構を尾根の南北両斜面において検出している。

山城跡の規模は、調査が及ぶ範囲では、南北39m、東西31.5mをはかり、標高25m～15m、尾根上の平坦部の範囲は、南北７m、東西27mを測り、約189㎡である。

調査前に実施した航空写真測量では、尾根上に４か所の平坦面があり、加えて北斜面、南斜面に明瞭な平坦面を確認することができた。更に、北平坦面の西側、南平坦面の下方に等高線の間隔が広い部分があることも読み取れた。尾根上の平坦面については、当初から、古墳群として把握していたため、東端より、順次１号墳・２号墳・３号墳・４号墳と呼称した。

平坦面は、２号墳上部が広く、幅６m・長さ10mの長方形の空間を作り出している。１号墳上部の平坦面は、幅３～７m･長さ５mの台形の空間である。墳頂部の削平は３号墳においても行われているが、古墳自体の規模を反映して小規模に留まっている。なお、４号墳については平坦部の形状が明瞭でなく、その大半が調査区外に及ぶこともあり、今回の調査では城郭の範囲から除外して取り扱うこととした。

帯状の盛土は１号墳･２号墳の北斜面に施され、全長約15m、幅約1.5mのステップを造り出している。

段状遺構（平坦部）は北斜面において１箇所、南斜面において６箇所以上検出した。

段状遺構（平坦部）は斜面をコの字形にカットし、平坦部を造り出したもので、壁溝を巡らせ、内部に掘立柱柱穴を配置する。北斜面の段状遺構は一辺約10m、幅５m以上の規模を測る。

南斜面の段状遺構は、２号墳裾部に造り替えを含めて３箇所、更に下方の斜面からは、上段・中段・下段の３箇所にそれぞれ複数回造り替えられた段状遺構が検出できた。

２号墳裾部に造られた南斜面の段状遺構（南平坦部１）は、北斜面の段状遺構（北平坦部１）と同じく１辺約10m、幅５m以上の規模を持っており、段状遺構の南半分は盛土によってスペースを確保している。また、段状遺構の壁溝は、西側に延び、屋外に延びる溝肩部分からは石組みが検出されている。平坦部２・３は、南平坦部１の盛土下より検出されており、城が、幾度か改修されたことが判明した。

段状遺構からは、土師器小皿・瓦質擂鉢が出土している。遺物の時期から推して16世紀前半から中頃にかけての時期に山城が使用されたと考えられる。

東郭（図版８・写真図版12）

検出状況　調査区東端、尾根先端において検出した。１号墳墳頂を削平し、２号墳の東斜面を削り込み、平坦面を造り出している。郭の北端から通路状平坦部が延びている。

形状・規模　南北最大幅約8.0m、東西全長約5.0mの舌状を測る。

郭内施設　平坦面の中央付近には顕著な遺構はなく、中央郭との境より壁溝・柱穴を検出した。

壁　　溝　２号墳との境に南北方向に走る。１号墳の周溝を開削し再利用した可能性がある。規模は幅約70㎝・床面から深さ約20㎝を測る。溝内から柱穴３個を検出した。

柱　　穴　径約20㎝の柱穴を３個検出している。

出土遺物　出土遺物は認められない。

中央郭（図版９・写真図版13・14）

検出状況　尾根中央において検出した。２号墳墳頂を削平し、平坦面を造り出している。また、３号墳との間の溝を開削し再利用しており、掘削は郭の南西側にある段状遺構（南平坦部１）の北辺へと及ぶ。

形状・規模　南北短辺約6.0m、東西長辺約10.2mの長方形の平坦面である。

郭内施設　平坦面上の中央付近には顕著な遺構はなく、東郭よりに集石土坑SX01と柱穴２個、北西半には柱穴８個の柱穴と不定形の落ち込みが存在する。

集石土坑　長軸約1.0m・短軸約0.5m・深さ20cmを測る楕円形の土坑である。土坑上の東半には一辺20cm前後の河原石の集石が検出されている。また埋土は褐色シルト質極細砂である。

柱　　穴　径約30cmの柱穴を10個検出している。建物跡・柵列跡などは復元できない。

出土遺物　出土遺物は認められない。

西郭（図版９・写真図版15）

検出状況　調査区西端、尾根上において検出した。３号墳墳頂を削平し、平坦面を造り出している。また、２号墳、４号墳との間の溝を開削し再利用しており、掘削は郭の南東側にある段状遺構（南平坦部１）の北辺へと及ぶ。

形状・規模　南北約4.5m、東西約4.5mの方形の平坦面である。

郭内施設　平坦面の中央付近には土坑状の落ち込みがあり、周辺より柱穴を検出した。土坑状の落ち込みの性格は不明である。樹木の根跡の可能性がある。

柱　　穴　径約20cmの柱穴を３個検出している。

出土遺物　出土遺物は認められない。

SD301（図版９・写真図版16）

検出状況　中央郭・西郭間の溝及び南平坦部１の北辺にとりつく成形部分からなる。古墳に伴う溝を開削し再利用している。溝は南平坦部１の東側を南に下っていたと考えられるが、左肩は消失している。

形状・規模　溝の断面形状は逆台形を呈し、上部の幅約3.0m、底部幅約0.7m～1.0m、深さ約１mを測る。

出土遺物　城跡に伴う出土遺物はない。

SD401（図版９・写真図版15）

検出状況　西郭・４号墳間の溝である。古墳に伴う溝を開削し再利用している。

形状・規模　溝の断面形状は逆台形を呈し、上部の幅約2.5m、底部幅約0.5m、深さ約0.4mを測る。

出土遺物　城跡に伴う出土遺物はない。

通路状平坦部（図版６・９・写真図版19）

検出状況　調査区北半、北斜面において検出した。２号墳を削平し、盛土を施して平坦面を造り出している。通路状平坦部の東端は１号墳に取りつく。

形状・規模　東西全長約15m、幅約1.5mを測る。

出土遺物　出土遺物は認められない。

西郭下谷状地形（図版６・写真図版５）

検出状況　西郭・４号墳下方、溝SD401の流末の下方から開く谷状の地形である。

形状・規模　３号墳の下方に開く、扇形の落ち込みである。尾根の先端側に向けて回り込むように開いており、人為的に開削された可能性がある。深さは約0.4mを測る。

出土遺物　出土遺物はない。

備　　考　溝SD401とともに、耕地谷城跡の北西側を区切る。

北平坦部１（図版10・写真図版17）

検出状況　調査区北端において検出した。北向きの斜面に造られており、通路上平坦部に伴う盛土を一部掘り込んでいる。北から北東側にかけては斜面が崩落しており、平坦部についても当初の形状は留めていない。

形状・規模　平面形状は現状では三角形、東西残存長9.6m・南北最大幅5.6m、床面までの深さ約２ｍを測る。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周 壁 溝　Ｌ字形に山側を巡る。幅約20㎝・床面から深さ10㎝を測る。北端では溝が途切れており、溝が全周していなかった可能性が高い。東西辺のほぼ半ばに南北方向に分岐する全長0.9mの溝が存在する。間仕切りに伴う可能性が高い。

柱　　穴　径20㎝～80㎝の大きさの柱穴を11個検出しているが屋根を支える主柱穴は特定できない。概ね山側に寄って掘られている。

出土遺物　２点図示した。

土 製 品（図版32・写真図版45）　８は土製の鋳型片である。鋳型の上部は平滑である。内外面は接着していた粘土が剥離した部分が多く、鋳型の当初の形状は詳らかではないが、内面に極僅か真土が残り、赤変している。

鉄 製 品（図版32・写真図版45）　F1は鉄釘である。先端を欠損する。頭部を敲いて平坦部を作り出す、頭作り出し類の釘である。

北平坦部２（図版６・写真図版18）

検出状況　調査区北斜面において検出した。北平坦部１と幅約１ｍの通路状空間を隔てて西隣に存在する。北向きの斜面に造られているが斜面が崩落しており、当初の形状規模を留めていない。北平坦部１と違い、明瞭な掘り込み、壁溝、柱穴などの施設はない。また、床面は水平ではない。

形状・規模　平面形状は現状では三角形、東西残存長約８ｍ・南北幅約４ｍを測る。

出土遺物　出土遺物は認められない。

南平坦部１（図版11・写真図版20・21）

検出状況　調査区中央南より、尾根直下において検出した。南向きの斜面に造られており、中央郭（２号墳）を一部掘り込んで造られている。平坦部の南半部は、土を盛り出して造り出しており、一部が平

坦部２・３を埋めている。南辺は斜面が崩落しており、当初の形状規模を留めていない。

形状・規模　現状では平面形状は台形、東西長10.6m・南北短辺4.0m、長辺約5.0m、尾根側の床面までの深さ約1.6mを測る。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周壁溝（SD001）　コ字形に山側を巡る。幅約30㎝･床面から深さ10㎝を測る。東端では溝は北東コーナーを巡った所で途切れており、全周していなかった可能性が高い。また、西辺側では、南西隅付近から傾斜に沿って流れだしており、平坦部の出口周辺の谷側の溝肩にのみ石組が施されている。

柱　　穴　直径40㎝～80㎝の大きさの柱穴を14個検出している。山側の壁溝に接して並ぶ柱穴列と、約２m柱間を空けて位置する２個の柱穴が屋根を支える柱穴と考えられる。

遺物出土状況　床面上から土師器皿１・土師器鍋５・瓦質擂鉢７が、SD001から土師器皿２・４が出土している。

出土遺物　６点図示した。

土　　器（図版32・写真図版43･44）土師器小皿１は口縁部が内湾する非ロクロ土師器である。底部外面に指押え整形痕が残る。赤橙色調を呈する。２は丸底気味の底部から、体部が内彎気味に外上方に立ち上がり、口縁部に至る。４は底部が平底であり、体部との境は丸みを帯びる。口縁部は強いヨコナデによって外反し、水平に拡張する。端部内面が窪む。５は土師器鍋である。口縁端部の外側面は強いヨコナデによって面を持ち、内面は窪む。体部には右上がりの平行叩きを施す。内面はナデ調整を施す。７は瓦質擂鉢である。口縁端部を強いナデによって外側につまみ出し拡張、上部に面をもつ。体部外面は指押え整形の後、縦ハケ調整を施す。内面はナデ調整を施す。

鉄 製 品（図版32・写真図版45）F2は幅が広い長方形の断面をもつ鉄楔である。先端を欠く。頭部を敲いて平坦部を作り出す、頭作り出し類の楔である。平坦面の上層から出土した。

備　　考　周壁溝は南西に流れ出し、下方の南斜面平坦面群を避けている可能性がある。

南平坦部２（図版13・写真図版23）

検出状況　調査区中央南より、尾根直下において検出した。南向きの斜面に造られており、南平坦面１の下より検出された。平坦部の南半部は、土を盛り出して造り出しており、平坦部３を埋めている。南辺は斜面が崩落しており、当初の形状規模を留めていない。

形状・規模　平面形状は、コの字に掘り込み更に西側に張り出しをもつ。規模は東西長約10m・南北３m以上の規模をもつ。深さは約0.6mを測る。

屋内施設　周壁溝・柱穴を検出した。

周 壁 溝　コ字形に山側を巡り、更に西側へ「く」の字に走る。幅約30㎝・床面から深さ20㎝を測る。西辺の流末は、下方の南斜面平坦面群に当たっており、南斜面平坦面群よりも先行して営まれていたと考えられる。

柱　　穴　直径30㎝前後の柱穴を３個検出している。山側の壁溝中に位置する柱穴は壁を支える柱穴と考えられる。

出土遺物　図示できる遺物はない。

備　　考　南斜面平坦面群よりも古くに営まれたと考えられる。

南平坦部３（図版13・写真図版23）

検出状況　調査区中央南より、尾根直下において検出した。南向きの斜面に造られており、南平坦面１・２の下より検出された。平坦部の南半部は、土を盛り出して造り出している。南辺は斜面が崩落しており、当初の形状規模を留めていない。

形状・規模　平面形状は、コの字に掘り込む。規模は東西長約８ｍ・南北2.5ｍ以上の規模をもつ。深さは約0.4ｍを測る。

屋内施設　周壁溝を検出した。

周 壁 溝　コ字形に山側を巡る。部分的に掘り替えており、幅約20㎝・床面からの深さ15㎝を測る。西辺の流末は、下方の南斜面平坦面群に当たっており、南斜面平坦面群よりも先行して営まれていたと考えておく。

出土遺物　図示できる遺物はない。

備　　考　南斜面平坦面群よりも古くに営まれたと考えられる。

南斜面平坦面群（図版12・写真図版24）

検出状況　調査区南半、拡張区より検出した。平坦面は南向き斜面の標高21ｍ～15ｍの間の急斜面に造られており、大きく上段・中段・下段に分かれている。いずれも平坦面にあたる部分がほとんど、滑った状態で検出された。

平坦面はＡ～Ｈの８か所で営まれ、その内Ｅ・Ｆ・Ｇでは１～２回の建て替えが行われている。

形状・規模　平面形状は、いずれも斜面をコの字に掘り込む。規模は東西幅約８ｍ前後のＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄと５ｍ前後のＥ・Ｆ・Ｇに大きく分かれる。

屋内施設　Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｆでは周壁溝を検出した。

周 壁 溝　幅約20㎝～40㎝、深さはほとんどが痕跡程度である。

遺物出土状況　上段の平坦面より土師器皿３・６が出土している。

出土遺物　２点図示した。

土　　器（図版32・写真図版43）３は丸みを帯びた底部・体部に、口縁部は外反する。端部のつまみ上げは乏しく直線的である。６は４に比べ、口径・底径が大きく、口縁端部の拡張は少ない。内面底部・体部の境目は強い横ナデによって低い凸状の隆起がめぐる。

備　　考　南平坦面１と同時期、南平坦面２・３よりも新しく造られたと考えられる。

２　包含層出土遺物

土　　器（図版33・写真図版47）21は土師器甕の頸部付近の破片で、古墳時代前期のものと思われる。南平坦面の西部斜面の流土中から出土しており、本来３号墳に伴っていた可能性も考えられる。

石　　器（図版32・写真図版45）S1は投弾と考えられる球形の石である。４号墳の裾部から出土した。下層遺構に伴う可能性や、擂り石などの可能性も残るが、城跡からの出土を考慮し、投弾（礫）としておく。直径約5.5㎝、重量185.2ｇを測る。S2は南斜面から出土した礎石であり、写真図版45正面上寄りが微かに円形にくぼんでいる。石材は玄武岩である。

第３節　下層遺構（耕地谷古墳群）の成果

１　耕地谷古墳群の位置と検出状況

北東方向に伸びる丘陵の突端部尾根筋において、当初４ヶ所の墳丘状の隆起地形が認識されていた。本発掘調査の結果、東側２ヶ所は主体部が確認されたため古墳２基（東から１号墳、２号墳と呼称する）が認識されるに至ったものの、西側２ヶ所からは主体部が確認されなかった。西側２ヶ所のうち東側の隆起頂部平坦面では土坑状の落ち込みが認められたが、主体部として認識しうるものではなかった。しかしながら、西側２ヶ所の間に溝が存在し、須恵器坏身が出土している。また、先述の通り３号墳墳丘斜面裾部にあたる城郭遺構南平坦面の西部斜面の流土中から、古墳時代前期のものと思われる土師器甕の頸部の破片が出土しており、本来３号墳に伴っていた可能性も考えられる。ここでは西側２ヶ所両者が古墳である可能性を積極的に評価し、便宜的に東側から３号墳、４号墳と呼称することとする。

各墳丘上の平坦面からは、豊岡盆地の広い範囲を見渡すことができ、東側に三開山を望み、眼前に円山川と、そこに合流する出石川沿いに出石市街地方面にかけてを遠望することができる。

なお、古墳群は調査着手以前の地目は山林であり、城郭遺構造成時より以降には、大きな削平などは受けていないものとみられる。

２　１号墳

墳　　丘（図版16～17・写真図版26～27）　丘陵の突端部に立地し、調査区内では尾根筋の最低所に位置する。墳頂平坦面は頂点の丸い三角形状を呈し、長さ4.30m、幅7.38mを測る。中央部付近での標高は22.0mを測り、墳裾基端部の形状が活かされていると推察される城郭北テラス面からの高さは約2.9mを測る。西側に隣接する２号墳との境界に溝が区画されるが、溝内からの出土遺物がないために古墳群に伴うものとは断言できない。１号墳の主軸は２～４号墳の主軸とずれていること、２号墳の主体部群の位置が墳頂平坦面上の東寄りに偏っていることなどから、先に造られた２号墳の東斜面から墳裾を削平して、新たに平坦面を確保したものと推察される。なお、墳丘の北側斜面は城郭北テラス遺構を造成する際に削られている。

墳頂平坦面上において３基の木棺墓を検出し、丘稜尾根筋に直交する南北方向に主軸を持つSX101・SX102と、尾根筋に平行する東西方向に主軸を持つSX103とが、空間分有型配置をなす。

SX101（図版18～19・写真図版28）

検出状況　１号墳墳頂平坦面の南西寄りに位置する。他の墓壙との切り合いは認められず完存する。

埋没状況　４層以下は１～３層に比して中礫を多く含み緊密度が緩く、特に７層では顕著である。７層に関しては棺の蓋板や側板が腐朽し、裏込め上部や棺上の土が崩れ落ちたものである蓋然性が考えられる。その際、南側の小口板がいち早く朽ちた可能性がある。４・５層は７層上面のくぼみに周囲から堆積した墓壙内上部の埋土であろうか。１～３層は極細砂から細砂で構成され、墳丘ないしテラス状上部に堆積した流土層に近い。

墓　　壙　平面形は隅丸長方形を呈し、尾根筋と直行する主軸方向を持つ。長さは2.43m、幅は1.84m、検出面からの深さは85㎝を測る。墓壙の掘削は、基本的に２段掘りにより行われている。１段目、２段目ともに法面の傾斜は割と急である。長軸方向の２段目ではより垂直に近く掘削され、埋葬施設同様に箱形に近い断面形をなす。

埋葬施設　木棺を埋葬施設とする。墓壙検出面より約60㎝掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認すること

ができた。棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.19m、幅48cmを測り、墓壙の規模に対して短めの棺であり、墓壙の南東側に偏っている。棺として認識できた部分の深さは13cmを測る。後述する管玉の出土位置から北側が頭位方向と考えられ、棺の主軸方向はN49.4°Wを指向する。

遺物出土状況　棺内北東隅付近において管玉が出土している。墓壙内の棺検出レベル付近において、裏込め土中から鉢と考えられる破片が出土した。図版19に示した通り、同一個体の鉢の破片を棺西側の２ヵ所に配置している。棺南西隅付近では破片が４片に割れた状態で水平方向に配置され、棺頭部付近の西側では破片が３～４段に積み重ねられていた。

出土遺物

土　　器（図版33・写真図版46）　９は墓壙内裏込め土中から出土した。残存端部の解釈に戸惑うが、口縁部が生きていると考えた場合鉢となる。甕である可能性を捨て切れないが、煤の付着は認められない。尖り気味の底部付近はわずかに小円形の平坦面を持つ。内外面ともに斜め方向のハケ調整を施す。

玉　　類（図版34・写真図版41）　Ｊ１は碧玉製の管玉である。層理がマーブル状の模様として表面に浮き出ており美しい。両端より鋭利な錐状の工具により回転穿孔されている。レントゲン写真で明らかなように、穿孔過程で両面穿孔における孔道両者の先端が当初折り合いよく出会っていない。途中まですれ違って穿孔された後に、孔径を大きくしている段階でようやく孔道両者が重なっており、かろうじて貫通している。長さ3.13cm、幅0.65cmを測り、円孔の最大径は3.9mmである。

SX102（図版20・写真図版29・30）

検出状況　１号墳墳頂平坦面の南東寄りに位置する。他の墓壙との切り合いは認められず完存する。

埋没状況　３～７層は中礫をよく含み、棺腐食に起因する墓壙埋土の落ち込んだものと考えられる。９・10層は棺裏込め土であり、７層が10層に近いこともあり裏込め土が崩れた可能性も考えられる。１・２層は３層上面のくぼみに堆積した流土層ないしは旧表土層と考えられる。

墓　　壙　平面形は隅丸長方形を呈し、尾根筋と直行する主軸方向を持つ。長さは2.63m、幅は80cm、検出面からの深さは45cmを測る。墓壙の掘削は、基本的に１段掘りにより行われている。ただし北側に狭い平坦面を１段設けており、ステップとしての機能を果たした可能性がある。墓壙底付近ではより垂直に近く掘削され、埋葬施設同様に箱形に近い断面形をなす。墓壙底部中央部付近には扁平な礫が水平に設けられ、棺台とした可能性がある。

埋葬施設　木棺を埋葬施設とする。墓壙検出面より約20cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.95m、幅63cmを測り、墓壙の東側に偏っている。棺として認識できた部分の深さは16cmを測る。後述する鉄製品の出土位置から北側が頭位方向と考えられ、棺の主軸方向はN51.1°Wを指向する。

遺物出土状況　棺内西棺側寄りの北端においてヤリガンナ（F9）が頭位側小口に刃部を向けた状態で、棺の主軸方向とほぼ平行して出土した（写真図版30）。棺内東棺側寄りの中央よりやや北側では、鉄鏃（F5）の刃部が棺側の南側上方を向いて斜めに傾いた状態となっていた。

出土遺物

鉄 製 品（図版34・写真図版48）　F9はヤリガンナで先端の刃部の大部分を欠損する。残存する刃部の

基部で若干幅が広くなり、横断面形が図正面側に凸レンズ状ないしは先端に近づくにつれて裏面側が若干くぼむ三日月状となる。この残存する刃部範囲の正面側には明確な鎬を認められず、中央部の厚さは2.5㎜ほどである。柄は基端部を欠損するが、横断面長方形の平坦なもので、下半部分で正面側が波状に突出してカーブする。

F5は鉄鏃で身の平面形が縦長の六角形状を呈しており、圭頭鏃に分類されようか。山形に尖る先端部から身の両側は内湾しつつ刃部を形成し、関部は茎に対して斜行する。一方茎は関部から取り付いてからすぐに垂直に折れ曲がり、１㎝強ほどのところでさらに折れ曲がった先で折損し、それより先の茎破片と思われるものが錆着している。身部は平坦で鎬を形成しないため、横断面形は扁平なレンズ状を呈する。

SX103（図版21・写真図版31）

検出状況　１号墳墳頂平坦面の西寄りに位置する。他の墓壙との切り合いは認められないが、城郭北テラス遺構造成時に墳丘北側斜面とともに墓壙北西隅付近が削られている。

埋没状況　３～７層は中礫を多く含み、棺腐食に起因する墓壙埋土の落ち込んだものと考えられる。８層は小口板痕跡、９・10層は棺裏込め土である。３層上面のくぼみに堆積したと考えられる１・２層は、墳丘ないし城郭平坦面遺構上部に堆積した流土層に近い。

墓　　壙　平面形は長方形を呈し、尾根筋と平行する主軸方向を持つ。長さは2.43m、幅は1.26m、検出面からの深さは82㎝を測る。墓壙の掘削は、基本的に１段掘りにより行われており、横断面形および縦断面形は逆台形を呈する。墓壙法面の傾斜は割と急であるが、墓壙上半部と底付近の間に傾斜が緩やかになる部分があり２段掘りに近い形状となっている。

埋葬施設　木棺を埋葬施設とする。墓壙検出面より46㎝ほど掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であり、小口穴が設けられていることから箱形木棺であると判断される。墓壙の規模に対して長めの棺で長さが1.95m、幅68㎝を測り、小口間の距離は1.71mを測る。棺として認識できた部分の深さは23㎝を測る。後述する鉄製品の出土位置から北側が頭位方向と考えられ、棺の主軸方向はN38.4°Eを指向する。

遺物出土状況　棺内北部においてヤリガンナと思われる鉄製品２点（F6・F7）が、棺主軸方向に近い方向に２点並ぶようにして出土している。東側のヤリガンナ（F7）は刃部を頭位側小口に向けるが、西側のヤリガンナ（F6）先端部分の破片は逆向きである。なお、このほかにも棺内埋土中からヤリガンナ先端部の破片（F3）および鉄製品を包んでいたと思われる布片（T1）が出土している。

出土遺物

鉄 製 品（図版34・写真図版48）　F3・F6・F7はヤリガンナである。F3は先端部分であるが、残存状況が悪く刃部の形状の特徴が今ひとつ明確ではない。正面右側に木質が残存し、F7と接合する可能性がある。F6は柄の基部側約半分を欠損する。柄から刃部に至る部分で大きく曲がり、刃部は正面側に鎬が、裏面には裏すきが認められ、横断面形は三日月状を呈する。正面からみて左側に布織物（T2）が残存し、ヤリガンナを取り巻くように弧を描いている。T1と同一の布織物の可能性がある。F7は先端部と基端部を欠損するが、基部の方が先細りする横断面長方形の柄である。図正面右側に棺材と思われる木質が付着しており、樹種同定「針葉樹であり、スギあるいはヒノキ科の可能性が高い」との同定結果がでている（第４章参照）。

布 製 品（図版34・写真図版48） T1は布製品の一部で、縦横に織りなされている。横断面形が鋭角に折れ曲がり、包んでいた側面の形状が留められたものと思われる。

３　２号墳

墳　　丘（図版22～23・写真図版26）丘陵の突端部に立地し、調査区内では尾根筋の低い方から２段目に位置する。墳頂平坦面では墳丘の平面形は概ね長方形状に整えられるが、丘稜地形に左右され突端に近い東側がすぼまり、逆台形状ないしは五角形状を呈する。墳頂平坦面の規模は、検出した状態では長軸方向9.3m、短軸方向5.8mを測るが、城郭遺構の造営時に平坦状遺構の削り出しによって、南側斜面から裾部にかけての大半と北側斜面を改変されている。このため、削平以前は長軸9.6m以上、短軸方向7.4m以上はあったものと推測される。標高の最高所は北西寄りに偏った位置にあり、24.15mを測る。墳頂平坦面上は南東方向に向かって傾斜しており、尾根筋北側よりも南側の方がやや低い傾向がある。この墳頂平坦面最高所の、墳裾基端部の溝底の形状が活かされていると推察される城郭北テラス面からの高さは、約3.9mを測る。

墳丘の横断面・縦断面ともに台形状をなすが、３号墳との境界をなすカット部分が浅いため緩やかな傾斜となる。墳丘は尾根筋を削り出すことによって整形され、表面に盛り土した状況は認められなかった。長辺の墳裾両側には、帯状に幅広い溝状の掘り込みが段上に認められ、周溝である可能性が想定される。

後述する通り、古墳時代前期前半と位置付けられる土器が出土しているために古墳としているが、墳丘の形状そのものはいわゆる台状墓である。

墳頂平坦面上では、少なくとも７基以上の主体部を検出したが、そのまとまりは墳丘の東側に偏っており、西側は空白地帯となる。中央主体である木棺墓SX201を墳頂平坦面やや東寄り中央に配し、周辺に木棺墓４基および土坑２基が切り、土器棺墓１基が切り合わずにすぐ北側に隣接する。土坑２基も主体部の可能性を否定できないため、ここではSXの記号を冠して同列に扱うこととする。

遺物出土状況　２号墳表土掘削中に土師器片（10・11）が出土した。いずれも位置的にはSX203検出上部に相当する。

出土遺物

土　　器（図版33・写真図版46）10は複合口縁壺で、肩が張る。外面では櫛状工具（板状原体端部）により頸部に綾杉状に刺突列点文を施し、中央には軸線となる沈線を１条めぐらす。頸部から体部に移行する部分にも櫛状工具による左上がりの刺突列点文を施す。内面では頸部下半から体部にかけてヘラケズリを施す。11は椀形高坏で坏部の大部分を欠損する。スカート状に開く裾部には円孔が穿たれ、残存位置から本来４ヶ所存在したと考えられる。

溝（図版22・写真図版39）北側・南側に斜面を区画する溝、西側に３号墳との境界を画する溝を有する。北側の溝は長さ17.43m、最大幅3.45m、深さは最大で1.7m程度を測る。城郭北平坦面遺構の造設に伴い北東側の一部は削られている。南側の溝は長さ15.1m、復元幅2.3m、深さは最大で1.9m程度を測る。やはり城郭南平坦面遺構の造設に伴って中央部分が削られている。西側の溝は墳丘構築当時、当然ながら３号墳は存在しないため、尾根から２号墳をカットするものである。２号墳墳頂端部から３号墳墳頂端部までの幅4.2m、両者をつなぐラインからの深さ60cmを測るが、３号墳構築時、ひいては城郭西郭遺構造設時に改変されている可能性も否定できない。

SX201（図版25・写真図版32・33）

検出状況　２号墳墳頂平坦面の中央より北東寄りに位置する。四隅はいずれも主体部と目される墓壙状の掘り方に切られている。すなわち、南西隅はSX202に、北西隅はSX203およびSX204に、南東隅はSX206に、南西隅はSX207に切られ、さらに北側はSX205に切られている。

埋没状況　４層以下は１～３層に比して地山礫である中礫を多く含み、特に７層では顕著である。４～７層に関しては棺の蓋板や側板が腐朽し、裏込め上部や棺上の土が崩れ落ちたものである蓋然性が考えられる。１～３層は極細砂から細砂で構成され、墳丘ないしテラス状上部に堆積した流土層に近い。４層以下の崩落後、５層上面のくぼみに堆積したものであろう。13・14層は小口板痕跡、11・12・17・18・21・22・26層は棺裏込め土と考えられる。

墓　　壙　平面形は四隅が切られるため隅丸状となるかどうかは不明であるが、長方形を呈する。

残存しないものの隅丸長方形を呈し、尾根筋と直行する主軸方向を持つ。長さは4.17m、幅は残存する最大部分で2.39m（復元最大幅2.52m）、検出面からの深さは82cmを測る。墓壙の掘削は２段掘りにより行われている。ただし、南西隅で局所的にさらにもう１段狭い長方形の平坦面を設けており、ステップとしての機能が考えられる。１段目、２段目ともに法面の傾斜は割と急である。長軸方向の２段目ではより垂直に近く掘削され、埋葬施設同様に箱形に近い断面形をなす。

なお、棺北側板外部中央付近の裏込め土中に直径11～24cm大の礫を棺裏込めのために配置している。

埋葬施設　木棺を埋葬施設とする。墓壙検出面より約61cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であったと推察される。長さが1.99m、幅58cmを測り、墓壙が大規模であるため、それに比べるとやや短めの棺である。棺として認識できた部分の深さは19cmを測る。木棺痕跡の幅が開いている方向と後述する鉄鏃の出土位置から東側が頭位方向と考えられ、棺の主軸方向はN59.5°Eを指向する。

遺物出土状況　棺内北棺側東部付近においてヤリガンナと思われる鉄製品が出土している。このほか埋土中より土師器（12～14）が出土している。

出土遺物

土　　器（図版33・写真図版47）　12は甕の屈曲する頸部から肩部付近の破片で、体部内面にはヘラケズリを施す。13は椀形高坏の口縁部付近の破片で、口縁端部をわずかに外方へ如意形状に開かせる。14は器台の裾部で、端部付近でわずかに屈曲気味に開く。

鉄 製 品（図版34・写真図版48）　F8はヤリガンナである。刃部を欠き、正面右側に棺材と思われる木質が付着し、左側に布織物の一部が残存している。柄は基部に向かって若干太くなり、厚さも厚くなっている。なお、小片に鮮やかな発色の赤色顔料が認められる（写真図版41）。発色の状態から水銀朱と予想されたが、蛍光X線分析装置により測定を行った結果Hgが検出され、裏付けがなされた。

SX202（図版26・写真図版34）

検出状況　２号墳墳頂平坦面南端の中央付近に位置する。SX201の南西隅を切るが、切られる遺構はないため完存する。

埋没状況　１～５層の緊密度が低く、中心付近が著しく落ち込む。本来２～６層に関しては棺の蓋板や側板が腐朽し、裏込め上部や棺上の土が崩れ落ちたものである蓋然性が考えられるが、中心付近の堆積状況は樹木の根などで攪乱された可能性も想定される。７層は特に色調が暗く、他の木棺墓の裏込め土

が崩落したと見られる状況とは大きく異なる。８層は棺裏込め土と考えられる。

墓　　壙　平面形は隅丸長方形を呈する。尾根筋と平行する主軸方向を持つ。長さは1.41ｍ、幅は西側に膨らむ最大幅では90㎝あるが、概ね80㎝程度である。検出面からの深さは中心付近で41㎝を測る。墓壙の掘削は基本的には１段掘りにより行われている。ただし、四隅を中心とした周囲のほとんどの部分で幅狭い平坦面を１段設けている。法面の傾斜は割と急であるが、西側小口では比較的緩やかである。

埋葬施設　平面的には木棺痕跡を検出することができなかったが、土層断面の検討により墓壙底部付近に棺側ラインと考えられる立ち上がりを認識することで木棺墓の可能性を想定するに至った。このため棺痕跡の平面形は不明であるが、箱形木棺であったことが推定される。土層断面から復元した場合、長さが81㎝、幅40㎝となり小規模な棺である。棺として認識可能な部分の深さは12㎝前後である。頭位方向は不明であるが、墓壙底部付近の掘り方の形状から棺の主軸方向はＮ54.5°Ｅに復元される。

遺物出土状況　墓壙西半部分の棺底部付近の土壌を洗浄したところ、鉄鏃（F4）と考えられる鉄製品を検出した。

出土遺物

鉄 製 品（図版34・写真図版48）　F4は鉄鏃で、先端部を欠損する。残存する身部の平面形は逆台形状を呈し方頭鏃となるか、もしくは先端部が本来山形を呈する柳葉形を長くしたタイプになるのであろうか。細く横断面方形を呈する茎部とそこから斜行する関部を持つ。

SX203（図版26・写真図版35）

検出状況　２号墳墳頂平坦面のほぼ中央に位置する。SX201・SX205を切り、SX204に切られる。

埋没状況　15～17層が水平に近い状態で堆積する。なお、木棺痕跡などの明確な立ち上がりや局所的な落ち込みは認められなかった。

形状・規模　南端をSX204に切られるが、東西1.27ｍ、南北1.38ｍ以上、検出面からの深さ25㎝を測る本来南北に長軸方向を持つ長方形プランの掘り方であったことが推定される。しかしながら底部付近に幅53㎝程度、深さ７㎝ほどの浅い掘り込みが東西方向に認められ、ここに木棺を配する意図でこの土坑が設けられたことが想定される。ただし、掘り込みの長さが70㎝足らずと余りにも短い。この浅い掘り込みがSX205の木棺痕跡とほぼ近い位置にあることから、当初SX205墓壙がこの位置に掘削され、何らかの理由でSX205として検出した範囲・深さのものに変更がなされた可能性を指摘しておきたい。

遺物出土状況　埋土中より土師器甕片（15）が出土している。なお、検出上部（表土層）において土師器片（10・11）が出土している（墳丘出土遺物の項参照）。

出土遺物

土　　器（図版33・写真図版46）　15は、土師器甕の肩部付近の破片で、櫛状工具による左上がりの刺突列点文を施す。内面にはヘラケズリを施す。

SX204（図版26・写真図版35）

検出状況　２号墳墳頂平坦面の中央に位置する。SX201・SX203を切る。

埋没状況　12～14層は棺裏込め土が原位置に残存するものと考えられる。５～８層は緊密度が低いが裏米込め土に比べてベース土に含まれる岩盤風化礫の入り方が少なく、棺材腐朽時に棺内に落ち込んだ棺上部の土が堆積したものと考えられる。これらの層に比べて９層は緊密度があり、裏込め土に近く上部

が崩れて落ち込んだ可能性がある。１～４層は落ち込んだ５層上面の形状に影響されて堆積したものと思われる。

墓　　壙　平面形は方形を呈し、尾根筋と平行する主軸方向を持つ。長さは1.37m、幅は現存長1.19mで復元長1.39mである。検出面からの深さは73cmを測る。墓壙の掘削は、基本的に１段掘りにより行われており、横断面形および縦断面形は逆台形を呈する。墓壙法面の傾斜は急であるが、墓壙底付近ではより垂直に近く掘削され、埋葬施設同様に箱形に近い断面形をなす。

埋葬施設　木棺を埋葬施設とする。墓壙検出面より38cmほど掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺痕跡として調査された部分は隅丸長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であると判断される。長さ84cm、幅53cmを測り、棺として認識できた部分の深さは35cmを測る。頭位方向は不明であるが、棺の主軸方向はN58.5°Eを指向する。

遺物出土状況　墓壙内および木棺内部からの遺物は認められていない。

SX205（図版27・写真図版36）

検出状況　２号墳墳頂平坦面の中央付近やや東寄りに位置する。SX203・SX204に切られ、SX201の北側を切る。

埋没状況　水平な堆積状況である。４～６層は中礫を多く含み、棺腐朽に伴い墓壙埋土の落ち込んだものと考えられる。７層は地山礫中礫を多く含み、裏込め土が崩落した可能性が考えられる。２・３・９層はいずれも小口板の痕跡とみられるが、９層部分の小口板がいちはやく腐朽したのに対し、２・３層は倒れかかり完全に腐朽まで時間がかかったものとみられる。10～12層は棺裏込め土である。

墓　　壙　平面形は長方形を呈し、尾根筋と平行する主軸方向を持つ。長さは2.47m、幅は1.40m、検出面からの深さは59cmを測る。墓壙の掘削は、基本的に１段掘りにより行われ、横断面形および縦断面形は逆台形を呈する。墓壙法面の傾斜は割と急であるが、北東隅付近では傾斜が比較的緩やかになる部分がある。

埋葬施設　木棺を埋葬施設とする。墓壙検出面より29cmほど掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であると判断される。棺痕跡は墓壙の東側に偏った状態で検出され、長さが1.74m、幅48cmを測る。棺として認識できた部分の深さは31cmを測る。頭位方向は不明であるが、棺の主軸方向はN56.4°Eを指向する。なお、棺内東側に12cmと18cm大の地山礫が存在したが、意図的に置かれたものか棺内に落ち込んだ墓埋土に含まれていたものなのか判然としない。

遺物出土状況　棺内埋土中から土師器壺の破片（16）が出土している。

出土遺物

土　　器（図版33・写真図版47）　16は複合口縁の壺で口縁端部を欠くものの口縁部付近から頸部付近を留める。頸部屈曲部分において、破片どうしの割れ口は接合しないものの、肩部片は頸部への屈曲部への移行が明確であり、また複合口縁側の破片の残存する下端の状況も屈曲部への移行を示しており、両者がほぼ近接していることがうかがわれ、図のような屈曲する頸部を復元した。

SX206（図版28・写真図版37）

検出状況　２号墳墳頂平坦面の南東側に位置する。SX201の南東隅を切る。

埋没状況　全体的に水平な堆積状況であるが、少なくとも３～６層は棺腐朽に起因する墓壙埋土の落ち込んだものと考えられる。７層は棺裏込め土に近い土質でその上部が落ち込んだものであろうか、西小口付近に若干の変色部位が見られ棺痕跡の蓋然性が考えられる。13・14層は棺裏込め土である。２層は、３層以下が落ち込んだ際のくぼみに堆積した土、１層は表土である。

墓　　壙　平面形は長方形を呈し、２号墳中では唯一尾根筋と直行する主軸方向を持つ。長さは2.58m、幅は1.08m、検出面からの深さは61cmを測る。墓壙の掘削は、基本的に２段掘りにより行われている。ただし、東側は法面はほとんど段を設けず、西側の平坦面も幅が狭い。

墓壙法面の傾斜は割と急であるが、北東隅付近では傾斜が比較的緩やかになる部分がある。

埋葬施設　木棺を埋葬施設とする。墓壙検出面より23cmほど掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺痕跡として調査された部分は北側に開き気味の長方形状を呈し、棺側が垂直であることから箱形木棺であると判断される。棺痕跡は長さが1.82m、幅86cmを測る。棺として認識できた部分の深さは27cmを測る。頭位方向は棺幅の大きい北側と推察され、棺の主軸方向はN54.7°Eを指向する。

遺物出土状況　検出面付近において、土師器大形壺の底部片が、一方は内面、一方は外面を上に向けた形で出土している。

出土遺物

土　　器（写真図版47）24・25は土師器の大型の壺と思われる底部片（最大の厚みが2.7cm）である。摩耗が激しく、表面の調整などは不明である。

SX207（図版29・写真図版37）

検出状況　２号墳墳頂平坦面の北東側に位置する。SX201の北東隅を切る。

埋没状況　15・16・17層は棺裏込め土で、13層は小口板の存在した部分と考えられる。少なくとも３～５層は棺腐朽に起因する墓壙埋土の落ち込んだものと考えられる。２層は落ち込みのくぼみに堆積した土、１層は表土である。

墓　　壙　平面形は長方形を呈し、２号墳中では唯一尾根筋と直行する主軸方向を持つ。長さは2.63m、幅は1.67m、検出面からの深さは61cmを測る。墓壙の掘削は、基本的に１段掘りにより行われている。墓壙法面の傾斜は割と急であるが、墓壙底付近ではより垂直に近く掘削され、埋葬施設同様に箱形に近い断面形をなす。底部北側には小口穴が設けられ、長さ62cm、最大幅13cm、底面からの深さは最大で約６cmを測る。

なお、東西両側板の外部および南側小口板の外部に、礫が配されていた。それぞれの棺材を支持するために裏込め中に設けられたと思われる。東両側板の外部において北部には９～15cm大の角礫が、南部には７～18cmの角礫が、西両側板では南北両端に８～14cm大の円礫が、南側小口板外部には直径10cm大の亜角礫が配されている。この西側板外部の礫は墓壙南西隅に及ぶため、南側小口板外部に配置された礫の位置と合わせると木棺が本来H字形木棺であった可能性が生じてくる。

埋葬施設　木棺を埋葬施設とする。墓壙検出面より29cmほど掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺痕跡として調査された部分は長方形を呈し、棺側が垂直であること、小口穴が設けられていること、上記の裏込めに設けられた礫の配置状況から本来H字形木棺であった可能性が想定される。棺痕跡は墓壙の東側に偏った状態で検出され、復元長が2.15m、幅57cmを測る。棺として認識できた部分の深さは32cmを測る。頭位方向は不明であるが、南側小口に向かって若干幅広となるため南側の可能

性を指摘しておく。棺の主軸方向はN36.0° Wを指向する。

遺物出土状況　墓壙内および棺内からの出土遺物は認められなかった。

SX208（図版30・写真図版38）

検出状況　２号墳墳頂平坦面の中央付近やや北側に位置する。SX201の北側に位置するが切り合い関係はない。遺構検出面において土器棺の蓋の一部が露出した状況であった。

埋没状況　２・３層は棺身である土師器複合口縁壺の上半部崩落の際に落ち込んだものと考えられる。１層はその落ち込みに起因するくぼみに堆積した土であろう。

墓　　壙　平面形は楕円形を呈し、尾根筋と斜行する北西から南東への主軸方向を持つ。長さは66㎝、幅は58㎝、検出面からの深さは28㎝を測る。断面形は逆台形状を呈し、墓壙底部は平坦に近い浅い皿状を呈する。棺の主軸方向はN54.0° Wを指向する。

遺物出土状況　高坏（17）を蓋にし、複合口縁壺（19）を棺身とし、底部に打ち欠かれた穿孔箇所に甕の破片（18）をあてがっている。

出土遺物

土　　器（図版33・写真図版41・46）17は高坏の坏部である。口縁がわずかに外反して如意状に開く。外面には横方向のミガキを施し、内面には斜め方向のハケののち縦方向のミガキを施している。外面の横方向のミガキが幅２～３㎜の細いものであるのに対し、内面のタテ方向のミガキは幅５㎜程度と太めである。18は甕胴部。肩部に櫛状工具による右上がりの刺突列点文を施す。体部外面は摩滅が激しいがミガキが施されている可能性がある。体部内面上半は指頭圧痕を顕著に留め、下半は横方向のケズリが施されている。19は倒卵形の体部に肩が大きく張る。底部は尖り底に近いが、一定の範囲で接地面を持ちつつ丸く収まり、屈曲が激しく短い頚部の特徴も含め布留Ⅰ式と判断した。単位あたりの条数が非常に密なハケ原体を用いた縦ハケないし斜め方向のハケ調整を施し、胴部最大径付近には横方向のハケを施す。一方内面では、胴部上半には横方向のヘラケズリ、下半には斜め方向のヘラケズリを施す。

４　３号墳

墳　　丘（図版31・写真図版39・40）丘陵突端部に近い尾根筋状に立地し、調査区内では尾根筋の低い方から３段目に位置する。墳頂平坦面では平面形は概ね正方形状に整えられるが、南北の裾が深くなるために墳丘の平面形は隅丸長方形となる。墳頂平坦面の規模は尾根筋方向に主軸を持つ長軸方向が4.6m、それに直行する短軸方向が4.2mを測る。墳丘は尾根筋と直行する方向が長軸方向となり、墳丘裾部では9.1m、短軸方向6.7mを測り、墳裾から墳頂までの高さは1.7mを測る。なお、南東隅から南側半分にかけての裾部が、城郭遺構の造営時に平坦状遺構の削り出しによって改変されている。このほか城郭西郭遺構の造営時に、墳頂平坦面には土坑SX301が掘り込まれ、２・４号墳との境界の溝も改変されている。墳頂平坦面における最高所は西寄りに偏った位置にあり、24.72mを測る。すなわち、墳頂平坦面上は尾根筋の東側（北東方向）に向かって傾斜している。墳丘の縦断面は台形をなすが、横断面形は椀をかぶせた形状を呈している。

遺物出土状況　上層遺構の包含層遺物の項（P.17）で報告した通り、３号墳墳裾付近に該当する城郭遺構南平坦面の西部斜面の流土中から土師器甕の頚部(21)が出土している。本来３号墳に伴う遺物であった可能性が考えられる。

５　４号墳

墳　　丘（図版31・写真図版40）丘陵突端部に近い尾根筋状に立地し、調査区内では尾根筋の低い方から４段目、すなわち最高所に位置する。墳丘の西側は調査区外に及び、全体の約半分から６割程度を検出するにとどまっている。墳頂平坦面は、全容は不明ながら３号墳と比較して周縁が丸みを帯び尾根筋方向に長軸方向をもつ隅丸長方形ないしは楕円形墳丘をなすと考えられ、墳丘の平面形は隅丸方形ないしは尾根筋と直行する方向に長軸をもつ長方形となろう。墳頂平坦面の規模は尾根筋方向に主軸を持つ長軸方向が検出長2.4m、それに直行する短軸方向が3.1mを測る。墳丘は尾根筋と直行する方向が長軸方向となり検出長3.7m、短軸方向7.7mを測り、墳裾から墳頂までの高さは1.7mを測る。なお、城郭西郭遺構の造営時に３号墳との境界の溝が改変されている。墳頂平坦面における最高所はほぼ中央かやや北西寄りに偏った位置にあり、検出範囲内では25.06mを測る。すなわち、墳頂平坦面上は尾根筋の東側（北東方向）に向かって傾斜している。墳丘の縦断面は３号墳同様台形をなすが、横断面形は３号墳にまして椀形の形状が顕著である。

遺物出土状況　３・４号墳間溝から須恵器坏身（20）が、溝底部から若干（６㎝程度）浮いた状況で出土している。

土　　器（図版33・写真図版46）20は須恵器坏身で、TK208型式併行と思われる。

第２表　出土土器一覧表

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土部位・層位	種別	器種	法量（cm）			残存/備考
							口径	器高	底径	
1	32	43	南平坦部１		土師器	小皿	8.6	1.9	5.2	口・体5/8 底近完
2	32	43	南平坦部１	SD001	土師器	小皿	(7.95)	1.7	(2.3)	口～底1/3弱
3	32	43	南斜面平坦面群	茶灰色土	土師器	小皿	(10.0)	1.9	(4.4)	口・体1/4 底極少
4	32	43	南平坦面１	SD001	土師器	小皿	(12.75)	1.7	—	口・体1/6 底極少
5	32	43	平坦部１		土師器	鍋	(24.9)	(4.8)	—	口1/8
6	32	43	斜面平坦面群		土師器	皿	(15.65)	(2.2)	(9.5)	口1/4 体3/1 底1/2
7	32	44	中央2号墳	表土を剥いだ遺構検出直上	瓦質土器	擂鉢	(28.8)	(9.3)	—	口1/3 体1/8
8	32	45	北平坦部１		土製品	鋳型	長8.0	幅12.45	厚6.7	
9	33	46	SX101	墓壙埋土（裏込め土）	土師器	鉢？	9.9	5.85	1.15	口極少 体1/3 底近完
10	33	46	２号墳	墳丘表土(SX203上部付近)	土師器	複合口縁壺	12.55	(19.25)	—	口・頚3/3 体1/5
11	33	46	２号墳	墳丘表土(SX203上部付近)	土師器	高坏	—	(6.9)	16.6	脚 底2/3弱
12	33	47	SX201		土師器	甕	—	(4.2)	—	頚1/8
13	33	47	SX201		土師器	高坏	—	(2.6)	—	口縁部破片
14	33	47	SX201		土師器	器台	—	(3.2)	20.05	底1/8弱
15	33	47	SX203		土師器	甕	—	(4.25)	—	体部破片
16	33	47	SX205		土師器	複合口縁壺	—	(7.35)	—	頚1/8
17	33	46	SX208	埋土	土師器	高杯	20.0	(5.9)	—	土器棺蓋
18	33	47	SX208		土師器	甕	—	(16.0)	—	土器棺底破片
19	33	46	SX208		土師器	複合口縁壺	18.5	(40.0)	—	土器棺身
20	33	46	３・４号墳間溝		須恵器	坏身	11.4	4.75	5.9	口1/6弱 体・底近完
21	33	47	南斜面平坦面群		土師器	甕	—	(2.7)	—	頚部破片
22		44	３号墳		無釉陶器	甕	—	—	—	体部片
23		44	３号墳		無釉陶器	甕	—	—	—	体部片
24		47	SX206	検出面	土師器	壺？	—	—	—	破片
25		47	SX206	検出面	土師器	壺？	—	—	—	破片

第３表　出土石製品一覧表

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土層位	種別	器種	法量（cm）			備考
							長さ	幅	厚さ	
S1	32	45	４号墳裾		石製品	投弾	6.42	5.58	5.50	
S2	—	45	南斜面		石製品	礎石	34.0	31.5	13.5	玄武岩

第４表　出土玉類一覧表

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土層位	種別	器種	法量（cm）			備考
							長さ	幅	厚さ	
J1	34	41	SX101	棺内底部	玉類	管玉	3.13	0.65	—	碧玉製、完形

第５表　出土鉄製品一覧表

報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	出土層位	種別	器種	法量（cm）			備考
							長さ	幅	厚さ	
F1	32	45	北平坦部１		鉄製品	釘	4.8	1.01	1.0	
F2	32	45	南平坦部１	（東西サブトレ）	鉄製品	楔	9.5	1.7	1.48	
F3	34	48	SX103	棺内底部	鉄製品	ヤリガンナ	(2.9)	0.85	0.8	
F4	34	48	SX202	棺内底部	鉄製品	鉄鏃(方頭)	5.31	1.5	0.5	
F5	34	48	SX102	棺内底部	鉄製品	鉄鏃(圭頭)	7.78	2.66	0.49	
F6	34	48	SX103	棺内底部	鉄製品	ヤリガンナ	(5.79)	1.21	0.3	
F7	34	48	SX103	棺内底部	鉄製品	ヤリガンナ	(12.36)	2.09	1.95	
F8	34	48	SX201	棺内底部	鉄製品	ヤリガンナ	15.44	1.6	0.4	
F9	34	48	SX102	棺内底部	鉄製品	ヤリガンナ	16.3	1.1	0.5	

第４章　耕地谷古墳群出土遺物の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社
矢作健二・石岡智武・高橋　敦

はじめに

今回の分析調査では、耕地谷古墳群を構成する古墳から出土した、古墳時代前期とされる土師器について、その材質（胎土）の特性を明らかにする。また、古墳主体部より出土したヤリガンナに付着した木質の樹種の同定も行う。これらの分析結果により、耕地谷古墳群を作った人々の生業に関わる資料を作成する。

第１節　土器の胎土分析

１　試　料

試料は、耕地谷古墳群の２号墳より出土した土師器片４点である。いずれも古墳時代前期前半のものとされている。４点のうち、３点は主体部のSX208より出土し、１点は墳頂より出土している。また、器種は甕、壺、高坏、複合口縁壺が各１点である。試料には試料No.1～4が付されている。各試料の試料No.、器種、出土遺構などは一覧表にして第６表に示す。

２　分析方法

当社では、これまでに兵庫県内各地の遺跡より出土した土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法を用いてきた。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いも見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。したがって、単に岩片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは試料間の胎土の区別ができないことが予想される、同一の地質分布範囲内で作られた土器の胎土分析には、松田ほか（1999）の方法は適当である。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03㎜の厚さに研磨して作製した。観察は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用い、胎土中に含まれる鉱物片、岩石片および微化石の種類構成を明らかにした。

砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて0.5㎜間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子を

第６表　分析試料一覧および胎土分類

試料No.	種別	器　種	時　期	遺　構	報告番号	胎　土　分　類		
						鉱物･岩石	粒径	砕屑物
1	土師器	甕	古墳時代前期前半	SX208	18	F4	m	20-25%
2	土師器	壺	古墳時代前期前半	2号墳墳頂	10	F5	m	20-25%
3	土師器	高坏	古墳時代前期前半	SX208	17	A3	m	20-25%
4	土師器	複合口縁壺	古墳時代前期前半	SX208	19	A3	m（突出）	20-25%

A3：岩石片の種類構成が主に堆積岩類と凝灰岩や流紋岩などの火砕岩類および花崗岩類などの深成岩類からなり、さらに珪化岩、変質岩類を含む。
F4：凝灰岩が多く、花崗岩類、変質岩、珪化岩などを伴うが、堆積岩類はほとんど含まれない。
F5：凝灰岩が多く、堆積岩類と花崗岩類を伴い、変質岩、珪化岩なども含む。
粒径：砂全体の粒径組成においてピークを構成する粒径　m;中粒砂
砕屑物：砕屑物・基質・孔隙における砕屑物の割合

ポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度の３次元棒グラフ、砂粒の粒径組成ヒストグラム、孔隙・砂粒・基質の割合を示す棒グラフを呈示する。

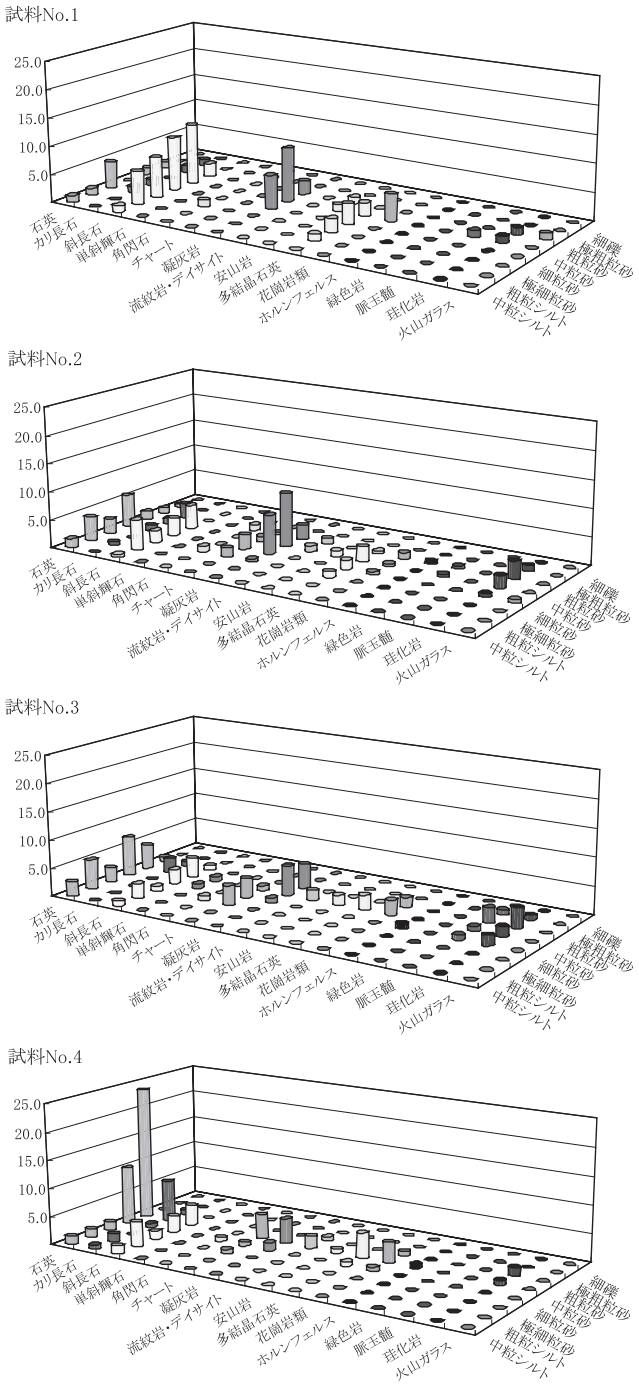
３　結　果

観察結果を第７表、第５図～第７図に示す。以下に各試料の胎土の特徴を述べる。

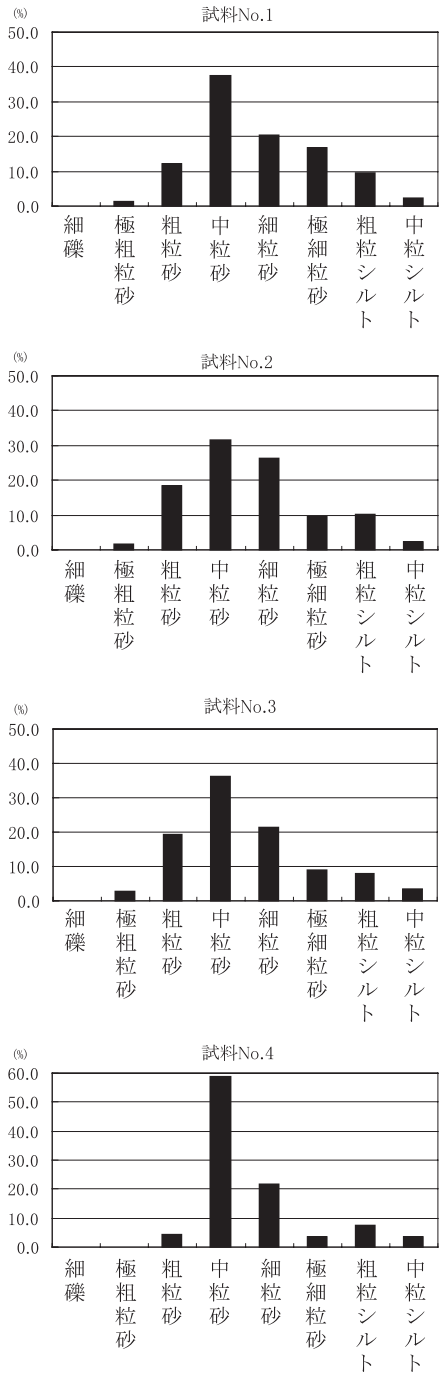
試料No.1：斜長石の鉱物片が最も多く、次いで凝灰岩の岩石片が多い。他に少量の石英やカリ長石の鉱物片や多結晶石英を伴い、微量の花崗岩類、変質岩、珪化岩の岩石片を含み、極めて微量の角閃石や黒雲母の鉱物片および頁岩や安山岩などの岩石片も含まれる。これまでに兵庫県内各地における弥生土器～土師器の胎土分析で認められている鉱物・岩石組成分類と比較すると、凝灰岩を主体とするF類に相当するが、斜長石の鉱物片が多いことや花崗岩類、変質岩、珪化岩の各岩石片を伴いながらも堆積岩類が極めて微量しか含まれないことなど、これまでに分類したF1～F3類までの組成には認められてい

第７表　薄片観察結果

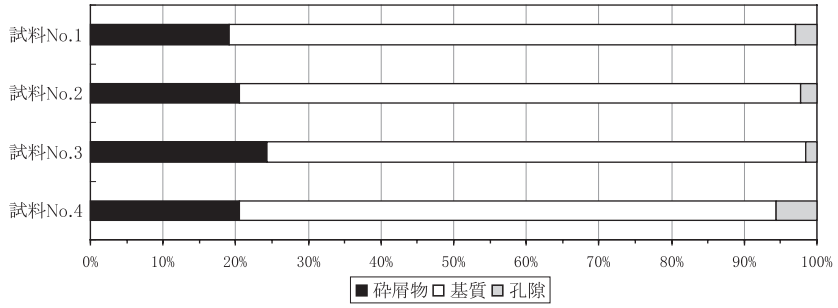
試料No	砂粒区分		砂粒の種類構成																						合計
			鉱物片									岩石片													
			その他	石英	カリ長石	斜長石	単斜輝石	角閃石	緑廉石	黒雲母	不透明鉱物	チャート	頁岩	凝灰岩	流紋岩・デイサイト	安山岩	多結晶石英	花崗岩類	珪長岩	ホルンフェルス	緑色岩	脈石英	脈玉髄	変質岩	珪化岩	
1	砂	細礫																								0
		極粗粒砂		1																						1
		粗粒砂	1	1	2									2		1							1	1	1	10
		中粒砂	1		9				1				1	8		1	2	4				1	2	1		31
		細粒砂		1	8									5			3									17
		極細粒砂	4	1	6		1										2									14
		粗粒シルト	1		5						1						1									8
		中粒シルト	1		1																					2
	基質																									338
	孔隙																									13
2	砂	細礫																								0
		極粗粒砂	1																					2		3
		粗粒砂	2	5			2				1		5	2		1	2	1	1	1			5	6		34
		中粒砂	3	2	8				2		2	6	18	2	2	5	1			1			3	4		59
		細粒砂	11	2	6						5	6	13			3	1							1	1	49
		極細粒砂	5		4		2			1	3		1			2										18
		粗粒シルト	8	1	10																					19
		中粒シルト	3		1																					4
	基質																									698
	孔隙																									20
3	砂	細礫																								0
		極粗粒砂																			1	1		1		3
		粗粒砂	1	1	1				1				5				2				3	3	1	4		22
		中粒砂	5	3	4	1					1	2	6	2	2	3	3				6	1		2		41
		細粒砂	8		3	1					4	1	1						1		2	1		2		24
		極細粒砂	3		1		1			1	4															10
		粗粒シルト	6		3																					9
		中粒シルト	3		1																					4
	基質																									346
	孔隙																									7
4	砂	細礫																								0
		極粗粒砂																								0
		粗粒砂		1										1			1						1	2		6
		中粒砂	32	10	5						6		6	3	1	6	5	1	1				2	1		79
		細粒砂	14	1	4		1	1		3	1		2			1	1									29
		極細粒砂	2		2						1															5
		粗粒シルト	2	2	6																					10
		中粒シルト	2	1	2																					5
	基質																									482
	孔隙																									37



第６図　各粒度段階における鉱物・岩石出現頻度



第７図　胎土中の砂の粒径組成



第８図　砕屑物・基質・孔隙の割合

ない。したがって、ここで新にF4類を設定する。なお、凝灰岩は結晶質である。粒径組成は中粒砂をモードとする単独峰のヒストグラムを呈し、砕屑物の割合は20%程度である。

試料No.2：凝灰岩の岩石片が最も多く、次いで石英と斜長石の鉱物片が多い。これに少量のカリ長石の鉱物片やチャートや頁岩からなる堆積岩類と花崗岩類および変質岩、珪化岩の各岩石片を伴い、微量の角閃石や黒雲母の鉱物片と流紋岩・デイサイトおよび安山岩の火山岩類、ホルンフェルスや緑色岩などの変成岩類まで多種類の砕屑物を含む。上述したように、これまでの分類基準に従えば凝灰岩を主体とするF類に相当するが、供伴する岩石片の組成は、F1～F3および上記のF4類とも異なることから、F5類とする。なお、凝灰岩や流紋岩・デイサイトは結晶質であり、珪化岩は凝灰岩・流紋岩の珪化したものである。粒径組成は中粒砂をモードとする単独峰のヒストグラムを呈し、砕屑物の割合は20%程度である。

試料No.3：石英と斜長石の鉱物片がやや多く、チャートや頁岩の堆積岩類、凝灰岩、花崗岩類、脈石英、玉髄、珪化岩の各岩石片が同量程度で少量ずつ含まれる。これまでの分類では、堆積岩類と凝灰岩および花崗岩類の３者を主体とする岩石組成をA類とし、これに変質岩や珪化岩を伴うものをA3類とした。今回の試料No.3はそのA3類に相当する。ただし、脈石英や玉髄はこの試料特有の特徴である。なお、玉髄の一部には流紋岩に付着するものがあることから、流紋岩に由来すると考えられる。また、珪化岩は凝灰岩・流紋岩の珪化したものである。粒径組成は中粒砂をモードとする単独峰のヒストグラムを呈し、砕屑物の割合は20%程度である。

試料No.4：石英の鉱物片が突出して多く、カリ長石や斜長石の鉱物片とチャート、凝灰岩、花崗岩類の各岩石片が少量含まれ、流紋岩・デイサイトや安山岩、ホルンフェルス、変質岩、珪化岩の各岩石片が微量伴われる。岩石片の組成から、上述の試料No.3と同様にA3類に分類される。粒径組成は中粒砂をモードとする単独峰のヒストグラムを呈するが、中粒砂の割合が突出して多いことで他の３点とはことなる。砕屑物の割合は他の３点と同様に20%程度である。

4　考　察

今回の土師器試料４点の胎土には、地質の異なる岩体に由来する多種類の岩石片の混在が認められた。このことは、複数の地質の分布をその流域にもつ河川の下流域に堆積した砂や粘土が土器の原材料に使われていることを示唆している。耕地谷古墳群は、豊岡盆地を流れる円山川左岸の沖積低地を望む山地縁辺の斜面上に位置する。円山川流域の地質については上村ほか（1974）や猪木（1981）および日本の地質「近畿地方」編集委員会（1987）などにより確認することができる。最上流部の山地には、白亜紀の凝灰岩や溶岩からなる相生層群（有馬層群）が広く分布し、和田山町付近の上流域には中生代ジュラ紀の堆積岩からなる丹波帯や白亜紀の花崗岩からなる和田山花崗岩が分布し、支流の東河川の両岸山地には古生代の堆積岩類からなる舞鶴帯も分布する。和田山町から八鹿町および豊岡市南部にかけての山地には白亜紀の流紋岩～デイサイトの火砕岩類からなる矢田川層群が分布し、その下流側の山地には新第三紀中新世の安山岩類からなる八鹿累層が分布し、耕地谷古墳群の背後の山地は新第三紀中新世の礫岩･砂岩からなる豊岡累層が分布している。また、耕地谷古墳群から見て対岸の円山川右岸側の山地は、白亜紀の花崗岩類である宮津花崗岩により構成されている。

ここまでの記載により、今回の試料に認められた岩石片の由来となる地質は全て揃っていることがわかる。また、胎土に認められた岩石とは異質とされる地質の分布も認められない。したがって、今回の試料とされた土師器の胎土は、いずれも円山川流域の堆積物に由来する可能性が高い。F4類とF5類お

よびA3類の違いは主に凝灰岩と堆積岩類との量比関係に基づくものであるが、上述した円山川流域の地質分布からみれば堆積岩類は凝灰岩よりも上流に分布していることから、堆積岩類の多いA類の方がF類より上流の地域に由来する可能性がある。耕地谷古墳群の位置を基準にすれば、F4類がより在地性が高く、次いでF5類、A3類ということも想定することができる。一方、円山川を挟んで対岸の山地は花崗岩類からなる山であるから、山地縁辺の堆積物は花崗岩類に由来する鉱物片や岩石片の割合が高いことが推定される。今回の試料の中には、そのような組成は認められないことから、少なくとも対岸の山地縁辺の堆積物が使われたり、その周辺で作られたりした可能性は低いと考えられる。現時点では、F4、F5、A3の各類の詳細な地域性まで推定することはできない。今後の豊岡市周辺の円山川流域における分析事例の蓄積と検討が必要と考えられる。

ところで、今回の試料4点の器種は、甕、壺、高坏、複合口縁壺の各種類であったが、これらのうち、甕と壺はともにF類であり、高坏と複合口縁壺はともにA類であった。それぞれの器種の性格をみれば、日用品である甕と壺に対して供献土器とされている高坏と特殊な形態を有する複合口縁壺という分け方ができる。そして、今回の胎土分析では、前者がF類、後者がA類とされ、地質分布からA類の方が異地性が高いとされた。各器種１点ということから、今回の結果により、器種と胎土との対応関係まで言及できないが、上述の結果は示唆に富む結果といえ、今後の分析に際して器種は試料選択の重要な基準の一つになると考えられる。なお、複合口縁壺は、砂の粒径組成も他の土器とはやや異なった様相が認められ、その製作に係わる事情の違いが示唆される。

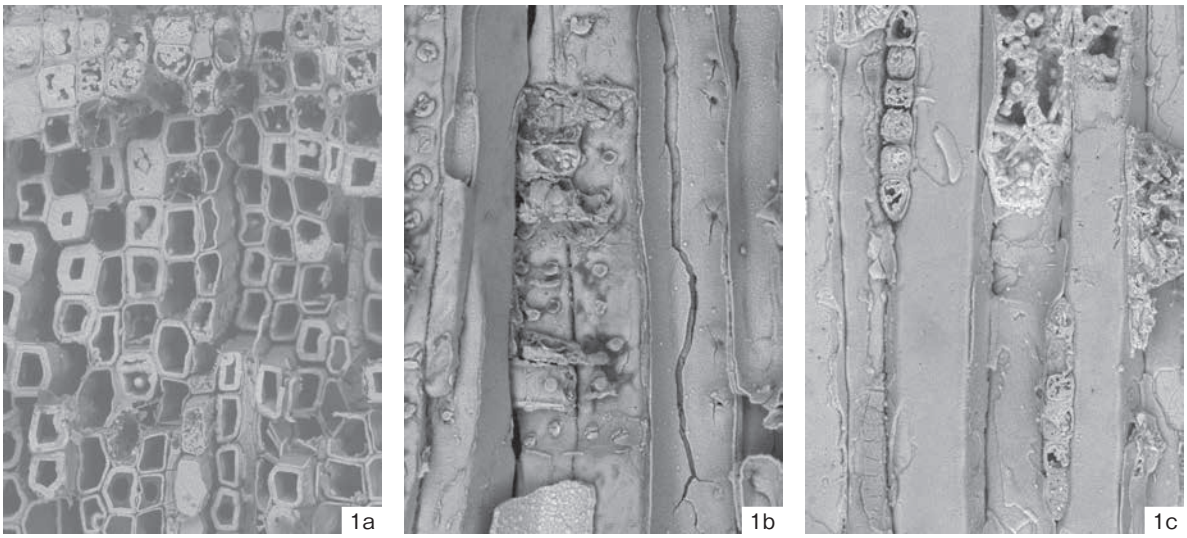
第２節　木質の樹種同定

１　試　料

試料は、古墳時代前期前半とされている１号墳のSX103から出土したヤリガンナ（F7）付着の木質（試料No.1）の１点である。

２　分析方法

試料は鉄錆が染み込んで形状を保っている状態であり、通常の切片作成法による同定ができないため、



1. 針葉樹（試料No.1；ヤリガンナ付着木質　古墳時代前期前半　SX103）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm:a
100μm:b,c

第９図　ヤリガンナ付着木質

炭化材で用いる電子顕微鏡観察による同定を試みる。木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）やRichter他（2006）を参考にする。

３　結　果

ヤリガンナ付着木質は、針葉樹に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・針葉樹

軸方向組織は仮道管のみで構成され、観察した範囲では樹脂細胞および垂直樹脂道は認められない。また、仮道管内壁にらせん肥厚は認められない。放射組織は、柔細胞のみで構成され、放射仮道管や水平樹脂道は認められない。柔細胞壁は滑らかであり、じゅず状の肥厚は認められない。分野壁孔は、スギ型、ヒノキ型、トウヒ型のいずれかであり、１分野に２～３個認められるが、保存状態が悪く詳細は不明である。放射組織は単列、1～10細胞高。

観察された特徴からは、スギあるいはヒノキ科のいずれかである可能性が高いが、樹脂細胞が観察できなかったため針葉樹としている。

４　考　察

古墳時代前期前半とされる１号墳のSX103から出土したヤリガンナ付着木質は、ヤリガンナの側面に広く付着しており、状況から木棺の一部や柄等の木質に由来する可能性がある。木質は、針葉樹であり、状況からはスギあるいはヒノキ科の可能性が高い。いずれも木理が通直で割裂性が高く、加工が容易な材質を有する。

兵庫県内では、田能遺跡の古墳時代前期とされる木棺がコウヤマキおよびコウヤマキ？に同定されている（嶋倉,1982）。また、北浦古墳の４世紀後半～５世紀前半とされる木棺はヒノキに同定されている（嶋倉,1980）。一方、ヤリガンナの柄は、西求女塚古墳（古墳時代前期）で同定が行われており、広葉樹のウツギ属やシイノキ属が確認されているが、針葉樹は確認されていない（岡田・中村,2004）。これらの報告例を参考にすれば、今回の木質は柄ではなく、木棺材等に由来する可能性がある。

引用文献

猪木　幸男,1981,20万分の1地質図幅「姫路」.地質調査所.

上村　不二雄・坂本　亨・山田　直利・猪木　幸男,1974,20万分の1地質図幅「鳥取」.地質調査所.

松田　順一郎・三輪　若葉・別所　秀高,1999,瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.日本文化財科学会第16回大会発表要旨集,120-121.

日本の地質「近畿地方」編集委員会,1987,日本の地質６　近畿地方.共立出版,297p.

岡田　文夫・中村　大介,2004,西求女塚古墳から出土した有機質遺物の材質調査.「西求女塚古墳発掘調査報告書」,神戸市教育委員会,321-338.

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006,針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修）,海青社,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

島地　謙・林　昭三,1992,川除・藤ノ木遺跡出土木製品の樹種.「川除・藤ノ木遺跡　武庫川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」,兵庫県文化財調査報告第104冊,兵庫県教育委員会,771-786.

島地　謙・林　昭三,1993,内場山城遺跡出土木製品の樹種.「多紀郡西紀町　内場山城遺跡　近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書ＸＸＩ」,兵庫県文化財調査報告第126冊,兵庫県教育委員会,92-97.

島地　謙・伊東　隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.

嶋倉　巳三郎,1980,18号墳棺材の樹種.「北浦古墳群」,豊岡市教育委員会,85.

嶋倉　巳三郎,1982,田能遺跡から出土した木質遺物の樹種.「田能遺跡発掘調査報告書」,尼崎市教育委員会,574-580.

第５章　まとめ

第１節　耕地谷古墳群について

１　古墳群の概要と墳丘形態について

調査区内において、尾根筋上に４基の古墳を確認した。墳丘の平面形は、１号墳は半円形、２号墳は方形の台状墓様の形態、３・４号墳は方墳ないしは円墳に近い形状を呈している。

１号墳は尾根突端の傾斜約14度の緩斜面をカットし、半円形ないしは頂点の丸い三角形状の平坦面を設け、３基の主体部を配している。平坦面の造設にあたっては、２号墳墳頂平坦面から１号墳の東側墳丘斜面にかけて旧地形を復元すると高さ90㎝余り、平均約50㎝程度を削平したことが推測される。

２号墳は墳頂平坦面では長方形をなすが、墳丘裾部では尾根の形状に伴い先細りとなりつつも正方形に近くなる。南北の墳丘裾部には帯状の平坦部が観察され、周囲のうち立ち上がり気味の形状となる箇所も認められることから溝と考えられる。また、２・３号墳間の緩斜面にもカット部分が認められ区画溝として認識できる。このような尾根筋上の台状墓短軸方向を溝でカットし、台状墓の長辺方向両側にも溝を設け区画する例は京都府帯城墳墓群例でも認められる（岡田他1987）。

２号墳において検出された８基の埋葬主体は墳頂平坦面の東側に偏っており、さらに墳丘東斜面が削り取られている状況が看取された。１号墳構築の際に平坦面を確保する目的で２号墳斜面が削り取られた可能性が考えられる。しかしながら、北側に設けられた溝の東端部が１号墳墳頂平坦面奥側付近で屈曲気味となり、２号墳北東コーナー部分を削り出すことで示している。この状況から１号墳墳頂平坦面削平前の斜面において、２･３号墳間と同様の溝状のカット部分が設けられていたものと推察されよう。

この場合、２号墳→１号墳の変遷となり、２号墳に対し尾根筋上部の３・４号墳が後出する可能性を持つのに対し、２号墳の直後と考えられる１号墳が尾根筋の低い方に築かれるのはイレギュラーである。

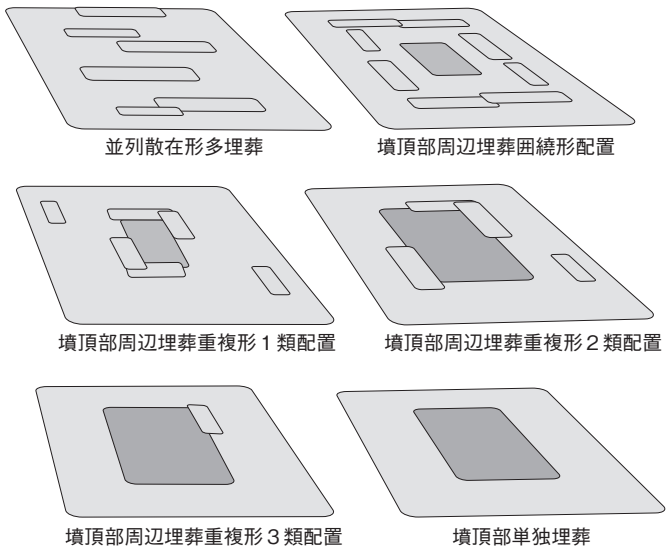
３・４号墳では埋葬主体は確認できなかった。３・４号墳間の溝埋土から須恵器坏身（20）が、３号墳墳丘斜面の流土中から土師器甕の小片（21）が出土している。３号墳は墳頂平坦面が広く墳丘の断面形が台形状を呈するのに対し、４号墳の墳頂平坦面が狭く断面形が半球形に近い。このため、３号墳が１・２号墳に前後する時期に築かれた斜面をカットし平坦面を確保するタイプの古墳である可能性、４号墳が須恵器坏身（20）の時期の古墳である可能性をここでは考えておきたい。

２　埋葬主体の配置状況と埋葬主体間における属性の差異について

瀬戸谷晧氏は弥生時代後期の墳墓に対して、後期を通じての比較をもとに後期末において画期を見出している。まず、鉄器副葬率は後期前半では30％程度であるのが後期末に進むにつれて減少化傾向をたどること、後期前半では木棺長が長いものがほとんどであったのが、後期末には様々なバリエーションが共存することを挙げている（瀬戸谷2005）。またそれに関連して、後期末には中心埋葬が認められ、特定集団墓に限定されることに注意し、それ以前の多様な規模の棺が無秩序に配置される状況と区別して、古墳時代の特定個人墓への変化に至る過渡的到達点としての評価を行っている。

埋葬主体の配置状況について

まず、埋葬主体の配置状況について確認したい。１号墳は墳頂平坦面において空間占有型配置による明確な中心埋葬は認められず、一見、空間分有型配置により３基の埋葬が併存関係にある。すなわ



第10図　丹後半島の方形台状墓の埋葬類型（野島2005）

ちSX102の配置が当初から意図されていたかはともかく、少なくともSX101とSX103の埋葬主体二者が当初から併存する状況で配置されるプランが意図されていたことは窺われる。後述する副葬状況でも三者は拮抗するが、SX101のみが２段掘り墓壙であり、１号墳における中心的存在であることが示唆される。

２号墳では、墳頂平坦面において大規模な二段掘り墓壙SX201が中心埋葬となり、その四隅および北・西辺を切る形で通常の規模の一段掘り墓壙（SX206のみ二段掘り墓壙）を穿つ６基の周辺埋葬が配されている。この配置状況は、丹後地域の方形台状墓の墳頂平坦面における墓壙配置状況に対して分類を行った野島永氏による､「墳頂部周辺埋葬重複形２類配置」に該当する（第10図､野島2005）。すなわち、中心埋葬の墓壙が極端に大形化し、取り囲む埋葬が中心埋葬の墓壙の一端を故意に破壊するように墓壙を穿って重複させ続ける特徴をもつ配置である。野島氏は、この類型が但馬地域に認められず丹後地域に特有なものであることを指摘しているだけに、耕地谷古墳群２号墳の配置状況は興味深いものである。

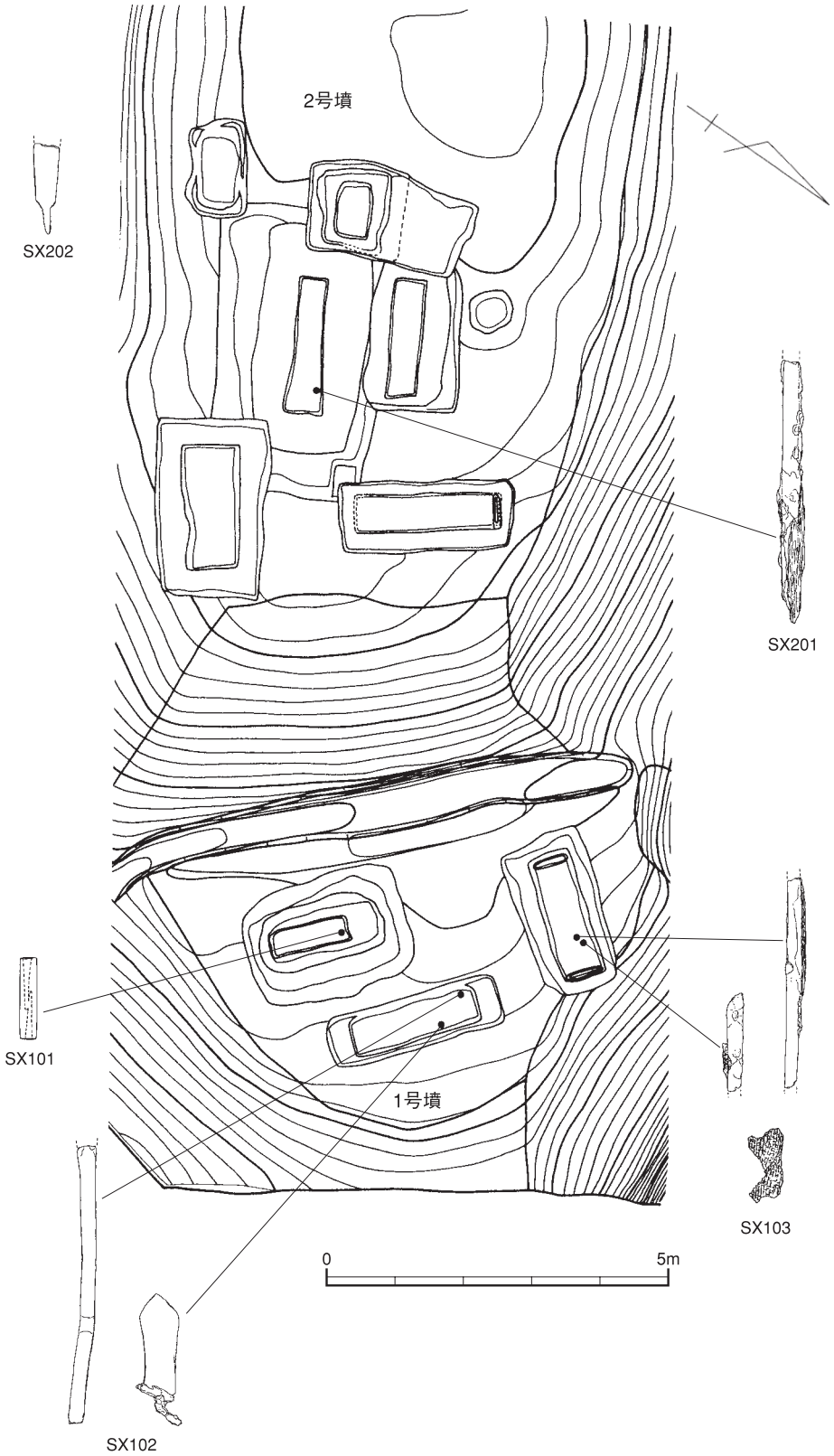
なお、朝来市梅田東古墳群11号墳（山田2002）は中心埋葬の第１主体部が周囲の埋葬の規模とは明らかに区別されるほど大型化している点が評価されるが、切りあう周辺埋葬は１基で重複させ続けてはいない。また、丹波市内場山墳丘墓（中川編1993）では中心埋葬の四隅付近に４基の周辺埋葬が配されるが、中心埋葬の墓壙の規模が周辺埋葬の墓壙の規模に比べて一回り大きいのにすぎないこと、中心埋葬を切って重複する状況が認められないことで様相を異にしている。梅田東古墳群11号墳は野島氏の「墳頂部周辺埋葬重複形３類配置」、内場山墳丘墓は氏の「墳頂部周辺埋葬囲繞形配置」に該当すると思われる。耕地谷古墳群２号墳は、両者に比較して副葬鉄器の保有状況こそはるかに乏しいながら、埋葬主体の配置状況においては墳頂部周辺埋葬重複形２類配置の情報が色濃く反映されており、丹後地域と深いつながりを共有しうるものであることを意義づけておきたい。

主体部間における属性の差異について

木棺痕跡の規模は、SX202・SX204が長さ80㎝程度となるほかは1.8～2.0m程度のものがほとんどとな

第８表　耕地谷古墳群埋葬主体一覧

墳丘	埋葬主体	墓壙段数	墓壙（m）			棺（m）			主軸方向	出土遺物	備考
			長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ			
1号墳	SX101	２段掘り	2.43	1.84	0.85	1.19	0.48	0.13	N49.4° W	管玉１､土師器	墓壙内破砕土器配置
	SX102	１段掘り	2.63	0.80	0.45	1.95	0.63	0.16	N51.1° W	鉄鏃１､ヤリガンナ１	
	SX103	１段掘り	2.43	1.26	0.82	1.95	0.68	0.23	N38.4° E	ヤリガンナ２	小口穴あり
2号墳	SX201	２段掘り	4.17	(2.52)	0.82	1.99	0.58	0.19	N59.5° E	ヤリガンナ１､土師器	中心埋葬､棺側裏込石
	SX202	１段掘り	1.41	0.90	0.41	(0.81)	(0.40)	0.12	N54.5° E	鉄鏃１	
	SX203	１段掘り	1.27	1.38＋	0.25					土師器	
	SX204	１段掘り	1.37	(1.39)	0.73	0.84	0.53	0.35	N58.5° E	なし	
	SX205	１段掘り	2.47	1.40	0.59	1.74	0.48	0.31	N56.4° E	土師器	
	SX206	２段掘り	2.58	1.08	0.61	1.82	0.86	0.27	N54.7° E	土師器	小口穴、裏込石あり
	SX207	１段掘り	2.63	1.67	0.61	(2.15)	0.57	0.32	N36.0° W	なし	
	SX208	―	0.66	0.58	0.28				N54.0° W	土師器	土器棺墓



第11図　各埋葬主体における出土鉄製品・玉類

り大差がなく、大小２種類のバリエーションが認められる状況である。

次に、鉄器および玉類の副葬と墓壙内破砕土器配置の状況について見てみたい。副葬鉄器保有は２号墳で８基中わずか２基（SX201・SX202）であるのに対し、１号墳では３基中２基（SX102・SX103）で２点ずつ確認された。１号墳の副葬鉄器を持たない１基（SX101）は鉄器を保有しないものの管玉を

保有し、１・２号墳で検出されたすべての埋葬主体のなかで唯一墓壙内破砕土器配置が認められた。

瀬戸谷氏は妙楽寺墳墓群において玉類が小規模施設から出土する傾向を挙げ、小児もしくは女性の副葬品である可能性を指摘している（瀬戸谷2002）。同時に瀬戸谷氏により、弥生時代後期末の妙楽寺墳墓群ではすでにヤリガンナに比して武器副葬が希少であることも指摘されている。１号墳SX102の鉄鏃保有やSX103のヤリガンナ複数保有は２号墳に比して優位であるだけでなく、当該期においては一定の位置を占めている可能性も内包しているのではないだろうか。

SX101において墓壙内破砕土器配置が２ヶ所認められた。その執行における意義は後章の考察に譲るとして、ここでは行為そのものに言及したい。破砕土器配置２ヶ所のうち頭位に近いと思われる北側（破砕土器配置②）では破片が４重に重ねて置かれていた。鉢は復元したところ破片が欠落していたが、墓壙内下半の埋土は水洗しているため、本来墓壙内に存在した破片のほとんどは回収できているはずである。にもかかわらず破片が揃わないということは、破砕行為が墓壙外で行われ、全破片の一部が選択され、木棺裏込め土が途中まで充填されたところで配置されている行為が復元されるのではないだろうか。

３　耕地谷古墳群の土器について

耕地谷古墳群から出土した土師器（図版33）は、１号墳SX101より破砕土器供献が行われた鉢（９：甕の可能性も残る）のほかは、すべて２号墳から出土したもので、複合口縁壺、甕、高坏がある。これらの特徴を概観しつつ、類例との比較も含めて帰属時期について若干の検討を行いたい（第12図）。

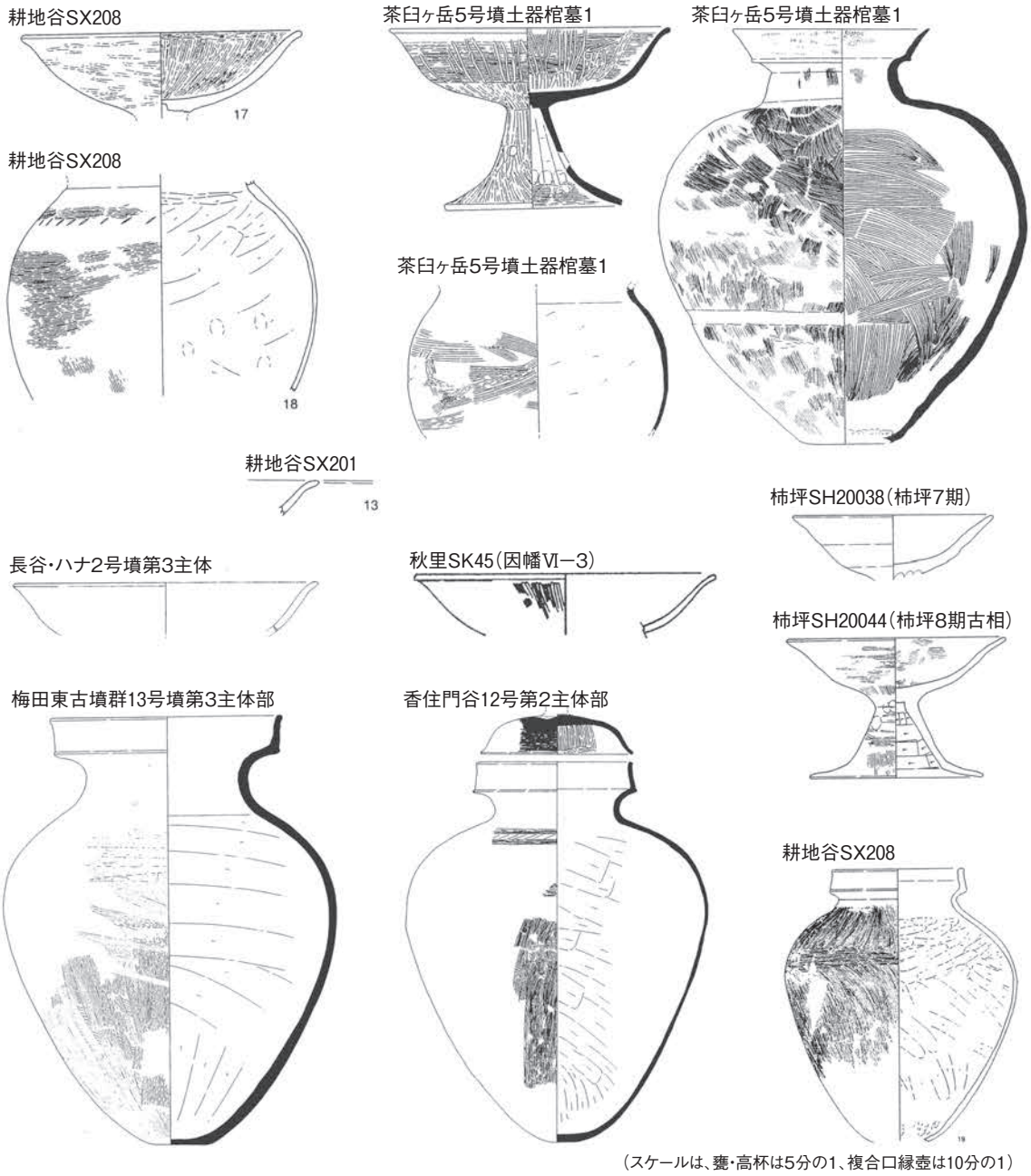
複合口縁壺

SX208棺身（19）に近い例として、梅田東13号墳第３主体の土器棺棺身である複合口縁壺がある。底部が若干尖り底気味となる倒卵形を呈する。蓋に転用された甕も含めて布留式前半とされている（山田2002）。19は体部が倒卵形となるが、底部は尖らず若干の接地面を持ちつつ丸く収められている。梅田東13号墳第３主体例と比較すると、19は複合口縁の口径がやや小さく幅狭で受け部の屈曲があまく、若干時期の下る可能性を併せ持っている。複合口縁の特徴や器形全体のプロポーションも含め香住門谷12号墳第２主体の例が最も近いと思われ、松井敬代氏により布留Ⅰ式～Ⅱ式の時期が与えられている（瀬戸谷編2003）。養父市小山３号墳第５主体は、これらより若干遡る様相を呈しており、谷本進氏により布留Ⅰ式期とされている（谷本・山田1990、谷本2001）。一方、豊岡市本井３号墳第２主体や半坂峠南尾根支群１号墳、新温泉町井ノ谷２号墳など体部が球形をなす例よりもこれらは遡ると思われる。梅田東13号墳第３主体、香住門谷12号墳第２主体とともに、谷口恭子氏による因幡Ⅵ－３期に併行するとみてよいだろう（谷口編年に関しては以下、谷口2000）。概ね布留Ⅰ式併行期に相当するものと思われる。

一方、SX205より出土した小型の複合口縁壺（16）は、口縁から頸部付近の破片と頸部から肩部にかけての破片の２点のみ残存する。頸部の屈曲部分は破片双方が屈曲に移行する部分を併せ持つ、近接する部分であるため図上復元が可能であった。複合口縁の形状や屈曲する頸部から肩部に至るラインが梅田東11号墳第１主体部の墓壙内破砕配置された土器例に近く、庄内併行期後葉とされる。一方、鳥取市秋里遺跡SK33にも類例が認められ、谷口編年では因幡Ⅶ－１に比定される。16に関してここでは、庄内式後葉から布留Ⅰ式併行期に相当すると考えたい。

甕

土器棺棺身の底部穿孔部にあてがわれていた甕破片（18）は、布留式併行のものである。体部が球胴化し、内面の指頭圧痕も底部から1/3より上位に上がってくる特徴から因幡Ⅶ－１期併行に比定される。



第12図　耕地谷２号墳の土師器と類例

高坏

高坏（17）はいわゆる布留系高坏で、有稜高坏の稜がなくなり坏部が浅くなった段階のものであろう。豊岡市長田・ハナ古墳群２号墳において墳頂供献土器の可能性が示唆されている高坏（瀬戸谷編1984）に近い。同墳の時期を決める要素は少ないが、尾根の上下に隣接する１・３号墳から出土した大型のヤリガンナや珠文鏡などから４世紀後半段階に近い時期の可能性が推察される。朝来市柿坪遺跡出土例で比較すると柿坪７期から８期古相への過渡期に近い（池田2008）。なお、柿坪８期古相はTG232併行期とされる。いずれにせよ但馬地域での比較では布留Ⅱ式〜Ⅲ式にかけての範疇に入り、新相を呈する。

一方、有稜高坏の稜の退化の早い因幡地域では、Ⅶ－１期以降でも稜が取れたものが残存する一方で、Ⅵ－３期にすでに17に近いものが認められる。17はこのような因幡地域の稜退化の影響を受けた古墳時代前期の早い段階のものである可能性から、前期後半まで下る可能性まで時期幅を持たせておきたい。

なお、11は椀形高坏、13は17と同じタイプの布留系高坏で口縁の外反具合のより顕著なものである。

鉢

残存上端に口縁として生きていると考えられる端部の状況が認められ、積極的に評価して鉢としたが、本来さらに上部が存在し甕であった可能性も残る。底部が尖り、この資料単独では庄内式併行とも捉えられるが、このようなタイプが残存する余地のあることや２号墳から出土した器種の他の時期も考慮しつつ、古墳時代前期にまで時期幅を持たせておきたい。

以上の点から、SX101に破砕土器配置された鉢ないし甕（9）やSX205出土小型複合口縁壺（16）は庄内期に遡りうる様相も看取はされるものの、他のほとんどの土師器が因幡Ⅶ－１併行（布留Ⅰ式併行）に属すると考えられる。ただし、布留系高坏（13・17）ではこれらに近い古相の特徴とともに新相の特徴の両者が看取され、前期後半ないし前期末にまで繰り下げうる可能性も提示している。

ここで参考になるのが、京都府茶臼ヶ岳古墳群５号墳土器棺墓１において出土した土器群である（黒坪2009）。有稜高坏の稜が退化した高坏が複合口縁壺を用いた棺身の蓋として使用され、棺身底部の穿孔箇所に外側から甕の破片があてがわれたとみられる。この高坏は坏部が浅く皿状となった本古墳群例（17）の前段階のものと捉えられ、脚部内の坏部底面に軸心痕をとどめる点で興味深い。前期前半から中頃と考えられる。しかしながら、丹後地域の稜の退化した高坏は浅くなりながらも逆台形状の坏部の器形がよく残り、本古墳群例（17）のような皿状の器形を呈する坏部の例が認められにくい感を受けている。一方、因幡･伯耆ではいちはやく有稜高坏の稜の退化の進み、浅く皿状になるものが散見される。例えば長瀬高浜遺跡の高坏坏部では、早い段階から外器面に横方向、内器面に縦方向のミガキが施されたものが非常に目立つ。ここでは、丹後に到来した山陰系の特徴とは異なった画期や流れの波が但馬にも及んでいる可能性も残しておきたい。

参考文献

池田征弘 2008「遺物について」『柿坪遺跡』兵庫県文化財調査報告第336冊　兵庫県教育委員会
岡田晃治他 1987「帯城墳墓群Ⅱ」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
黒坪一樹 2009「茶臼ヶ岳古墳群」『京都府遺跡調査報告集』第131冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
瀬戸谷晧 1984「埋葬施設について」『長谷・ハナ古墳群』但馬考古学研究会
瀬戸谷晧編 1984『長谷・ハナ古墳群』但馬考古学研究会
瀬戸谷晧・宮村良雄・松井敬代 1988『本井墳墓群・尼城址』豊岡市文化財調査報告書第18集　豊岡市教育委員会
瀬戸谷晧 1994「但馬の土器棺」『加陽土屋ヶ鼻遺跡群』豊岡市文化財調査報告書第29集・豊岡市立郷土資料館調査報告書　豊岡市教育委員会
瀬戸谷晧 2001「但馬における弥生墳墓の展開」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会
瀬戸谷晧 2002「墳墓群の諸様相」『妙楽寺墳墓群』豊岡市文化財調査報告書第32集　豊岡市教育委員会
瀬戸谷晧編 2003『香住門谷遺跡群』豊岡市文化財調査報告書第34集　豊岡市教育委員会
谷口恭子 2000「因幡における弥生時代後期から庄内式併行期の土器について」『庄内式土器研究』22　庄内式土器研究会
谷本進・山田宗之編 1990『小山古墳群・東家の上遺跡』兵庫県八鹿町文化財調査報告書第９集　八鹿町教育委員会
谷本進 2001「但馬における庄内併行期の土器の様相」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会
中川渉編 1993『内場山城跡』兵庫県埋蔵文化財調査報告第126冊　兵庫県教育委員会
野島永 2005「鉄からみた弥生･古墳時代の日本海交流」『考古学からみた日本海沿岸の地域性と交流』富山大学人文学部考古学研究室
福本晴夫 1988『井ノ谷古墳群』浜坂町文化財調査報告書２　浜坂町教育委員会
山田清朝 2002『梅田東古墳群』兵庫県埋蔵文化財調査報告第241冊　兵庫県教育委員会
山本三郎・渡辺昇編 1983『半坂南古墳群・辻遺跡』兵庫県埋蔵文化財調査報告第18冊　兵庫県教育委員会
米田敏幸「土師器の編年　１近畿」『古墳時代の研究』第６巻土師器と須恵器　雄山閣

第２節　耕地谷城跡の時期と性格

１　時　期

耕地谷城跡に伴う中世後期の遺物は少ない。時期を検討することが可能な遺物は、土師器皿・土師器鍋・瓦質擂鉢があげられる。

但馬地域の中世後期の土器編年はまだ確立されていないが、16世紀代の遺物については、豊岡市出石町宮内所在の宮内堀脇遺跡より、纏まった遺物が出土しており、かつ一応の変遷を提示している（岡田2009）ことから、宮内堀脇遺跡の成果をもとに時期の検討を行っておく。

土師器皿は５点図示している（図版33）。いずれも非ロクロ形によるもので、２～４・６は形態的にはいわゆる京都系土師器に分類されるものである。

２は宮内堀脇遺跡の分類ではAa1類に属し、16世紀代に編年される。

３は宮内堀脇遺跡の分類ではAb2類に属し、口縁端部が外反することから16世紀前半に編年される。

４は宮内堀脇遺跡の分類ではAb2類に属し、口縁端部が外反し上部に面をもつことから16世紀初頭から前半に編年される。

６は宮内堀脇遺跡の分類ではAb2類に属し、口縁端部が外反し上部に面をもつことから16世紀初頭から前半に編年される。

５はいわゆる鉄かぶと形の土師器鍋である。長谷川編年鉄かぶと形Ⅲ類（岡田･長谷川2003）に属し、15世紀末から16世紀前半に位置づけられる。

７は宮内堀脇遺跡では体部が外反する個体はないが、口縁端部に面を持つ点を考えるならば、宮内堀脇遺跡中世２期のBb類に近いものとして16世紀前半に時期が求められる。

以上の各遺物の時期から耕地谷城跡は16世紀初頭から前半にかけて営まれた可能性が高いと考えられる。

２　平坦部・斜面平坦面（段状遺構）について

耕地谷城跡の特徴として、尾根斜面に小規模な竪穴住居跡様の施設が営まれている点がある。これは通常、段状遺構と呼ばれ、本稿では平坦部及び斜面平坦面と呼称した。

以下、当館（兵庫県立考古博物館）山上雅弘氏による当城跡に対する指摘・評価を参考に、耕地谷山城跡に伴う各施設について述べておく。

段状遺構は尾根斜面に構築されるもので通常、尾根側をコの字に削り前方に土砂を盛りだして構築する。この平坦面＝段状遺構は一見弥生時代の高地性集落に見られる段状遺構に酷似するものであるが、近年中世山城において多数見つかってきている。豊岡市内では中之郷にある朝日城跡、出石町鳥居にある鳥居城跡で、存在が明らかになっている。

朝日城は尾根上に発達した防御施設（堀切・竪堀など）を持つ本格的な城郭であるが、北斜面の箇所は郭構造を持たず、６～７箇所の段状遺構で構成されている。構築時期は天正年間頃で、段状遺構もこの頃に構築されていると考えられている（山上2002）。

耕地谷城跡は時期的には、少し遡ると考えられる。南北の斜面側の裾周囲には排水溝と思われる壁溝を伴った平坦面が検出されており、谷側部分はやはり盛土によって拡張されている。

明確な遺構は南北斜面、特に南斜面から検出されている。南斜面には排水溝を備えた平坦部が複数検出されている。

配置から見れば、南平坦部１はその排水溝が下方の斜面平坦面群を避けるように流末が伸びており、同時期に存在したと判断できる。また、南平坦部１の下層にある平坦部２・３は切り合うが、ともに排水溝が斜面平坦面群の上に延びており、同時期に存在しなかったと判断できる。

即ち、南平坦部３⇒平坦部２⇒平坦部１・斜面平坦面群の順に少なくとも３時期にわたって平坦部が形成されている。耕地谷城跡は、極短期間のうちに使用されたものではなく、数度にわたり改築され、使用されたと考えられるのである。

３　堀切・尾根上の平坦面について

耕地谷城跡は、尾根上の古墳墳丘を改変し、墳頂部を平坦面（本項では東・中央・西郭とした)、背後の周濠部分を堀切として利用している。

特に、２号墳・３号墳間の堀切部は古墳築造当初の周濠と考えるには規模が大きく、築城に伴い開鑿を行った可能性が高い。但し､幅約3.0m､深さ約１ｍと､通常の山城の堀切と比べ小規模な点は否めない。

また、この堀切の南側末端が段状遺構と切りあっていることから、遺構が２時期以上の時期幅を持っていることが分かる。

４　耕地谷城跡の性格について

以上、耕地谷城跡の時期・施設について述べてきた。耕地谷城跡は16世紀前半期に数度の改築が行われた小規模な堀切と、斜面地の平坦部＝段状遺構が特徴的な、小規模な城跡であることが判明した。

では、城跡の性格をどの様に捉えるべきか、以下、山上氏の評価に拠って述べておく。

近年、藤木久志氏・井原今朝男氏などの文献分野からの研究によって、戦国時代には戦乱を避ける目的、あるいは近隣諸勢力との軋轢を解消する手段として村の農民層も山城を構築することが明らかにされてきている（藤木1997、井原1999)。しかし、実際に村人が構築した城郭の実態は現状ではまだまだ不明な部分が多い。

その中で、県内では豊岡市朝日城跡など村人・村と密接なかかわりのあると考えられる城郭が、近年いくつか明らかにされてきている。これらは本来構築されるはずの郭構造をもたず、周囲に段状遺構を配置していることが多く、一方で防御施設の構築には消極的な事例が認められる。このような事例の一つとして、氷上市春日町の火山城跡があげられる。火山城跡は古墳を改変し、周囲に段状遺構を構築するが背後の堀切は伴わない城跡である。

耕地谷城跡についても火山城跡と同じく防御性が薄く、朝日城跡と同じく段状遺構が特徴的である。

以上の点から、耕地谷城跡は村人の逃げ城として使用された簡易な山城の可能性が考えられ、16世紀前半を中心に、幾度か改修を加えながら使用されたと推測される。

参考文献

井原今朝男 1999『中世のいくさ・祭り・外国との交わり』校倉書房
岡田章一・長谷川眞 2003「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第３号　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
岡田章一 2009「出土土器・陶磁器の検討」『宮内掘脇遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告第365冊　兵庫県教育委員会
中川渉編 2005『火山古墳群・火山城跡・火山遺跡』兵庫県文化財調査報告第283冊　兵庫県教育委員会
藤木久志 1997『戦国の村を行く』朝日新聞社
山上雅弘 2002「朝日城跡の段状遺構」『中郷朝日遺跡群』豊岡市文化財調査報告書第33集　豊岡市教育委員会

第６章　考　察

第１節　耕地谷古墳群における墓壙内破砕土器配置

１　棺周囲への土器破片の配置行為

耕地谷１号墳SX101では、木棺の裏込め土上面から土器の破片が検出された。整理作業の結果、これは１個体の鉢[1]を割ったものであることが確認された。近畿地方北部では、このような土器を割って木棺の裏込め土上面や棺蓋上にその破片を置く行為が、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての時期に認められる。

こうした行為は、棺の周辺に土器を置くことが少ない弥生時代墓制にあって特異なものであり、これまでにも近畿地方北部の弥生時代墳墓における特徴的な儀礼的行為として注目され、「墓壙内破砕土器供献」[2]もしくは「墓壙内破砕土器配置」[3]などと呼ばれ、研究が進められてきた。これまでの研究では、近畿地方北部に集中的に分布すること、器種としては甕や水差し形の壺[4]など煮沸用器種を主に使用するという選択性が認められること、そして出土土器には外面にススが付着するものが多いことなどが判明している。また、こうした器種の選択性や使用痕などから、単に土器を割って置く行為ではなく、その背後には葬送儀礼に関わる食物などの煮沸行為があった可能性が指摘されている。

２　墓壙内破砕土器配置の盛衰

墓壙内破砕土器配置の初現は、弥生時代中期後半にある。近畿地方北部の中でも丹後地域の奈具墳墓群や寺岡遺跡SX56などで中期後半の例が認められるが、例は少ない。その後、弥生時代後期初頭には一気に但馬地域や丹波地域にも広がり、水系を越えて近畿地方北部全域にわたって盛行する。後期後半には、北陸地方の福井県小羽山墳墓群などにも例が見られる。

弥生時代後期に盛行した墓壙内破砕土器配置が確実に終焉への動きを見せ始めるのは、弥生時代終末期～古墳時代初頭である。弥生時代後期後半までは近畿地方北部のほぼすべての墳墓・墳墓群に墓壙内破砕土器配置を行う埋葬施設が含まれており、墓域内での執行率[5]も高かった。しかし、弥生時代終末期には墓壙内破砕土器配置が確認できないものも増えてくる。そして、墓壙内破砕土器配置が見られる墳墓・墳墓群においても、それが行われている埋葬施設は少数派となっているのである。

その後、古墳時代に入ると墓壙内破砕土器配置の事例は急激に減少する。古墳時代初頭[6]まではまだ確実に墓壙内破砕土器配置と捉えることのできる事例が存在しているが、その後はほとんど確認することができなくなる。但馬地域では、古墳時代前期前半まで下る可能性があるものは源氏山７号墳や見蔵岡２号墳などが挙げられるにすぎない。古墳時代前期後半にも墓壙内破砕土器配置と思われるものが認められるが、それらの事例には後述するように行為内容にかなりの変形が見られるため、墓壙内破砕土器配置に含めてよいかどうか疑問が残る。したがって、現状では墓壙内破砕土器配置は古墳時代前期前半のうちに終焉を迎えているとみてよいだろう。

耕地谷１号墳は土器がSX101の鉢１点のみしか出土しておらず、明確な時期を把握しがたいが、副葬されていた管玉・鉄鏃の形態や、耕地谷２号墳から出土した土器などを参考にすれば、古墳時代初頭～前期前半に営まれた可能性が高いものと思われる。時期的には墓壙内破砕土器配置が終焉を迎える時期にあたっており、SX101の事例はその具体的な様相を考える上で貴重な事例であるといえる。

3　終焉の具体相

これまで、墓壙内破砕土器配置の終焉については、先に見たような一連の盛衰の中で事例の減少といった事象として取り上げられており、その内容の変化などについて特に取り上げられることはほとんどなかった。そこで、どのように墓壙内破砕土器配置が衰退し、消滅していったかについてもう少し具体的にみてみたい。

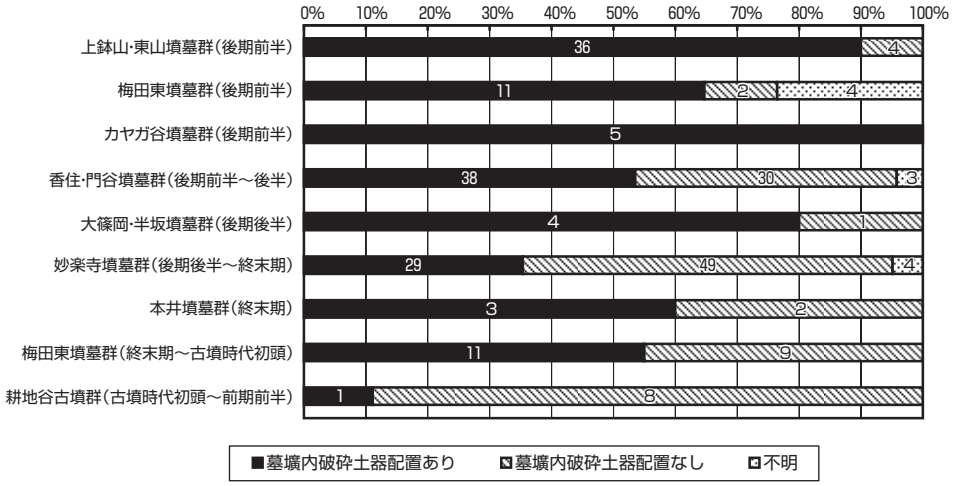
事例の減少

まず、弥生時代終末期に見られる変化は、墓域の中で墓壙内破砕土器配置の執行率が急激に低下していくことである（第13図）。弥生時代後期前半にはいずれの墳墓・墳墓群でも執行率はほぼ100％に近かったが、後期後半には徐々に執行率低下の兆しが見え出す。そして、終末期にはそれぞれの墳墓・墳墓群の中で墓壙内破砕土器配置が行われる埋葬施設は少数派となるくらいにまで執行率が低下する。弥生時代終末期にも墓壙内破砕土器配置自体はまだ多くの墳墓群において確認できるため、分布状況としては多くの事例が存在しているようにみえるが、墓域の内部で見れば、実際のところかなりの執行率の低下が認められるのである。ただし、墳墓・墳墓群によって執行率に偏差が認められることは注意される[7)]。

これまで、古墳時代前期段階の執行率については良好な事例が少なく不明であったが、耕地谷古墳群ではその一端を窺うことができる。耕地谷古墳群の場合、土器棺や不明遺構を除けば１号墳と２号墳合わせて９基の埋葬施設が調査されたにもかかわらず、墓壙内破砕土器配置が行われていた埋葬施設はSX101の１基のみであった。このことは、墓壙内破砕土器配置を行うことは、耕地谷古墳群の造営集団の中ではすでにイレギュラーであったといえるような状況となっていたことを示す。

器種の変化

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての時期には、使用される器種にも変化が生じる。使用される器種としては、最盛期である弥生時代後期前半には煮沸用器種の甕と水差し形壺が基本であり、それにごく少数の高坏などの供膳用器種が伴う場合が認められるような状況であったが、弥生時代後期後半には、高坏・器台などの供膳用器種や、壺でも煮沸に用いるものではないようなものが伴う事例がやや目立つようになる。そして、それが弥生時代終末期になると急激に顕在化してくる。したがって、相対的な煮沸用器種の占める比率の低下と、器種組成の多様化がみられるのである。さらには、少数例ながら器台や高坏などの供膳用の器種が単体で使用される例も見られるようになる。



第13図　墓壙内破砕土器配置の執行率

また、使用される器種の地域色もしくは造墓集団ごとの独自色もやや明瞭化するように思われる。但馬地域では、南但馬の梅田東墳墓群で鉢が使用されている例が目立つが、北但馬でも本井墳墓群などで鉢の使用例が認められる。それに対して、丹後・丹波地域では鉢の使用はほとんど認められない。

古墳時代前期においては事例が少ないが、前期前半にはまだ煮沸用器種に対する選択性が認められるようである。耕地谷１号墳SX101については鉢を使用しているが、これは先に述べたような但馬地域における地域色を反映したものであろう。ところが前期後半になると、京都府白米山西２号墳のように鼓形器台のみを破砕して棺上に置いている事例も認められ、煮沸用器種を使用するという原則が完全に崩れる。また、高坏を棺付近に完形で置いている事例などもある。このように、すでに墓壙内破砕土器配置の系譜を引くものなのかどうかすら曖昧になってきている。

煮沸痕跡

先に述べたように、墓壙内破砕土器配置が葬送儀礼に関わる何らかの煮沸行為を伴うものと考えた場合、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて煮沸用器種の占める比率が低下することは、その煮沸行為自体にも変化が生じていたことを示している可能性が高い。

それを象徴的に示すのが、耕地谷１号墳SX101で用いられていた鉢である。鉢であること自体がすでに煮沸用器種というよりは供膳器種とみられるのであるが、鉢を煮沸に用いる例も当該期の土器使用の中では頻繁に認められる。しかしながら、SX101出土の鉢には、ススは付着していないようである。したがって、煮沸に用いられたとは考えにくいのである。こうした点からは、古墳時代初頭前後には墓壙内破砕土器配置の背後に存在した葬送儀礼に関わる煮沸行為自体がすでに変質を遂げつつあったものと考えられる。葬送儀礼において煮沸行為自体が行われなくなったかどうかは不明であるが[8]、少なくとも墓壙内破砕土器配置と煮沸行為との間に分離が生じたことを窺うことはできるのではなかろうか。

終焉にむけての流れ

このようにみてくると、墓壙内破砕土器配置の終焉の兆しは、執行率の低下や、使用器種の多様化などの行為内容の乱れという形で弥生時代後期後半から終末期にかけて漸移的に現れてくるものとみることができる。こうした様子からは、弥生時代後期前半には葬送儀礼のなかでも大切な儀礼的行為であり、行うことが当たり前であった墓壙内破砕土器配置が、世代を重ねるにつれて徐々にその意味を失って伝統的な風習とでもいうべきものへと変質していく姿が想像される。

しかしながら、終焉を迎えるにあたっては、その執行自体が急激に途絶していく古墳時代初頭から前期前葉に大きな画期があったようである。こうした画期の存在は、墓壙内破砕土器配置が前代からの漸移的な変質の末に終焉を迎えたのではないことを示しているものと考えられよう。衰退の一途をたどりながらも存続していた墓壙内破砕土器配置が急激に行われなくなっていく背景には、古墳時代へ向かう大きな社会の変化が想定されるのではなかろうか。近畿地方北部では前方後円墳の築造は古墳時代前期中葉をもって開始されるようであるが、それに先行して京都府大田南５号墳など従来の墳墓とは埋葬施設や副葬品の点で一線を画する古墳が築造されており、この時期の墓制における変化を窺わせる。

４　耕地谷１号墳SX101について

以上に述べてきたような過程をたどって墓壙内破砕土器配置は終焉を迎えるが、問題となるのは、墓壙内破砕土器配置が終焉を迎える古墳時代初頭から前期前半の時期に墓壙内破砕土器配置を行っているごく少数の事例をどのように考えるのかという点である。

近畿地方北部全体において墓壙内破砕土器配置という儀礼的行為がほとんど失われている中で、ごく少数の被葬者に対してのみ行われていることは、この時期の墓壙内破砕土器配置の執行の有無は造墓集団ではなく、被葬者の性格によって決定されていた可能性が高いことを窺わせる。盛行期の様相の検討に加えて、こうした衰退・消滅期になおこの儀礼的行為を保守している事例の検討を行うことで、より墓壙内破砕土器配置の本質的な部分に迫ることができるのではなかろうか。

SX101の検討

さて、こうした視点から耕地谷１号墳SX101の例についてみていきたい。

まず注目しておきたいのは、耕地谷１号墳にはSX101で墓壙内破砕土器配置が行われているのに対して、２号墳では墓壙内破砕土器配置が全く確認されていない点である。

１号墳と２号墳は同一尾根上に隣接して築造されており、両者の間には強い関係性が窺われるが、埋葬施設配置の違いが明瞭に認められる。１号墳の埋葬施設配置を見た場合、そこに中心埋葬と呼べるものが認めがたい。墓壙規模や副葬品の点からみても、比較的等質的な構造であるとみることができよう。これに対して、２号墳では中心埋葬が比較的明確である。位置や墓壙規模、副葬品などからみて、SX201が中心埋葬として把握できる。

このように、墓壙内破砕土器配置が行われている埋葬施設を含む１号墳と含まない２号墳との間に、埋葬施設配置における差異が現れている点は注意してよいだろう。１号墳にしてもSX101のみでしか墓壙内破砕土器配置が認められないため、これがイレギュラーなものであった可能性もある。ただし、盛行期には被葬者ほぼ全員に対して行われることが通有であるという等質的な性格を持っていた墓壙内破砕土器配置が、中心埋葬が顕在化していない１号墳にのみ見られることには、何らかの意味があると考えてもよいのではなかろうか。

造墓時期については、１号墳出土の土器がSX101の鉢しかないために微妙な部分もあるものの、両者がほぼ同時、もしくは２号墳が１号墳に遅れて造営されたものと思われる。もし１号墳と２号墳がほぼ同時に営まれていたならば、集団の構造を異にするような２つの集団が併存したこととなり、その集団間で墓壙内破砕土器配置を存続させていたかどうかの違いがあった可能性が考えられる。一方、２号墳が１号墳より後に営まれたものである場合には、墓壙内破砕土器配置が行われなくなる背景の一つに、この中心埋葬を顕在化させるような造墓集団における変化が存在していた可能性が考えられよう。いずれにしても、墓壙内破砕土器配置が集団内の階層化の進展にはそぐわないものであったことを窺うことができるのではなかろうか。

そして、１号墳という単位で見た場合には、墓壙内破砕土器配置を行っているSX101が唯一玉を副葬しており、残り２基の埋葬施設では鉄製品を副葬している点も注意される。２号墳を含めても耕地谷古墳群の中では墓壙内破砕土器配置と玉類副葬の両者がともにSX101にしか認められないことからは、この二者の間に何らかの相関関係があることも考えられる。ただし、古墳時代前期の他の事例を見た場合、特に玉類副葬との相関関係があるとはいえない。現時点では、墓壙内破砕土器配置を行うという点で他の被葬者と区別されていた被葬者が、副葬品目の選択という点でも区別されていた可能性を指摘するにとどまる。しかしながら、当該期の墓壙内破砕土器配置の執行の有無が被葬者の性格によって決定されていたことを補強する材料とはなるものと思われる。

他集団との交流

さて、以上のようなSX101の墓域内における位置づけのほかにも、やや大きな目で見た場合、鉢とい

う器種の選択にも注意しておく必要があろう。

先に墓壙内破砕土器配置に鉢を使用することが但馬地域の地域色として捉えられる可能性を指摘したが、SX101の例もそれを補強するものである。ただし、梅田東墳墓群のように墓壙内破砕土器配置における鉢の使用例が特に目立つ南但馬の墳墓群の存在を考えた場合、こうした墓域を営んだ集団との交流も想定できるかもしれない。被葬者の出自や親族関係などについても、古墳時代前期前半の墓壙内破砕土器配置の単発的な執行に関わっていた可能性の一つとして考慮に入れておく必要があろう。

5　小　結

小考では、墓壙内破砕土器配置が衰退し終焉していく過程を概観し、耕地谷１号墳SX101のような衰退・終焉期の事例の検討から墓壙内破砕土器配置の性格や当該期の社会の変化などを考えるための手がかりを得られるのではないかといった見通しについて述べてきた。十分な検討を行っていないため結論めいたものは提示できず、雑駁な文を連ねてきたように思う。

ただ、弥生時代に限らず、地域的もしくは時期的に特徴的な祭祀や儀礼的行為が認められる場合、その検討にあたっては開始から盛行にかけての様相が注目されることが多いように思う。一方で、こうしたものが事象的にどのような経緯をたどって終焉を迎えるのか、また、終焉という現象の裏にどのような社会的背景が潜んでいるのかという点にはあまり注意が払われていないようにも思う。祭祀や儀礼的行為に限ったことではなく、遺物・遺構の検討においても同様の傾向があろう。それぞれの事象の衰退や終焉の過程を考古学的に明らかにしていくことで、より詳細に当時の社会について知ることができるのではなかろうかというのが、耕地谷１号墳SX101の事例に触れての感想である。

註

１）　甕である可能性も指摘されているが、土器自体の形態のほか、墓壙内破砕土器配置で甕が用いられる場合には口縁部の破片が選ばれて置かれていることが多い点などから、鉢と考えてよいと思われる。

２）　松井1991、肥後1994。

３）　石井2003。現在、一般的には「墓壙内破砕土器供献」の語が用いられているが、小文では石井2003に基づき「墓壙内破砕土器配置」の語を使用する。

４）　近畿地方北部の弥生時代後期の水差し形の壷は容量が甕に近く、集落出土のものにもススなどの煮沸痕跡が残るものが多いため、煮沸用に用いられることが多かったと思われる。

５）　墓域に存在する埋葬施設（発掘調査が行われたもの）の中に、墓壙内破砕土器配置が認められる埋葬施設がどのくらい含まれているかという割合を執行率と呼ぶ。便宜的に数値として示す場合には、（墓壙内破砕土器配置が認められる埋葬施設数÷調査された埋葬施設数×100）で示される。

６）　土器様式では、近畿地方の布留式初頭に併行する時期と考える。近畿地方北部では土器様式に山陰地方の影響が急激に目立ち始める時期である。

７）　例えば、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけて営まれた京都府内和田墳墓群では15基調査された埋葬施設のうち墓壙内破砕土器配置が確認されたものは１基であり、執行率は７％にすぎないが、兵庫県上ノ段墳墓群では５基調査された埋葬施設のすべてで墓壙内破砕土器配置が確認され、執行率は100％である。

８）　墓壙内破砕土器配置に代わって認められるようになる墓壙上土器配置にも、少数ではあるが甕などの煮沸用器種が含まれる例が認められる。煮沸行為に用いた土器の処理形態に関して変化が生じたと見ることもできるかもしれない。

参考文献

石井智大 2003「北近畿の弥生墳墓における二種の土器出土状況とその意義」『香住門谷遺跡群』豊岡市文化財調査報告書第34集　豊岡市教育委員会

奥村清一郎ほか 1988『寺岡遺跡』野田川町文化財調査報告第２集　野田川町教育委員会

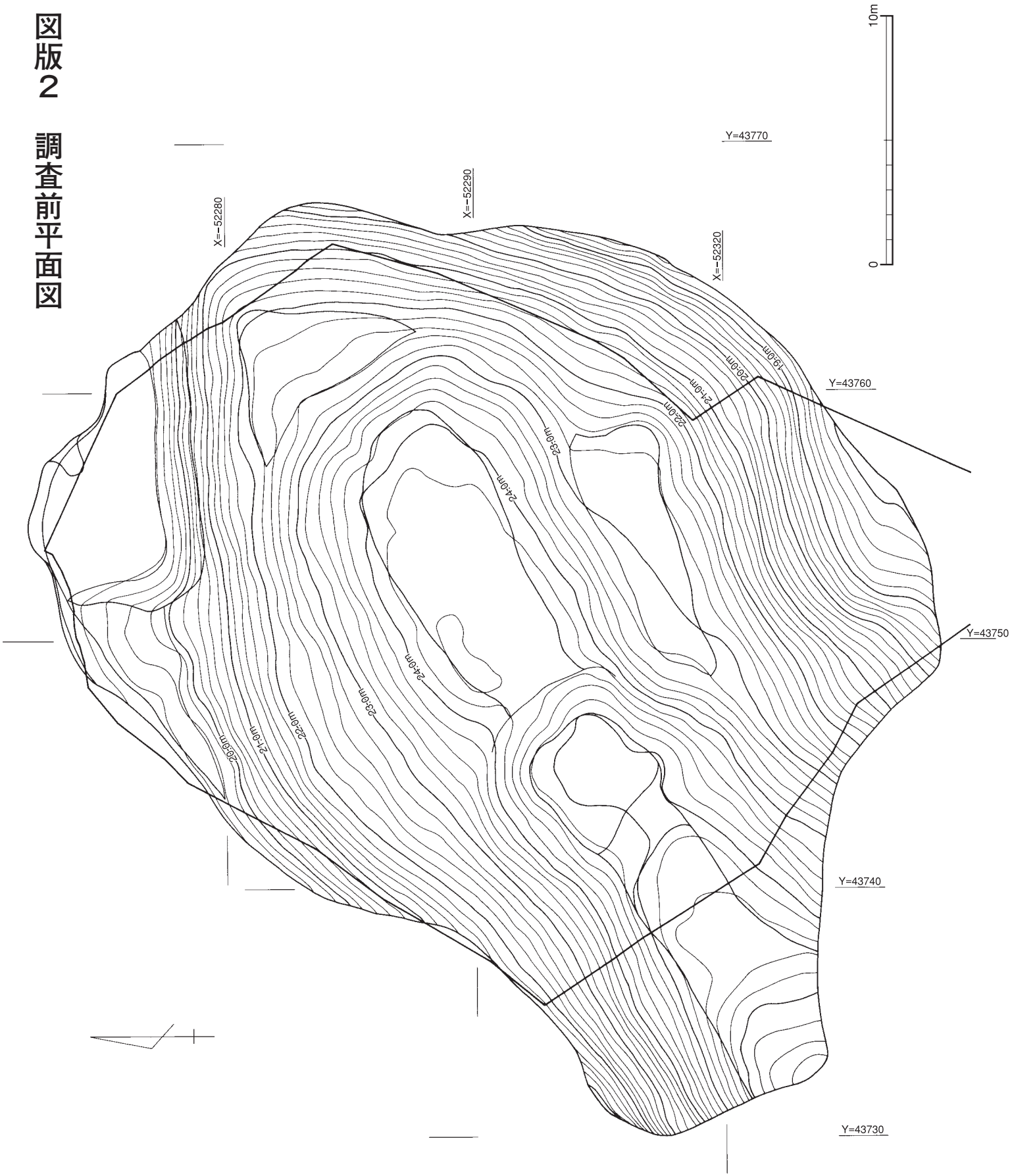
柏原正民ほか 2003『カヤガ谷墳墓群・大谷墳墓群・坪井遺跡』兵庫県文化財調査報告第259冊　兵庫県教育委員会

河野一隆 1995「２．奈具墳墓群・奈具古墳群」『京都府遺跡調査概報』第65冊　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター
瀬戸谷晧ほか 1992『上鉢山・東山墳墓群』豊岡市文化財調査報告書第26集　豊岡市教育委員会
瀬戸谷晧ほか 2002『妙楽寺墳墓群』豊岡市文化財調査報告書第32集　豊岡市教育委員会
肥後弘幸 1994「墓壙内破砕土器供献（上）・（下）」『みずほ』第12・13号　大和弥生文化の会
肥後弘幸 1996「弥生墳墓における土器供献－丹後の場合－」『ＹＡＹ！』弥生土器を語る会20回記念論集　弥生土器を語る会
松井敬代 1991「破砕土器の埋納について－豊岡市神美地域を中心として－」『但馬考古学』第６集　但馬考古学研究会
松井敬代ほか 1997『見蔵岡遺跡　その二』　竹野町教育委員会
野島永・野々口陽子 1999「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（１）」『京都府埋蔵文化財情報』第74号　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター
野島永・野々口陽子 2000「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（２）」『京都府埋蔵文化財情報』第76号　㈶京都府埋蔵文化財調査研究センター
山田清朝ほか 2002『梅田東古墳群』兵庫県埋蔵文化財調査報告第241冊　兵庫県教育委員会

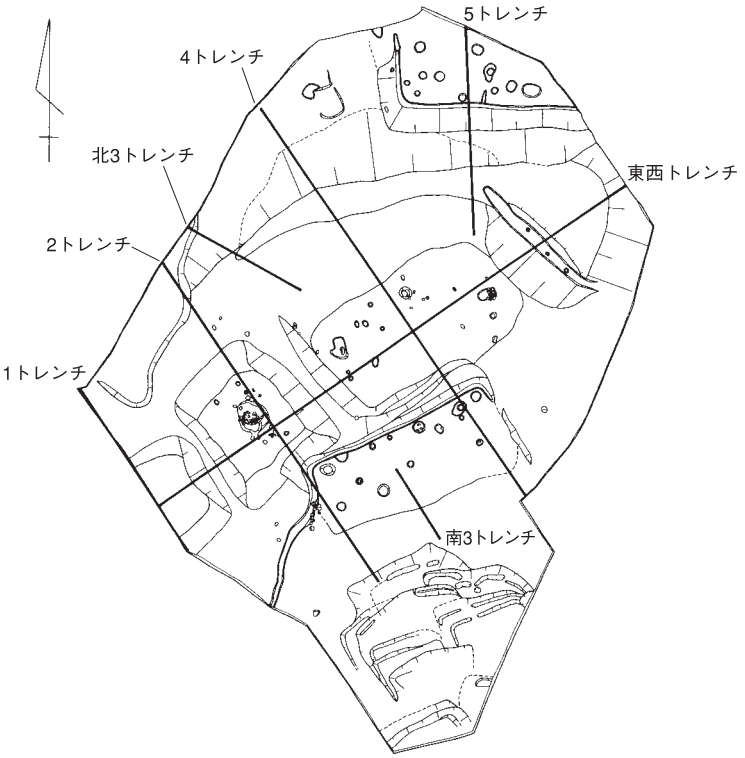
図版

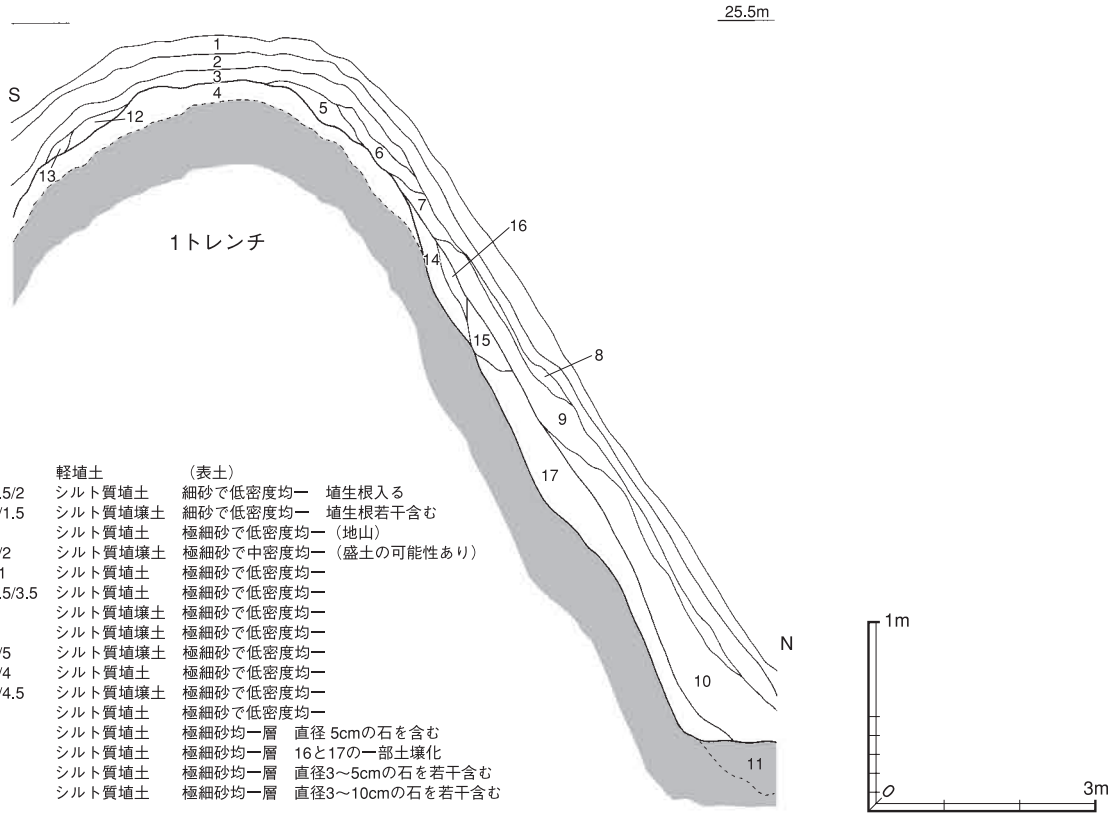
図版1　兵庫県・豊岡市・耕地谷古墳群および耕地谷城跡の位置

図版2　調査前平面図


10m
0
Y=43770
Y=43760
Y=43750
Y=43740
Y=43730
X=−52280
X=−52290
X=−52320
19.0m
20.0m
21.0m
22.0m
23.0m
24.0m

図版3　調査区土層断面図①（1トレンチ）

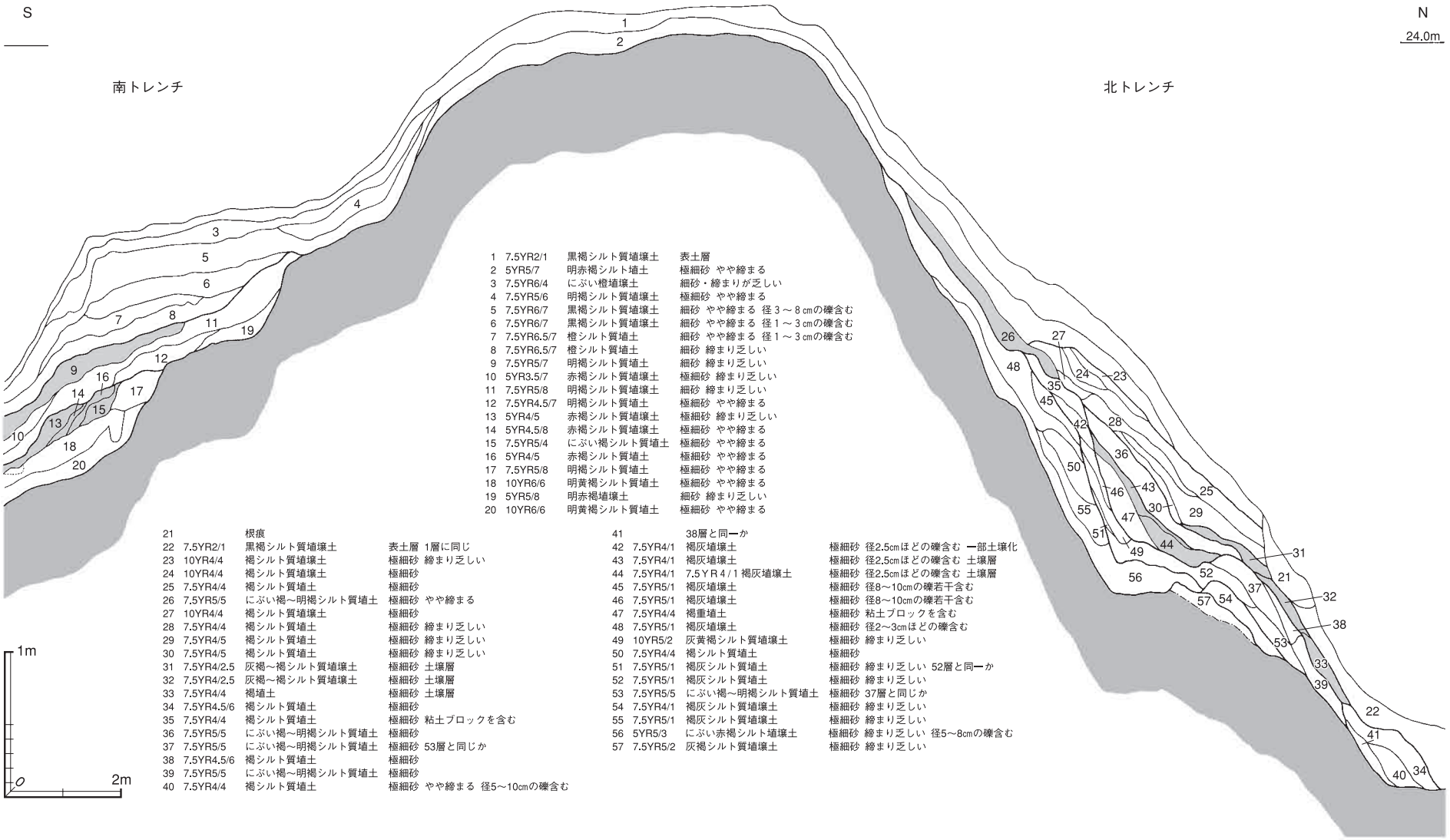




1	7.5R2/1	軽埴土	（表土）
2	2.5YR3.5/2	シルト質埴土	細砂で低密度均一　埴生根入る
3	7.5YR4/1.5	シルト質埴壌土	細砂で低密度均一　埴生根若干含む
4	5YR4/8	シルト質埴土	極細砂で低密度均一（地山）
5	7.5YR4/2	シルト質埴壌土	極細砂で中密度均一（盛土の可能性あり）
6	10YR2/1	シルト質埴土	極細砂で低密度均一
7	7.5YR3.5/3.5	シルト質埴土	極細砂で低密度均一
8	5YR4/5	シルト質埴壌土	極細砂で低密度均一
9	5YR4/7	シルト質埴壌土	極細砂で低密度均一
10	7.5YR4/5	シルト質埴壌土	極細砂で低密度均一
11	7.5YR4/4	シルト質埴土	極細砂で低密度均一
12	5YR3.5/4.5	シルト質埴壌土	極細砂で低密度均一
13	5YR4/6	シルト質埴土	極細砂で低密度均一
14	5YR5/7	シルト質埴土	極細砂均一層　直径 5cmの石を含む
15	5YR4/1	シルト質埴土	極細砂均一層　16と17の一部土壌化
16	5YR5/7	シルト質埴土	極細砂均一層　直径3～5cmの石を若干含む
17	5YR5/7	シルト質埴土	極細砂均一層　直径3～10cmの石を若干含む

図版4　調査区土層断面図②（東西トレンチ）

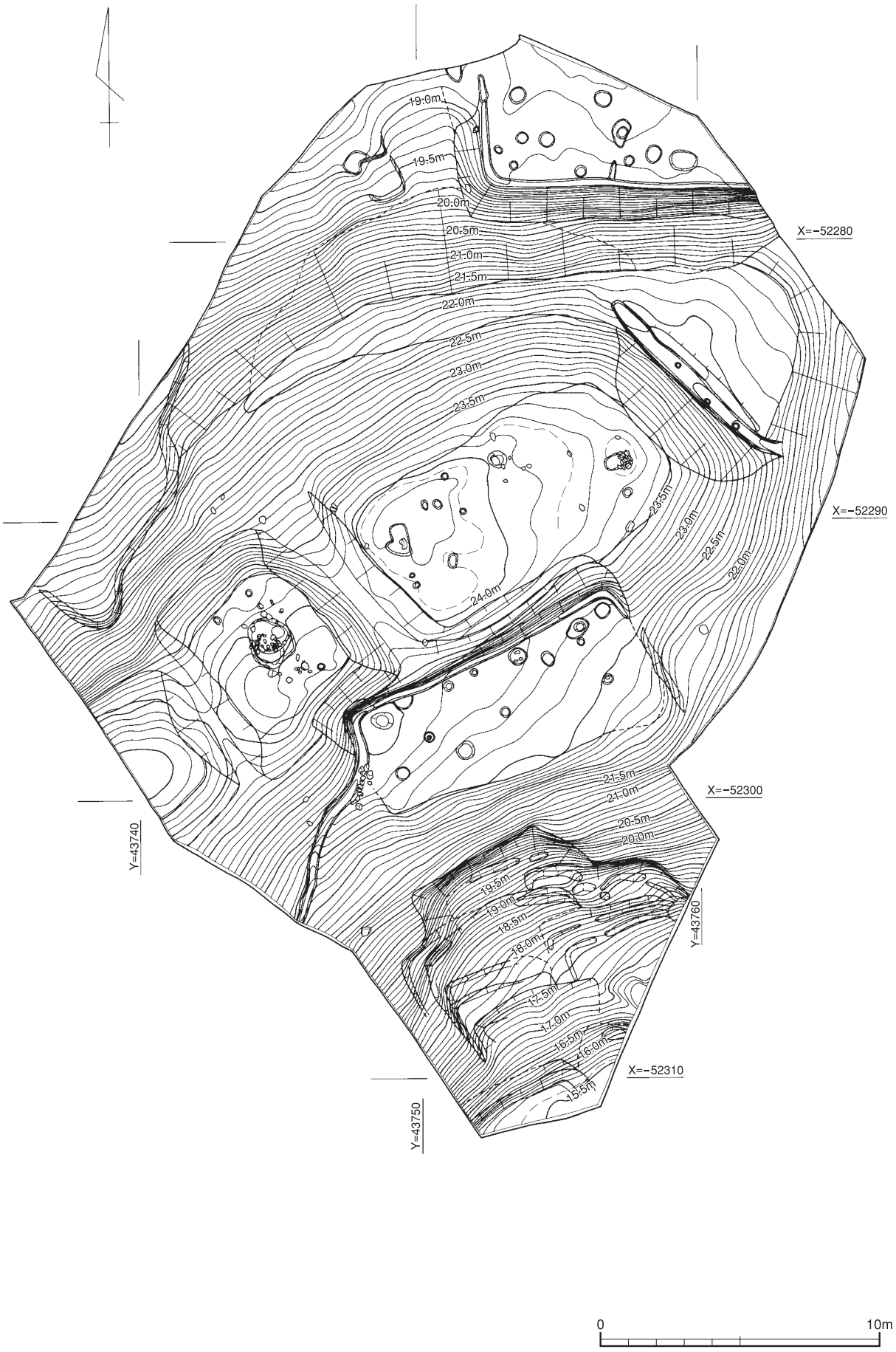
1	表土層			
2	5YR6/8	シルト質埴壌土	極細砂で均一	直径2～5cmの石を含む
3	5YR6/8	シルト質埴壌土	極細砂で均一	直径2～5cmの石を含む
4	5YR6/8	シルト質埴壌土	極細砂で均一	直径3～5cmの石を含む
5	7.5YR4/6	シルト質壌土	極細砂で均一	直径1～2cmの石を若干含む
6	7.5YR4.5/5	シルト質壌土	極細砂で均一	直径1～3cmの石を若干含む
7	7.5YR5/6	シルト質埴壌土		
8	7.5YR5/6	シルト質壌土	極細砂で均一	低密度
9	7.5YR5/6	シルト質壌土	極細砂で均一	低密度
10	7.5YR5.5/6	シルト質埴壌土	極細砂で均一	中密度
11	7.5YR5.5/6	シルト質埴壌土	極細砂で均一	中密度
12	7.5YR5.5/6	シルト質埴壌土	極細砂で均一	中密度
13	7.5YR5/4	シルト質壌土	極細砂で均一	中密度
14	7.5YR5/4	シルト質壌土	極細砂で均一	中密度



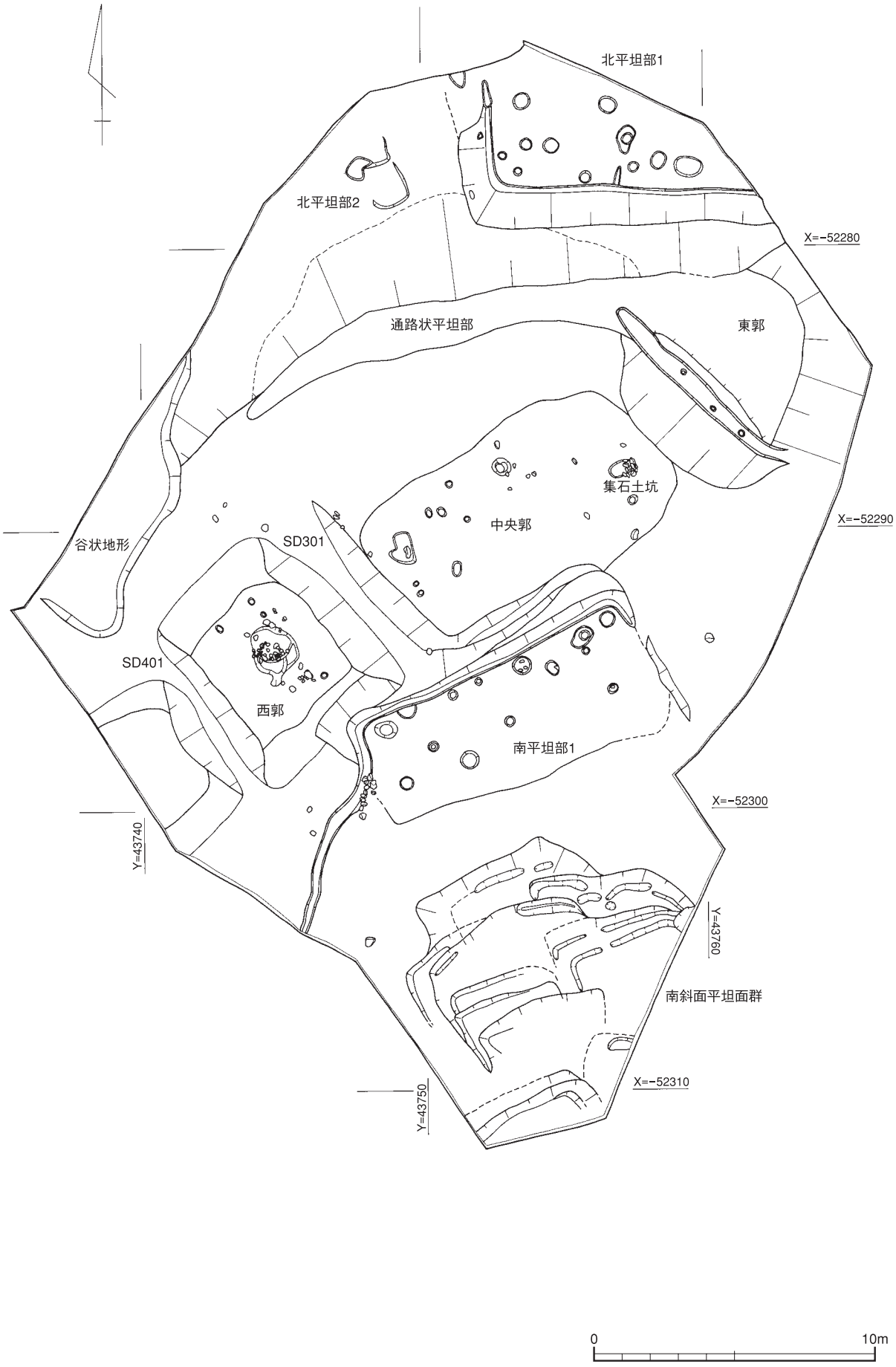
1	7.5YR2/1	黒褐シルト質埴壌土	表土層
2	5YR5/7	明赤褐シルト埴土	極細砂 やや締まる
3	7.5YR6/4	にぶい橙埴壌土	細砂・締まりが乏しい
4	7.5YR5/6	明褐シルト質埴壌土	極細砂 やや締まる
5	7.5YR6/7	黒褐シルト質埴壌土	細砂 やや締まる 径３～８㎝の礫含む
6	7.5YR6/7	黒褐シルト質埴壌土	細砂 やや締まる 径１～３㎝の礫含む
7	7.5YR6.5/7	橙シルト質埴土	細砂 やや締まる 径１～３㎝の礫含む
8	7.5YR6.5/7	橙シルト質埴土	細砂 締まり乏しい
9	7.5YR5/7	明褐シルト質埴土	細砂 締まり乏しい
10	5YR3.5/7	赤褐シルト質埴壌土	極細砂 締まり乏しい
11	7.5YR5/8	明褐シルト質埴壌土	細砂 締まり乏しい
12	7.5YR4.5/7	明褐シルト質埴土	極細砂 やや締まる
13	5YR4/5	赤褐シルト質埴壌土	極細砂 締まり乏しい
14	5YR4.5/8	赤褐シルト質埴壌土	極細砂 やや締まる
15	7.5YR5/4	にぶい褐シルト質埴土	極細砂 やや締まる
16	5YR4/5	赤褐シルト質埴土	極細砂 やや締まる
17	7.5YR5/8	明褐シルト質埴土	極細砂 やや締まる
18	10YR6/6	明黄褐シルト質埴土	極細砂 やや締まる
19	5YR5/8	明赤褐埴壌土	細砂 締まり乏しい
20	10YR6/6	明黄褐シルト質埴土	極細砂 やや締まる
21		根痕	
22	7.5YR2/1	黒褐シルト質埴壌土	表土層 1層に同じ
23	10YR4/4	褐シルト質埴壌土	極細砂 締まり乏しい
24	10YR4/4	褐シルト質埴壌土	極細砂
25	7.5YR4/4	褐シルト質埴土	極細砂
26	7.5YR5/5	にぶい褐～明褐シルト質埴土	極細砂 やや締まる
27	10YR4/4	褐シルト質埴壌土	極細砂
28	7.5YR4/4	褐シルト質埴土	極細砂 締まり乏しい
29	7.5YR4/5	褐シルト質埴土	極細砂 締まり乏しい
30	7.5YR4/5	褐シルト質埴土	極細砂 締まり乏しい
31	7.5YR4/2.5	灰褐～褐シルト質埴壌土	極細砂 土壌層
32	7.5YR4/2.5	灰褐～褐シルト質埴壌土	極細砂 土壌層
33	7.5YR4/4	褐埴土	極細砂 土壌層
34	7.5YR4.5/6	褐シルト質埴土	極細砂
35	7.5YR4/4	褐シルト質埴土	極細砂 粘土ブロックを含む
36	7.5YR5/5	にぶい褐～明褐シルト質埴土	極細砂
37	7.5YR5/5	にぶい褐～明褐シルト質埴土	極細砂 53層と同じか
38	7.5YR4.5/6	褐シルト質埴土	極細砂
39	7.5YR5/5	にぶい褐～明褐シルト質埴土	極細砂
40	7.5YR4/4	褐シルト質埴土	極細砂 やや締まる 径5～10㎝の礫含む
41		38層と同一か	
42	7.5YR4/1	褐灰埴壌土	極細砂 径2.5㎝ほどの礫含む 一部土壌化
43	7.5YR4/1	褐灰埴壌土	極細砂 径2.5㎝ほどの礫含む 土壌層
44	7.5YR4/1	7.5ＹＲ４/１褐灰埴壌土	極細砂 径2.5㎝ほどの礫含む 土壌層
45	7.5YR5/1	褐灰埴壌土	極細砂 径8～10㎝の礫若干含む
46	7.5YR5/1	褐灰埴壌土	極細砂 径8～10㎝の礫若干含む
47	7.5YR4/4	褐重埴土	極細砂 粘土ブロックを含む
48	7.5YR5/1	褐灰埴壌土	極細砂 径2～3㎝ほどの礫含む
49	10YR5/2	灰黄褐シルト質埴壌土	極細砂 締まり乏しい
50	7.5YR4/4	褐シルト質埴土	極細砂
51	7.5YR5/1	褐灰シルト質埴土	極細砂 締まり乏しい 52層と同一か
52	7.5YR5/1	褐灰シルト質埴土	極細砂 締まり乏しい
53	7.5YR5/5	にぶい褐～明褐シルト質埴土	極細砂 37層と同じか
54	7.5YR4/1	褐灰シルト質埴壌土	極細砂 締まり乏しい
55	7.5YR5/1	褐灰シルト質埴壌土	極細砂 締まり乏しい
56	5YR5/3	にぶい赤褐シルト埴壌土	極細砂 締まり乏しい 径5～8㎝の礫含む
57	7.5YR5/2	灰褐シルト質埴壌土	極細砂 締まり乏しい

図版5　調査区土層断面図③（サブトレ）

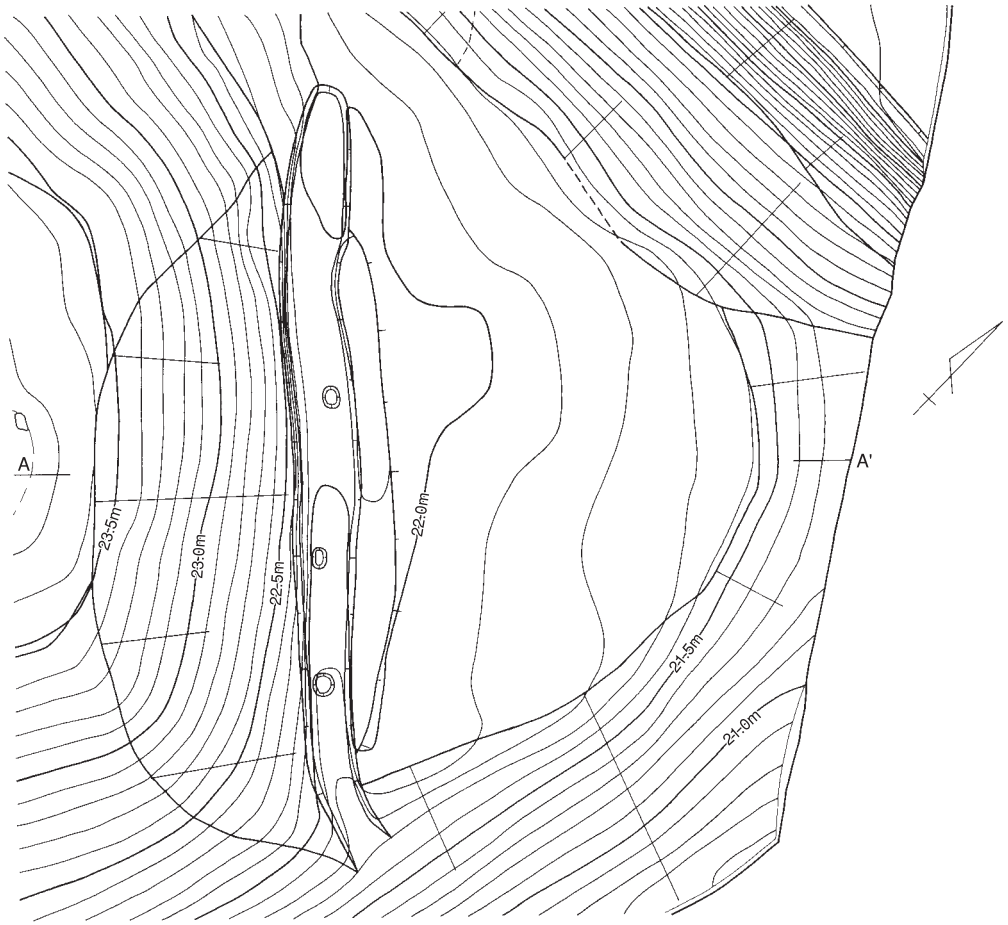
図版6　上層遺構（耕地谷城跡）平面図

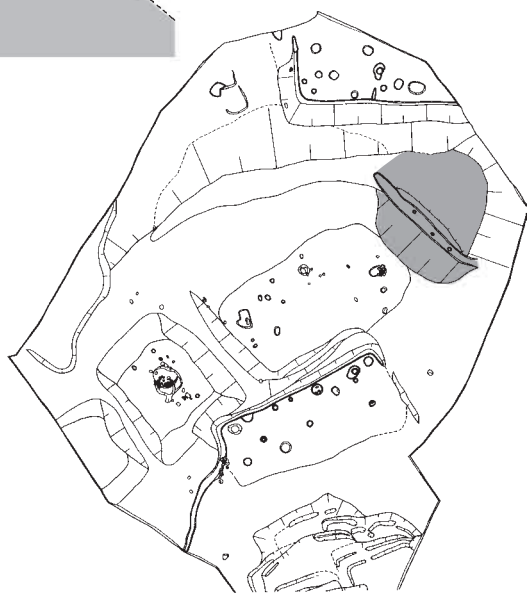


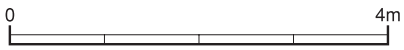
図版7　上層遺構（耕地谷城跡）遺構配置図



図版8　東郭平面図・断面図







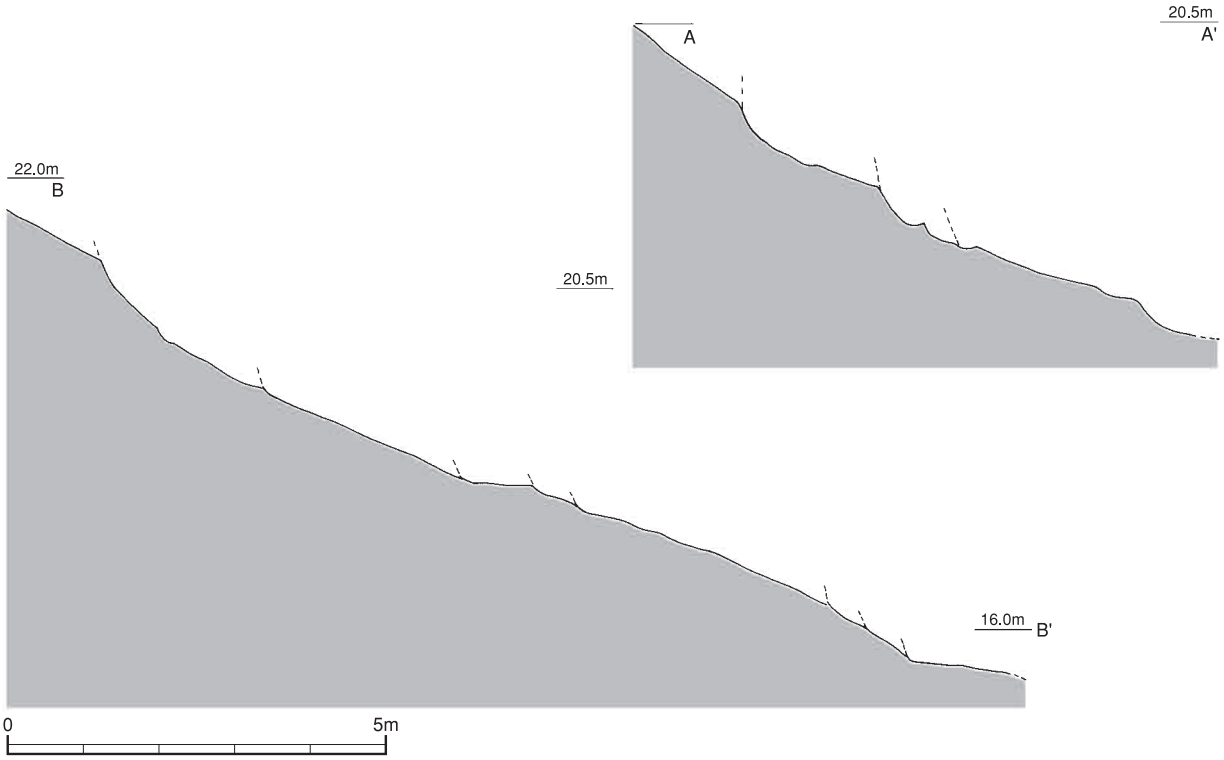
図版9　中央郭・西郭平面図

図版10　北平坦部1平面図・断面図

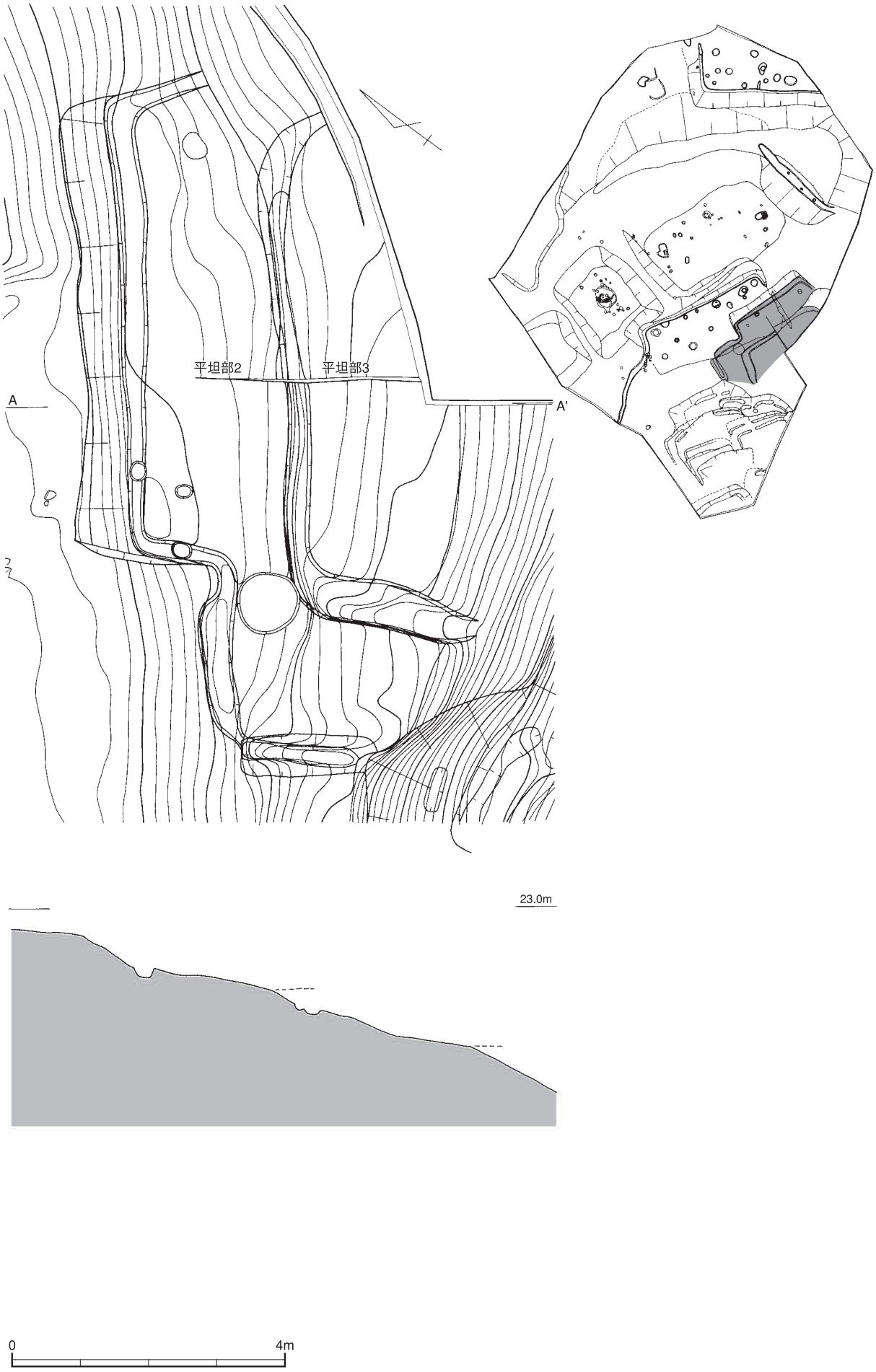
図版11　南平坦部1平面図・断面図

1　5YR5.5/6　シルト質埴壌土　極細砂均一層
2　5YR5.5/5　シルト質埴壌土　極細砂均一層　埴生根侵入

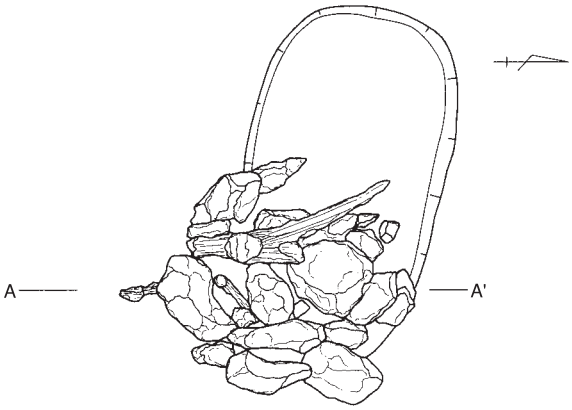
図版12　南斜面平坦部面群平面図・断面図

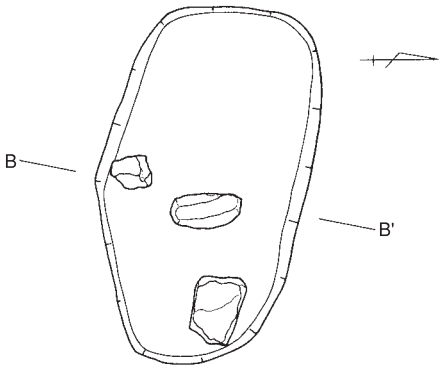


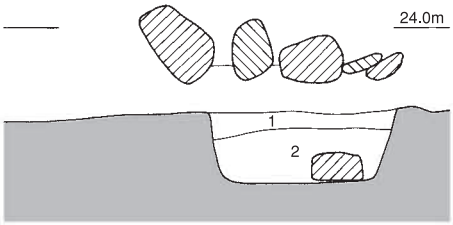
図版13　南斜面平坦部2・3平面図・断面図



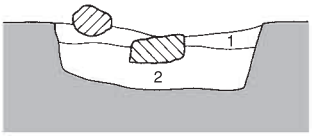
図版14　集石土坑SX001・南平坦部SD001石組







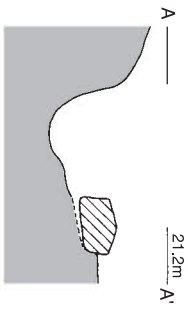
上層（集石遺構）

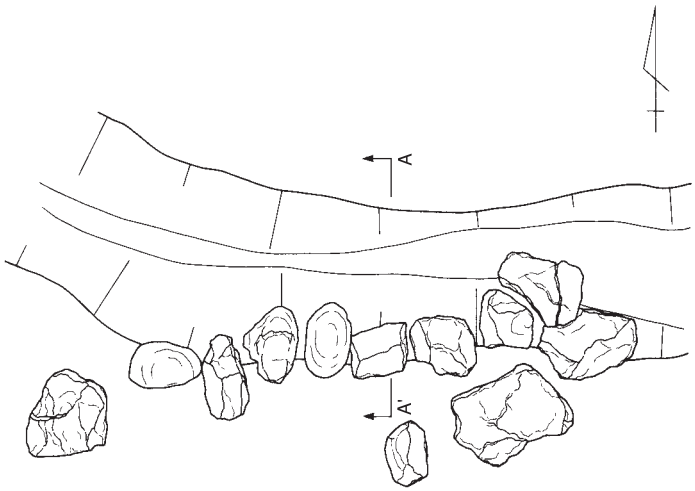


1　7.5YR4/6褐　シルト質細砂　　極細砂～細砂　土壌（木根多し）
2　7.5YR4/5褐　シルト質極細砂　極細砂～細砂　しまり固く所々粘土かむ

下層（土坑）

集石土坑　SX001

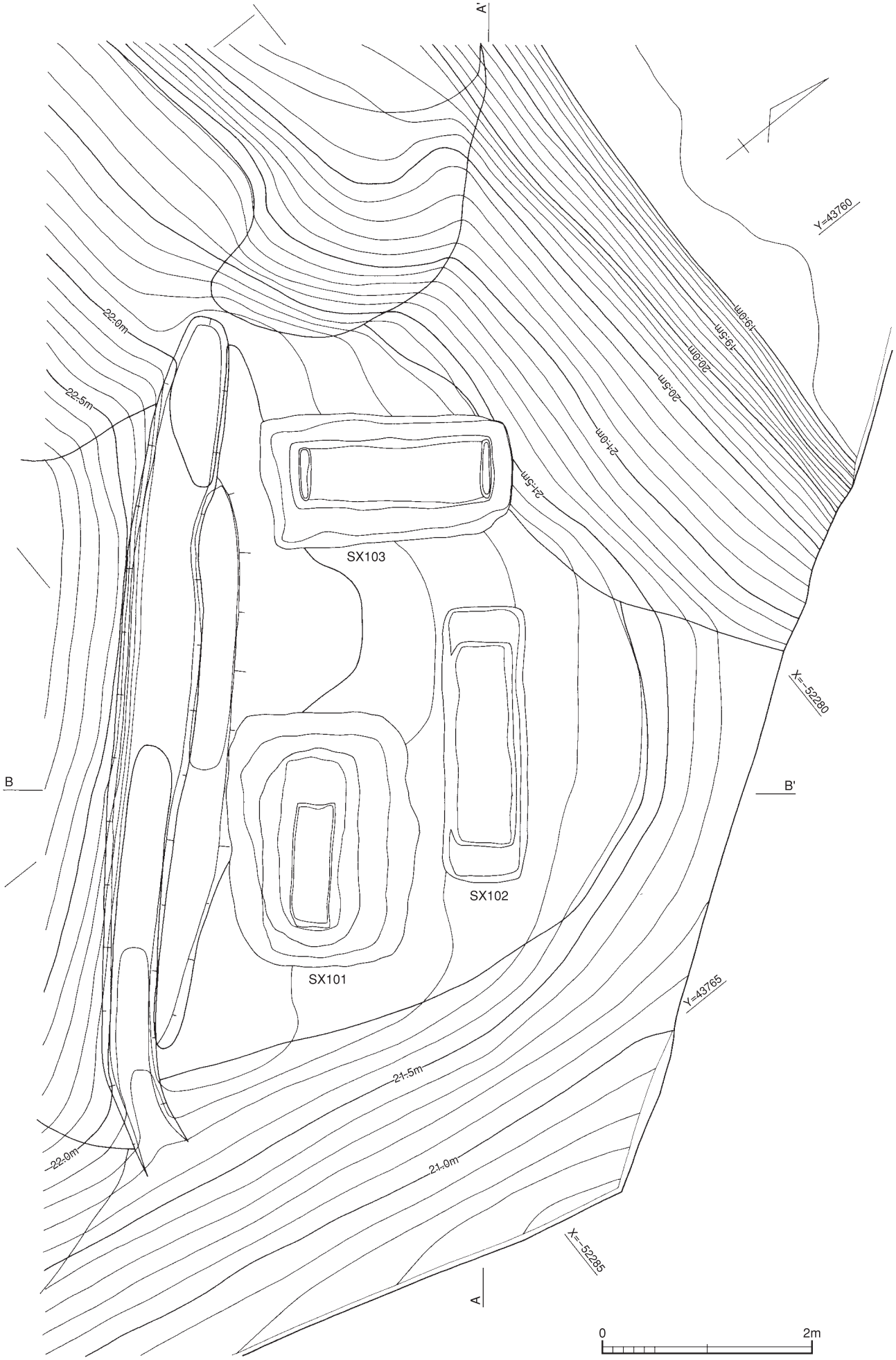


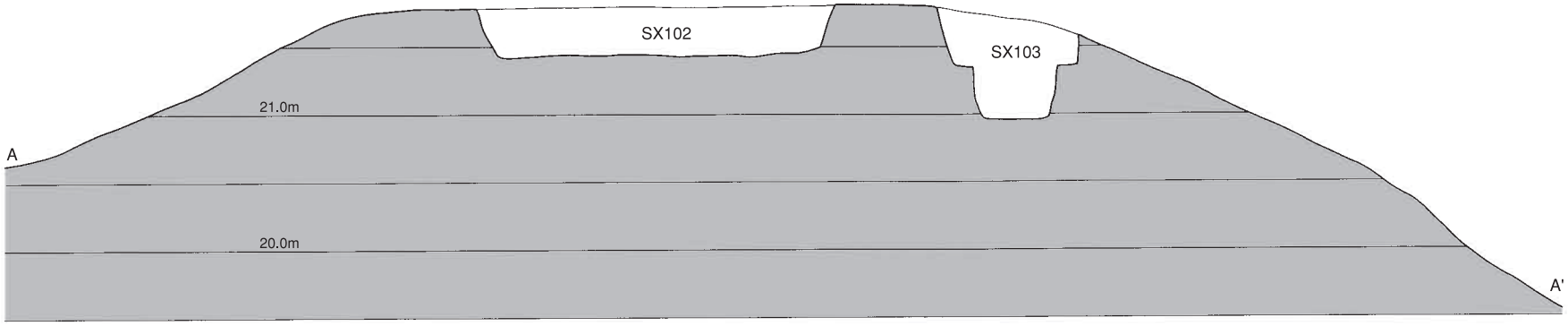


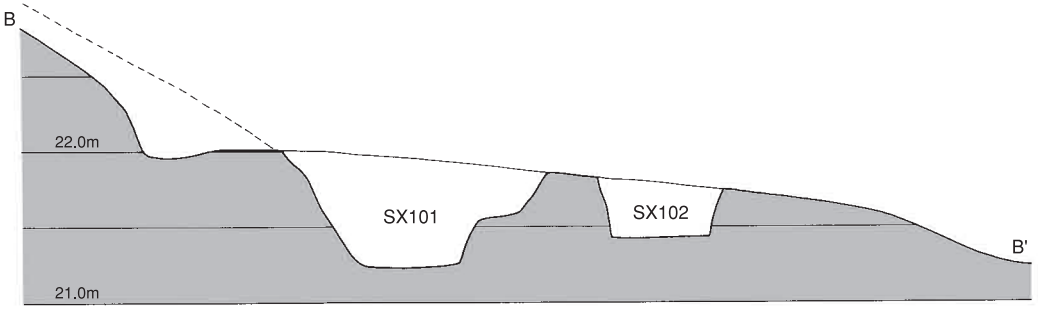
南平坦部1壁溝SD001石組部分詳細

図版15　下層遺構（耕地谷古墳群）平面図

図版16　1号墳平面図

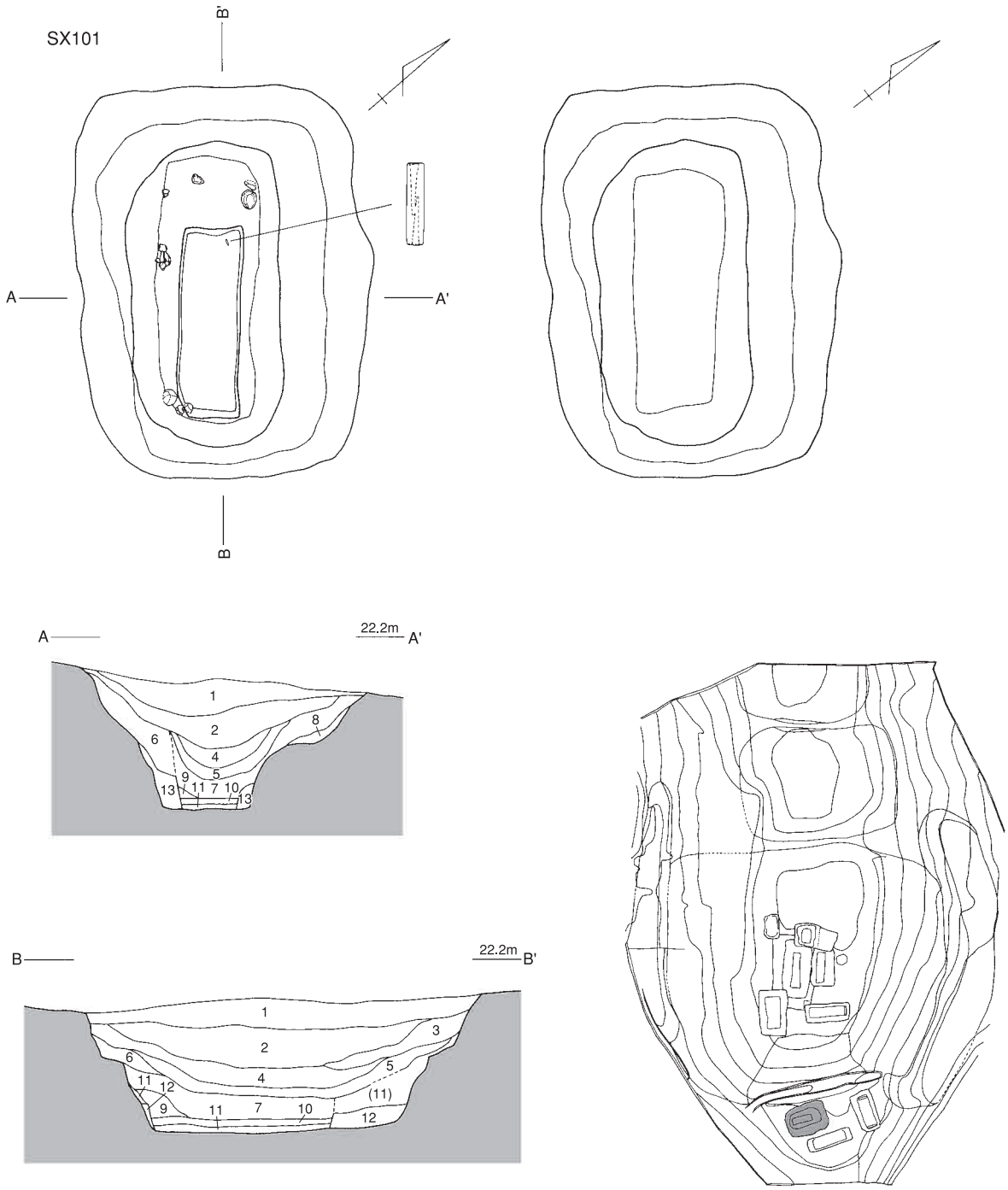

A'
Y=43760
19.0m
19.5m
20.0m
20.5m
21.0m
21.5m
22.0m
22.5m
SX103
SX102
SX101
X=-52280
B
B'
Y=43765
21.5m
21.0m
22.0m
X=-52285
A
0
2m





図版17　1号墳断面図

図版18 SX101

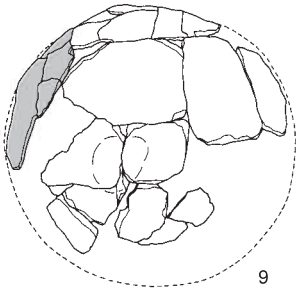


SX101

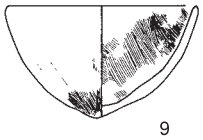
1	10YR5/7	黄褐	極細砂～細砂	緊密度低い
2	10YR4/7	褐	極細砂～細砂	緊密度低いが２層より高い
3	10YR4.5/7	褐灰	極細砂	
4	7.5YR5/6	明黄褐	細砂	
5	7.5YR5/5	にぶい褐	細砂	中礫をやや多く含む
6	7.5YR5/4	にぶい褐	細砂	緊密度やや高い
7	7.5YR4/3	褐	粗砂～中礫まじり細砂	中礫をやや多く含む
8	7.5YR5/1.5	褐灰	細砂～中砂	
9	7.5YR4/1	褐灰	粗砂～中礫まじり細砂	中礫を多く含む
10	7.5YR4/2	灰褐	細砂	
11	7.5YR5/3	にぶい褐	細砂～中砂	緊密度やや高い
13	7.5YR5/1.5	灰褐	粗砂まじり細砂～中砂	緊密度やや高い

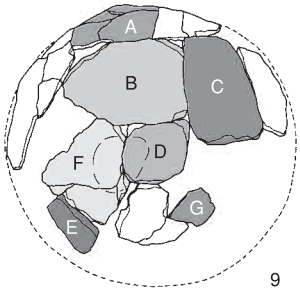
0 2m

図版19　SX101墓壙内破砕土器配置状況

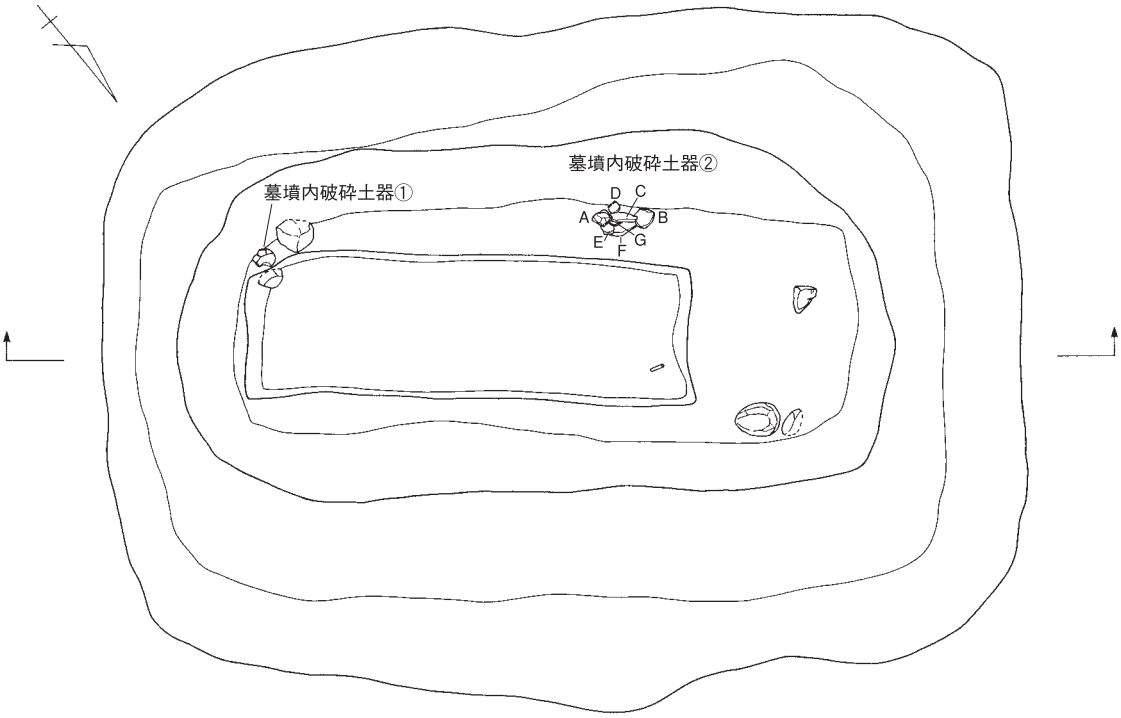


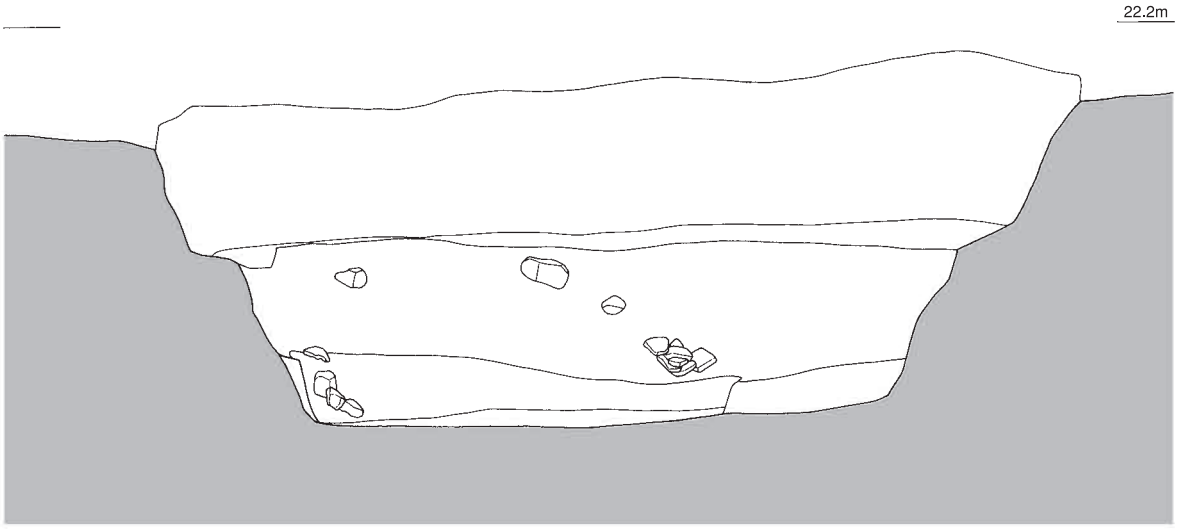
墓壙内破砕土器①





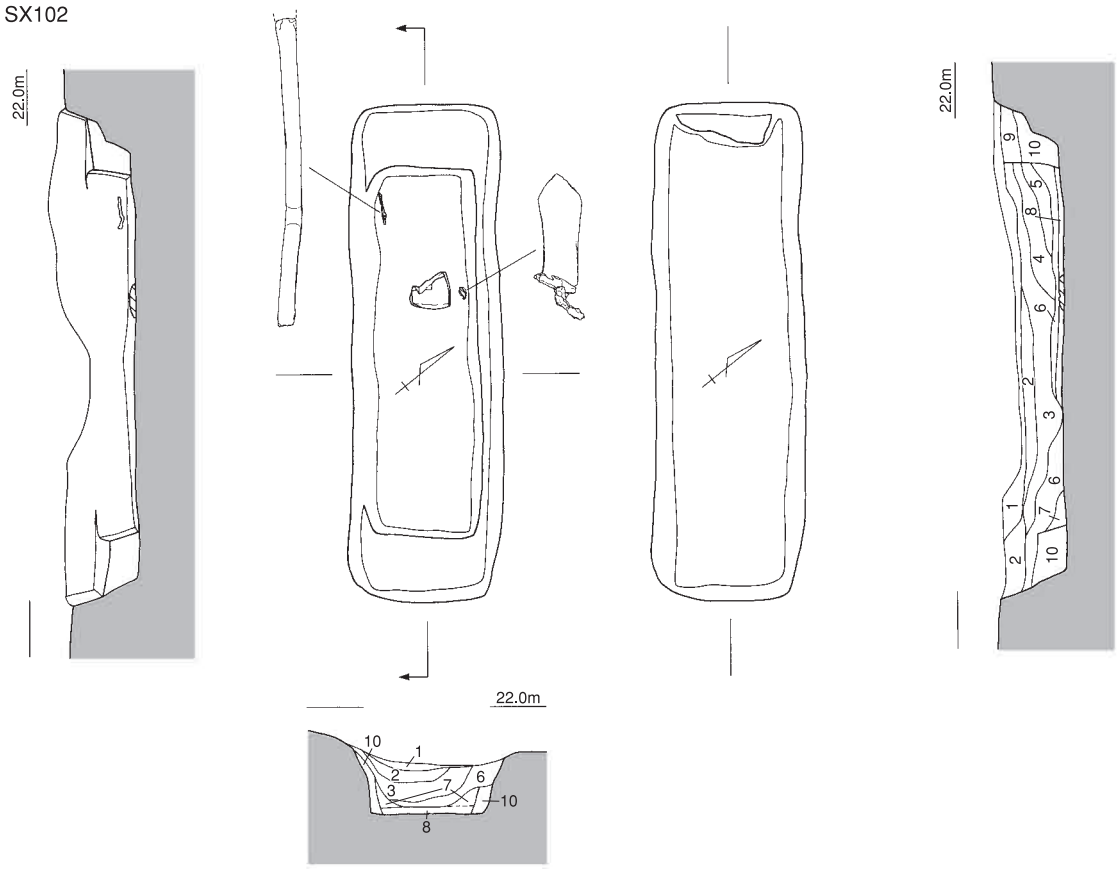
墓壙内破砕土器②





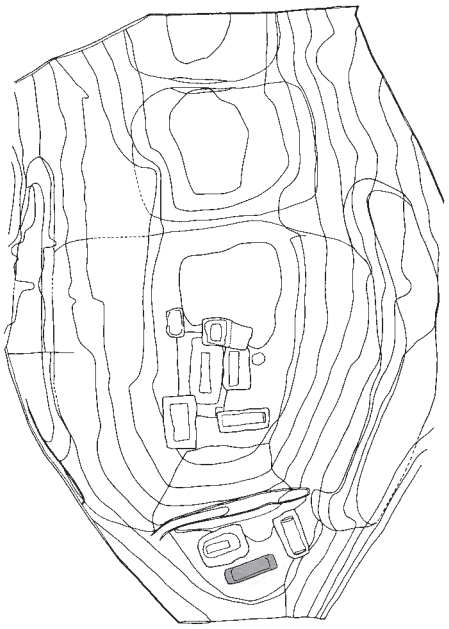
図版20 SX102

SX102

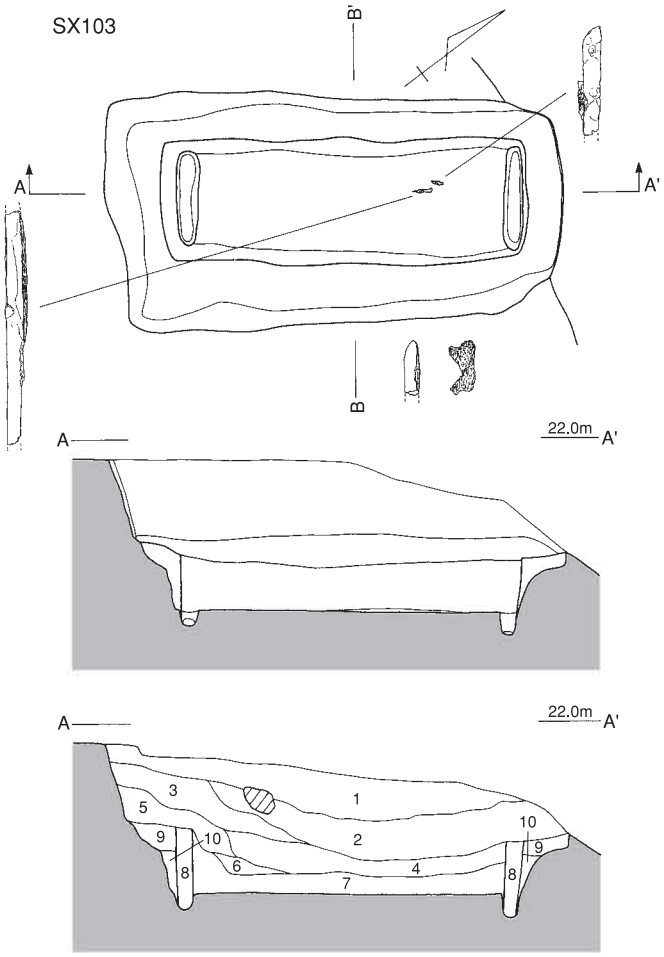


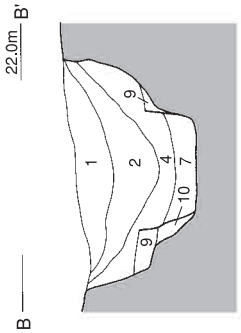
SX102

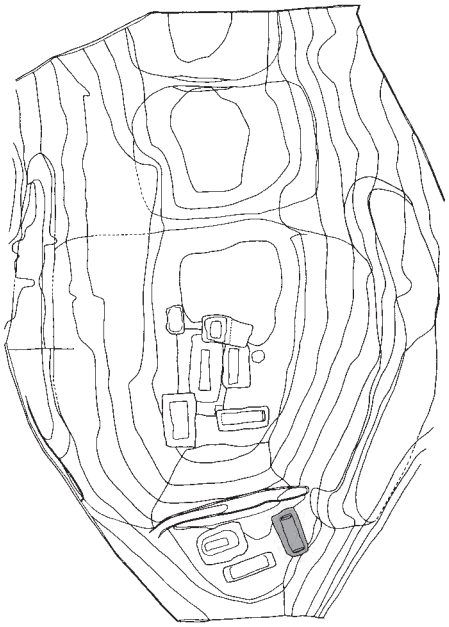
1	10YR5/7	黄褐	極細砂～細砂	緊密度低い
2	7.5YR5/5	明黄褐	細砂	中礫を含む
3	7.5YR5/4	にぶい褐	細砂	中礫を含む
4	7.5YR5/5	明黄褐	細砂	
5	7.5YR5/4	にぶい褐	細砂	
6	7.5YR4/4	褐	極細砂～細砂	中礫を含む
7	7.5YR4/2	灰褐	粗砂まじり細砂	
8	7.5YR5/5	明黄褐	細砂	緊密度やや高い
9	7.5YR5/4	にぶい褐	細砂	
10	7.5YR5/3	にぶい褐	極細砂～細砂	



0 2m





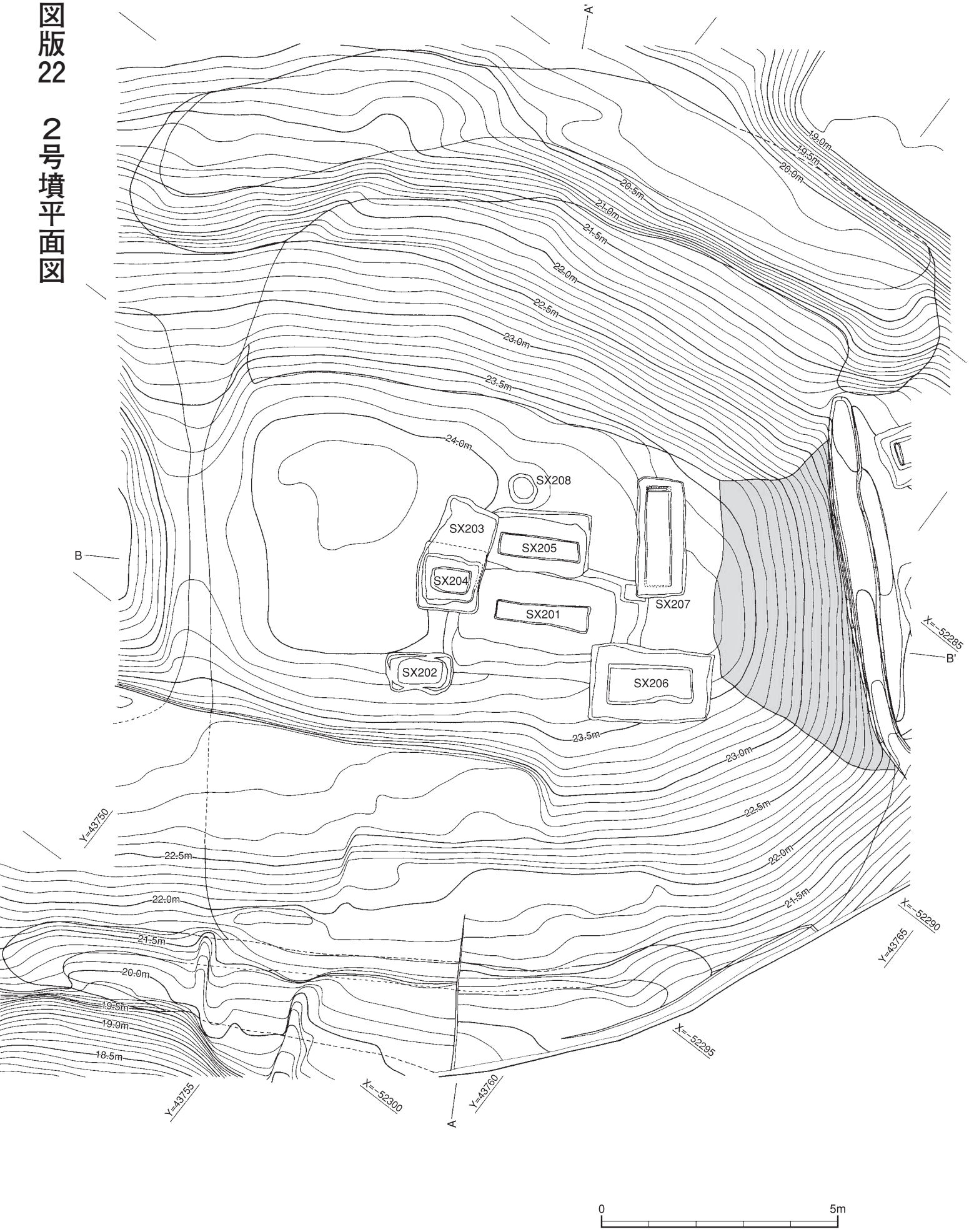


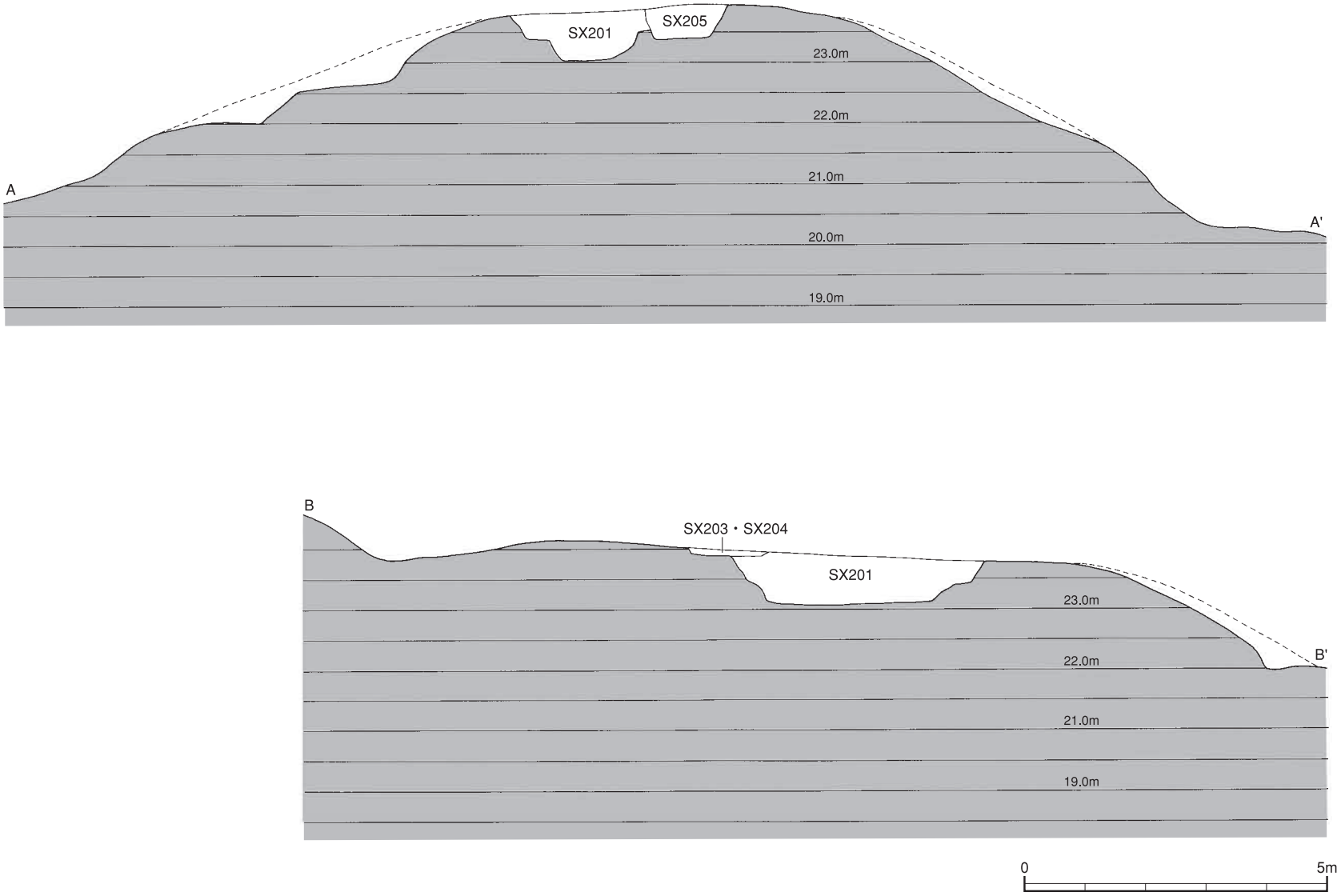
SX103

1	7.5YR5/6	明褐	極細砂～細砂	緊密度低い
2	7.5YR5/4	にぶい褐	極細砂～細砂	緊密度低い
3	7.5YR5/4	にぶい褐	細砂	中礫を含む
4	7.5YR5/2.5	灰褐	細砂	中礫を含む
5	7.5YR5/4	にぶい褐	細砂	
6	7.5YR5/3	にぶい褐	細砂	中礫を含む
7	7.5YR5/2.5	灰褐	細砂	中礫を含む
8	7.5YR5/6	明褐	細砂	緊密度やや高い
9	7.5YR5/4	にぶい褐	細砂	
10	7.5YR5/5	明黄褐	細砂	

0 2m

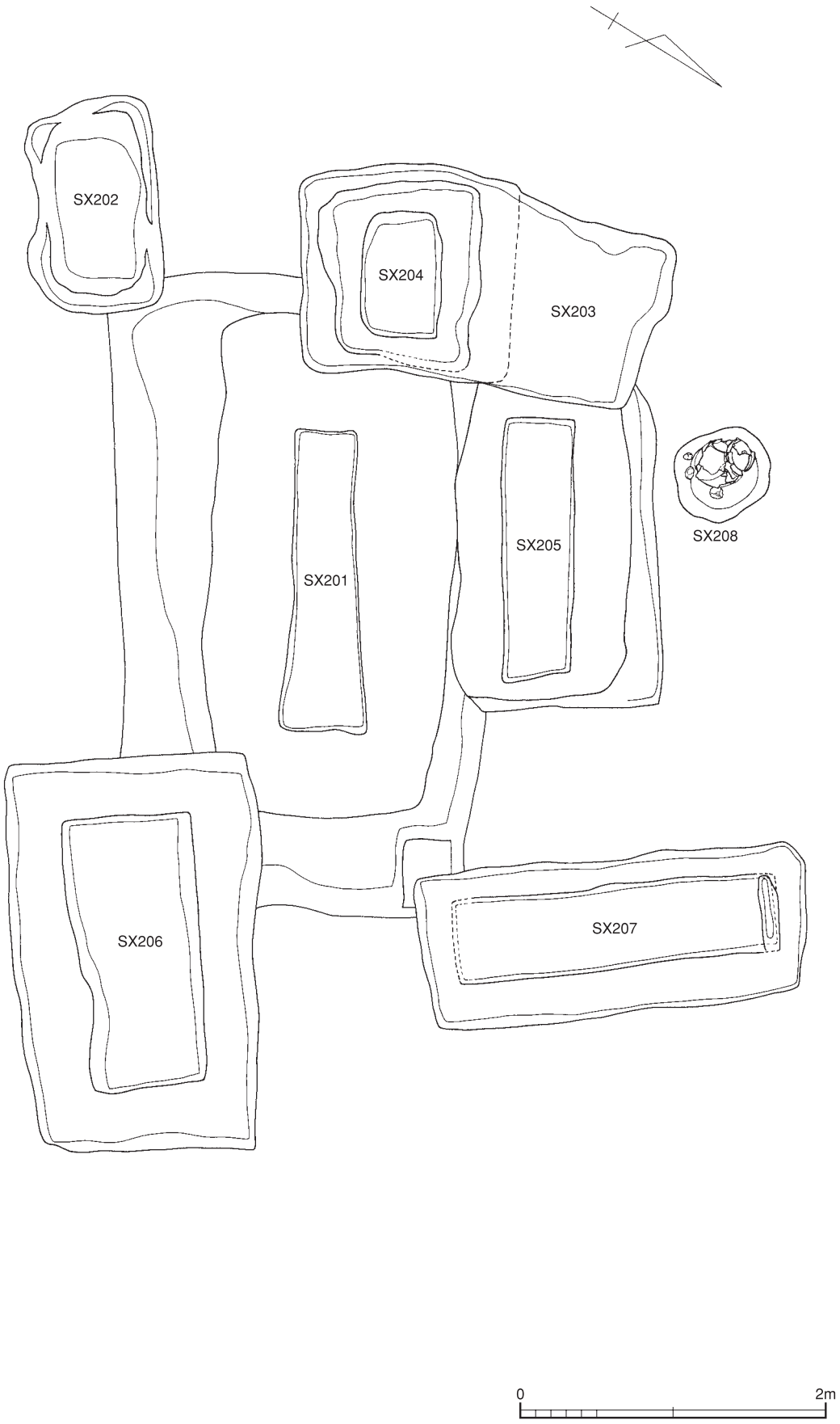
図版22　2号墳平面図


A'
19.0m
19.5m
20.0m
20.5m
21.0m
21.5m
22.0m
22.5m
23.0m
23.5m
24.0m
SX208
SX203
SX205
SX204
SX201
SX207
SX202
SX206
B
B'
X=-52285
Y=43750
22.5m
22.0m
21.5m
20.0m
19.5m
19.0m
18.5m
X=-52290
Y=43765
X=-52295
Y=43755
X=-52300
Y=43760
A
0
5m

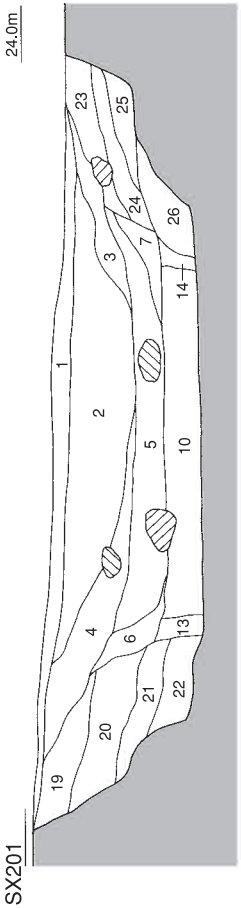

SX201
SX205
23.0m
22.0m
21.0m
20.0m
19.0m
A
A'
B
SX203・SX204
SX201
23.0m
22.0m
21.0m
19.0m
B'
0
5m

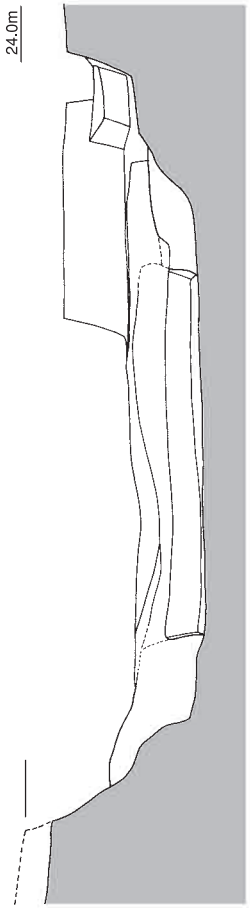
図版23　2号墳断面図

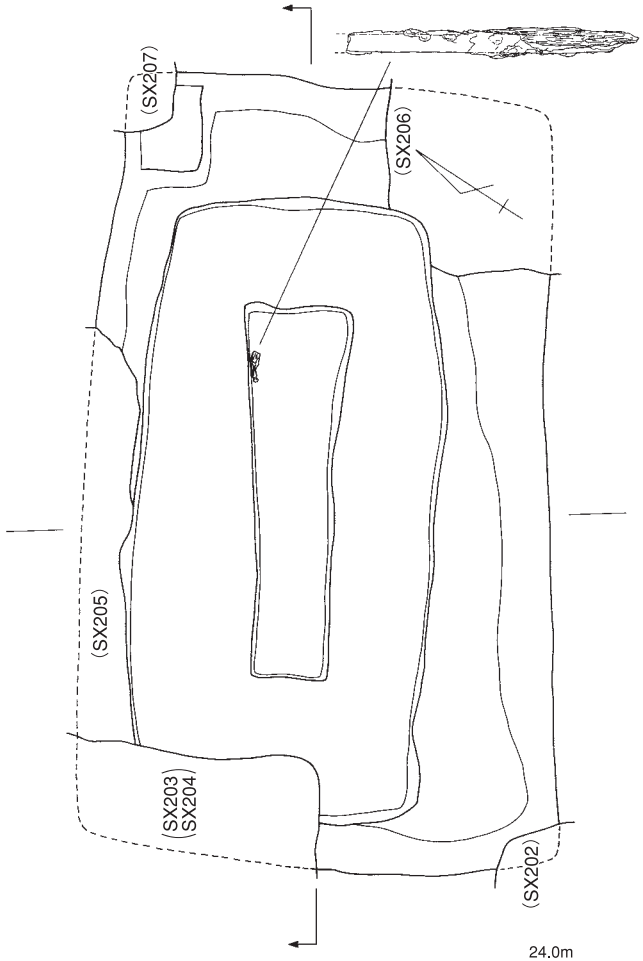
図版24　2号墳主体部配置図

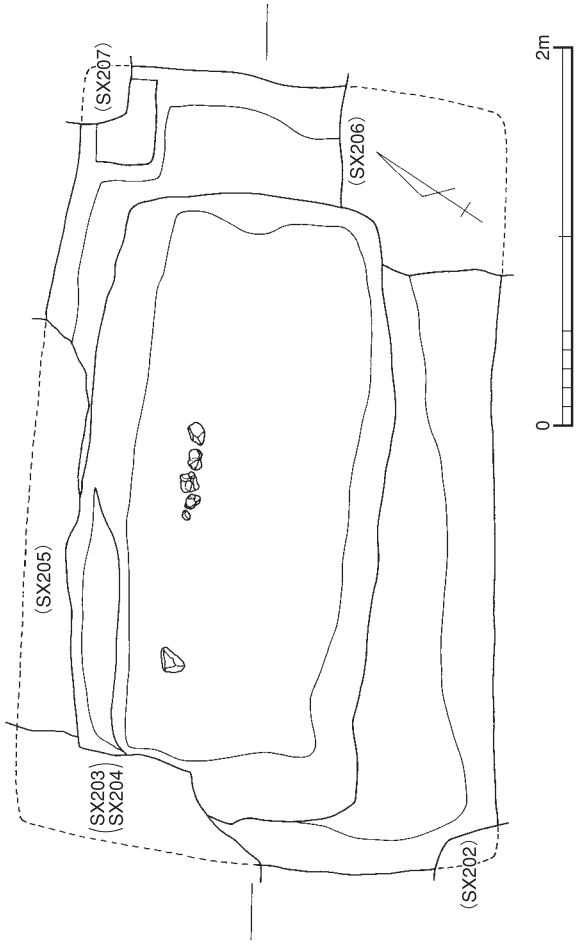


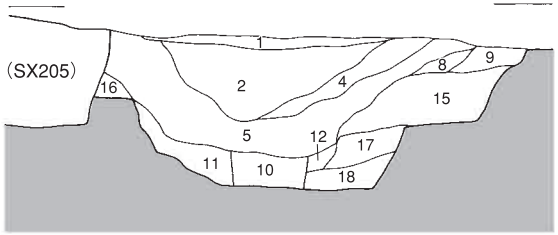
図版25　SX201









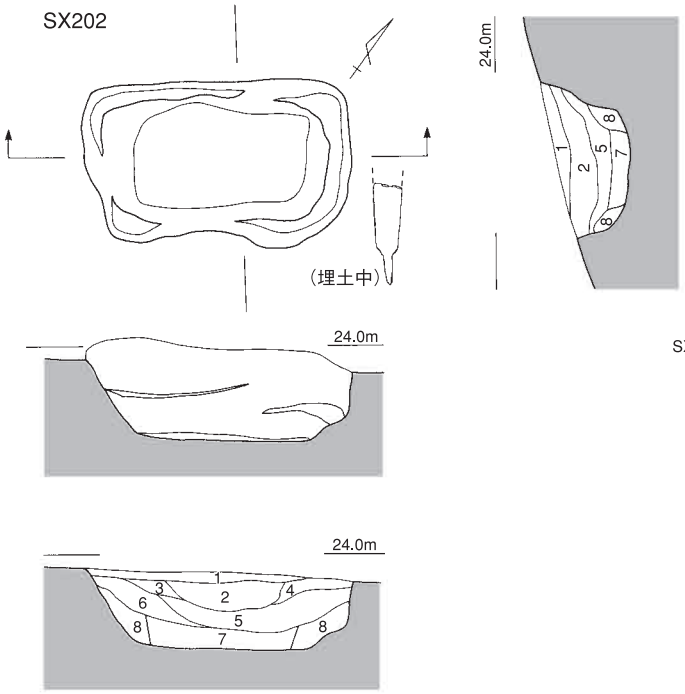


SX201

1	7.5YR3/5	暗褐	細砂	
2	7.5YR4/6	褐	細砂	
3	7.5YR4/4	褐	極細砂～細砂	
4	7.5YR4/2	灰褐	細砂	
5	7.5YR5/3	にぶい褐	細砂	直径3～5cm程度の中礫を多く含む
6	7.5YR4/3	褐	細砂	直径3～5cm程度の中礫を含む
7	7.5YR3/4	暗褐	極細砂～細砂	
8	7.5YR4/2	灰褐	極細砂～細砂	
9	7.5YR4/6	褐	粗砂まじり細砂	
10	5YR4/7	赤褐	極細砂～細砂	中礫を含む
11	7.5YR5/4	にぶい褐	極細砂～細砂	
12	7.5YR5/1	褐灰	細砂～粗砂	緊密度低い・地山土を多く含む
13	7.5YR4/5	褐	細砂	
14	7.5YR4/6	褐	粗砂まじり細砂	
15	7.5YR4.5/7	褐	極細砂～細砂	緊密度やや高い
16	7.5YR4/2	灰褐	細砂	
17	7.5YR5/3	にぶい褐	細砂～粗砂	
18	7.5YR5/2	灰褐	細砂～粗砂	
19	7.5YR4/6	褐	極細砂～細砂	
20	7.5YR4/6	褐	極細砂～細砂	緊密度やや高い・中礫含む
21	5YR4/5	にぶい赤褐	極細砂～細砂	
22	5YR5/5	にぶい赤褐	極細砂～細砂	
23	5YR4/1	褐灰	細砂～粗砂	
24	5YR4/2	灰褐	細砂～粗砂	
25	5Y4/3	にぶい赤褐	細砂～粗砂	中礫を含む
26	5Y5/3	にぶい赤褐	細砂～粗砂	中礫を含む

図版26 SX202～SX204

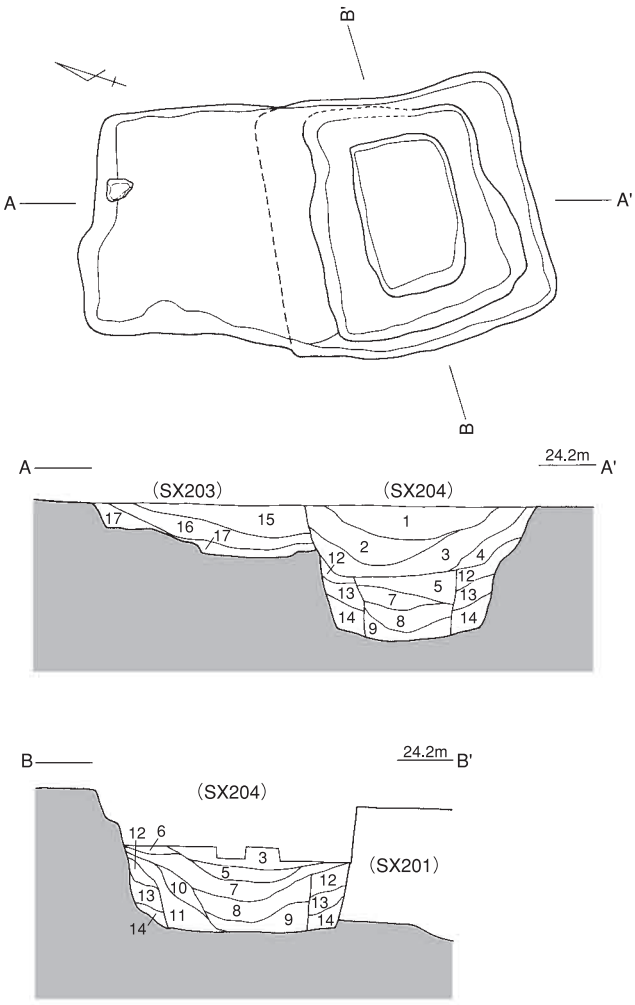
SX202

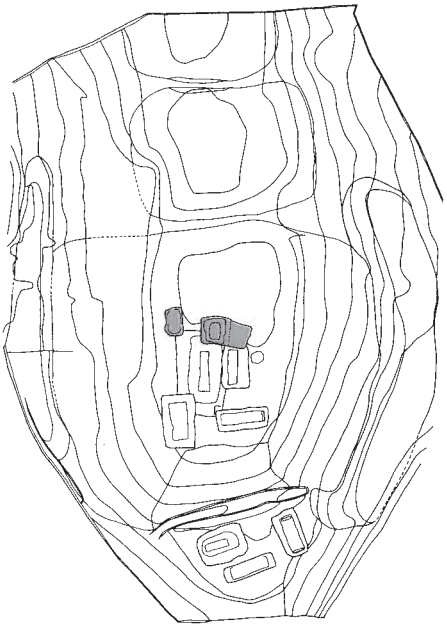


SX202

1	7.5YR5/1	褐灰	細砂	
2	7.5YR5/2	灰褐	細砂	
3	7.5YR5/3	にぶい褐	極細砂～細砂	
4	5YR5/2	灰褐	細砂	緊密度やや低い
5	5YR5/3	にぶい赤褐	極細砂～細砂	
6	5YR5/4	にぶい赤褐	極細砂～細砂	
7	5YR4/3	にぶい赤褐	細砂	
8	5YR4/4	にぶい赤褐	極細砂～細砂	

SX203・SX204

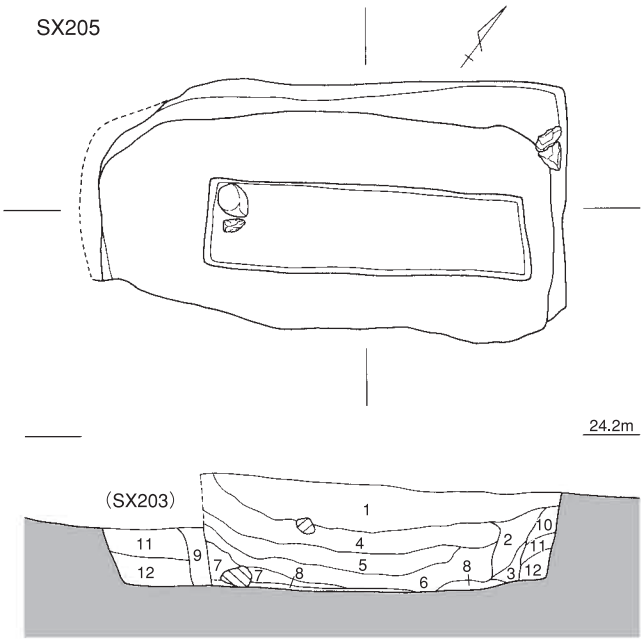


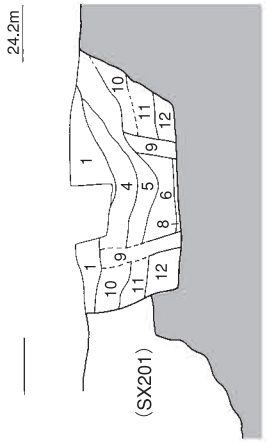


SX203・204

1	5YR5/3	にぶい赤褐	細砂	緊密度やや低い
2	5YR5/4	にぶい赤褐	極細砂～細砂	比較的中礫少ない
3	5YR4/2	灰褐	細砂	中礫をやや多く含む
4	5YR4/1	褐灰	細砂	中礫をわずかに含む
5	7.5YR5/1	褐灰	細砂	中礫を含む
6	5YR6/1	褐灰	極細砂～細砂	中礫が少ない
7	5YR5/1	褐灰	細砂	中礫を多く含む
8	5YR4/3	にぶい赤褐	細砂	中礫が少く緊密度低い
9	5YR5/3	にぶい赤褐	細砂	中礫を含む
10	7.5YR5/1	褐灰	細砂	中礫を多く含む
11	7.5YR5/2	灰褐	細砂～粗砂	中～大礫を含む
12	7.5YR5/3	にぶい褐	極細砂～細砂	緊密度やや高い
13	7.5YR5/2	灰褐	極細砂～細砂	中礫をわずかに含む
14	7.5YR5/1	褐灰	極細砂～細砂	中礫を含む
15	5YR6/3	にぶい褐	細砂	
16	5YR5/2	灰褐	細砂	
17	5YR5/3	にぶい赤褐	極細砂～細砂	中礫をわずかに含む

0 2m

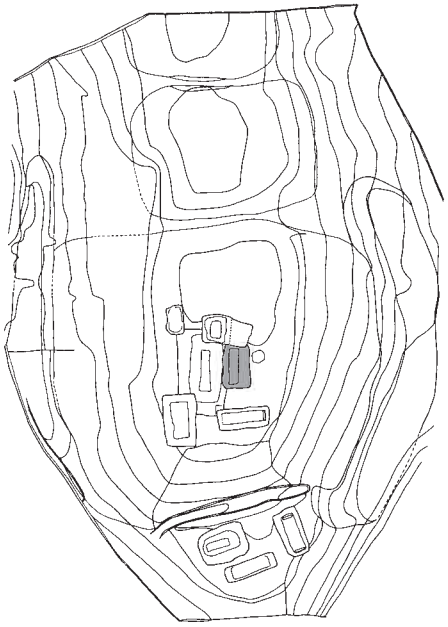




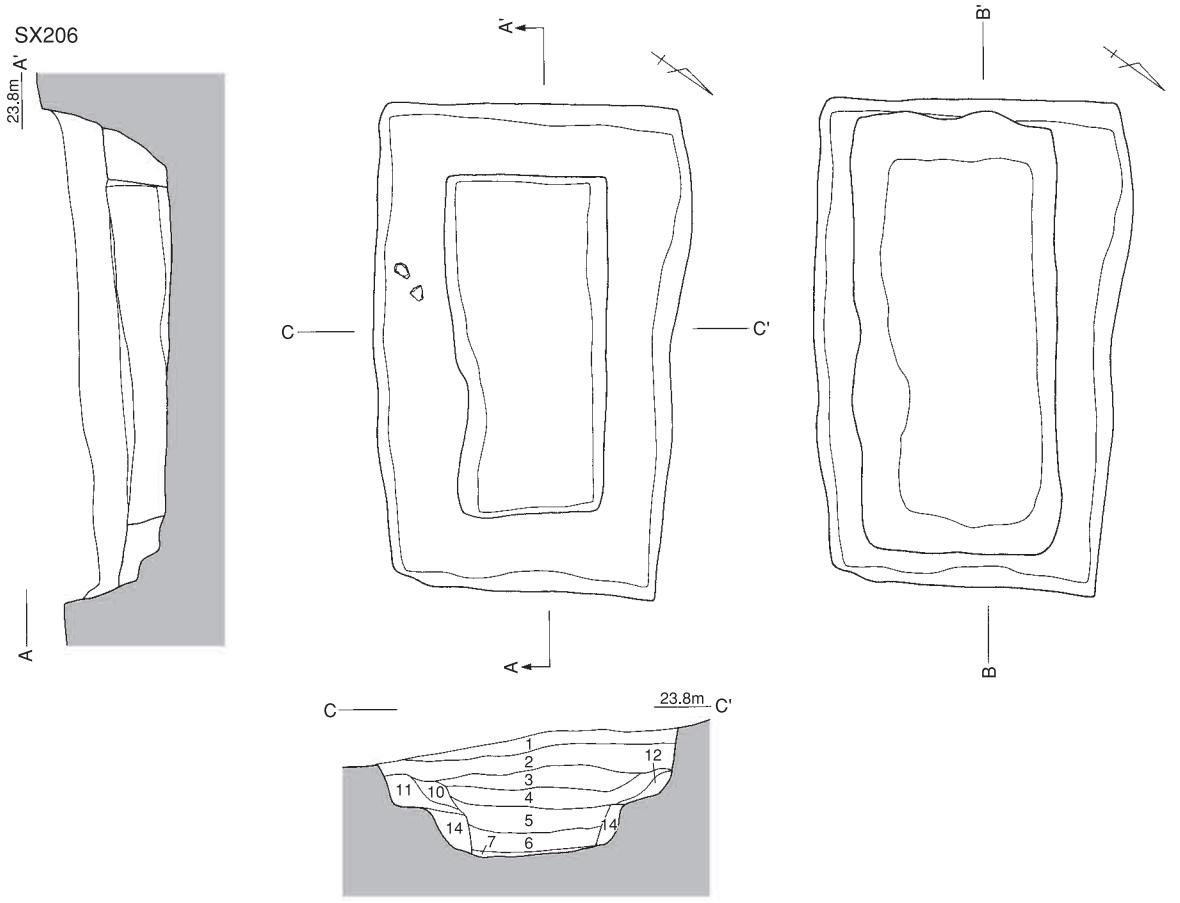
SX205

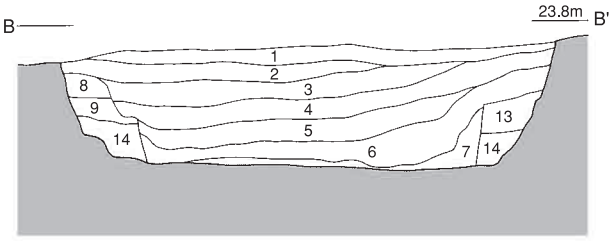
1	7.5YR5/4	にぶい褐	極細砂～細砂	
2	7.5YR5/2	灰褐	極細砂～細砂	中礫を多く含む
3	7.5YR5/3	にぶい褐	極細砂～細砂	中礫を少量含む
4	5YR5/4	にぶい赤褐	細砂	
5	5YR5/3	にぶい赤褐	細砂	中礫を含む
6	5YR4/2	灰褐	細砂	中礫を含む
7	5YR4/1	褐灰	極細砂～細砂	中礫を多く含む
8	5YR4/2	灰褐	極細砂～細砂	
9	5YR6/4	にぶい橙	細砂	
10	5YR5/4	にぶい赤褐	細砂	中礫を含む
11	5YR5/3	にぶい赤褐	細砂	ベース土を含む
12	5YR5/2	褐灰	細砂	ベース土を含む

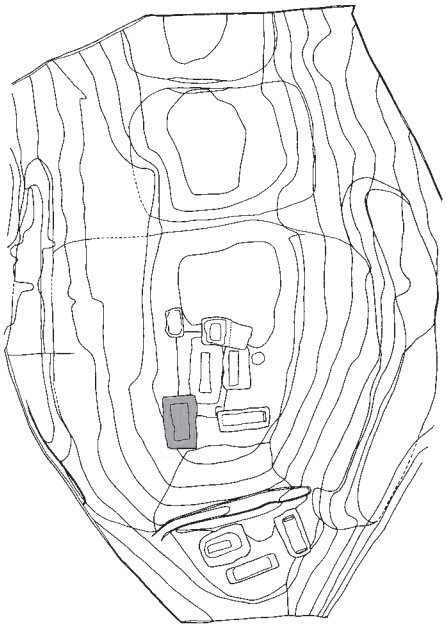
0 2m



図版28 SX206





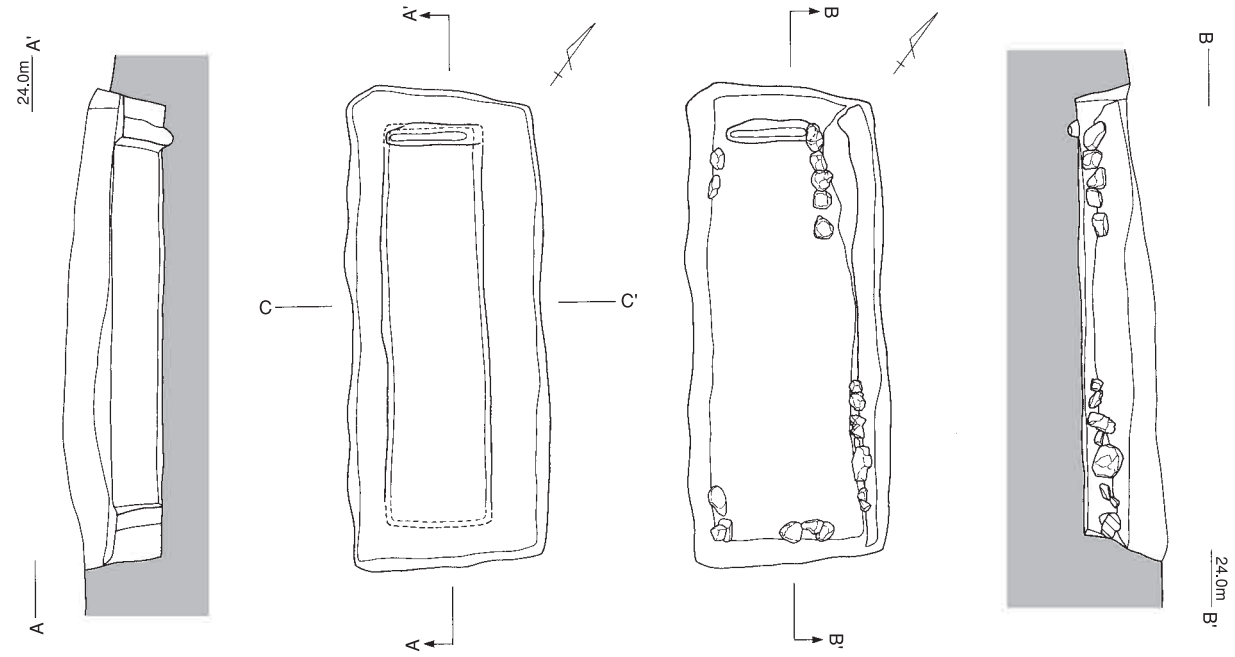


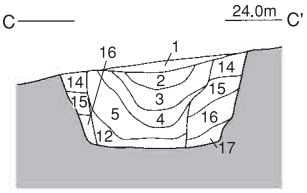
SX206

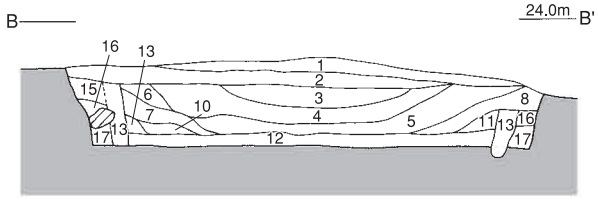
1	7.5YR5/1	褐灰	細砂	
2	7.5YR5/2	灰褐	細砂	中礫を少量含む
3	7.5YR5/3	にぶい褐	極細砂～細砂	中礫を多く含む
4	7.5YR4/3	褐	細砂	中礫を含む
5	5YR4/3	にぶい赤褐	細砂	中礫を含む
6	5YR4/2	灰褐	細砂	緊密度やや低い
7	7.5YR4/1	褐灰	細砂	中礫を多く含む
8	5YR4/1	褐灰	細砂	
9	7.5YR4/1	褐灰	細砂	
10	5YR5/3	にぶい黄褐	細砂	ベース土を含む
11	5YR5/1	灰褐	細砂	
12	5YR5/2	褐灰	細砂	
13	7.5YR4/4	褐	細砂	中礫・ベース土を含む
14	7.5YR4/2	灰褐	細砂	ベース土を多く含む

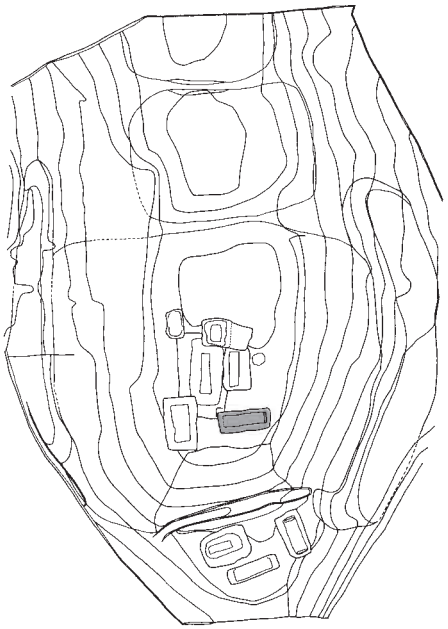
0 2m

SX207







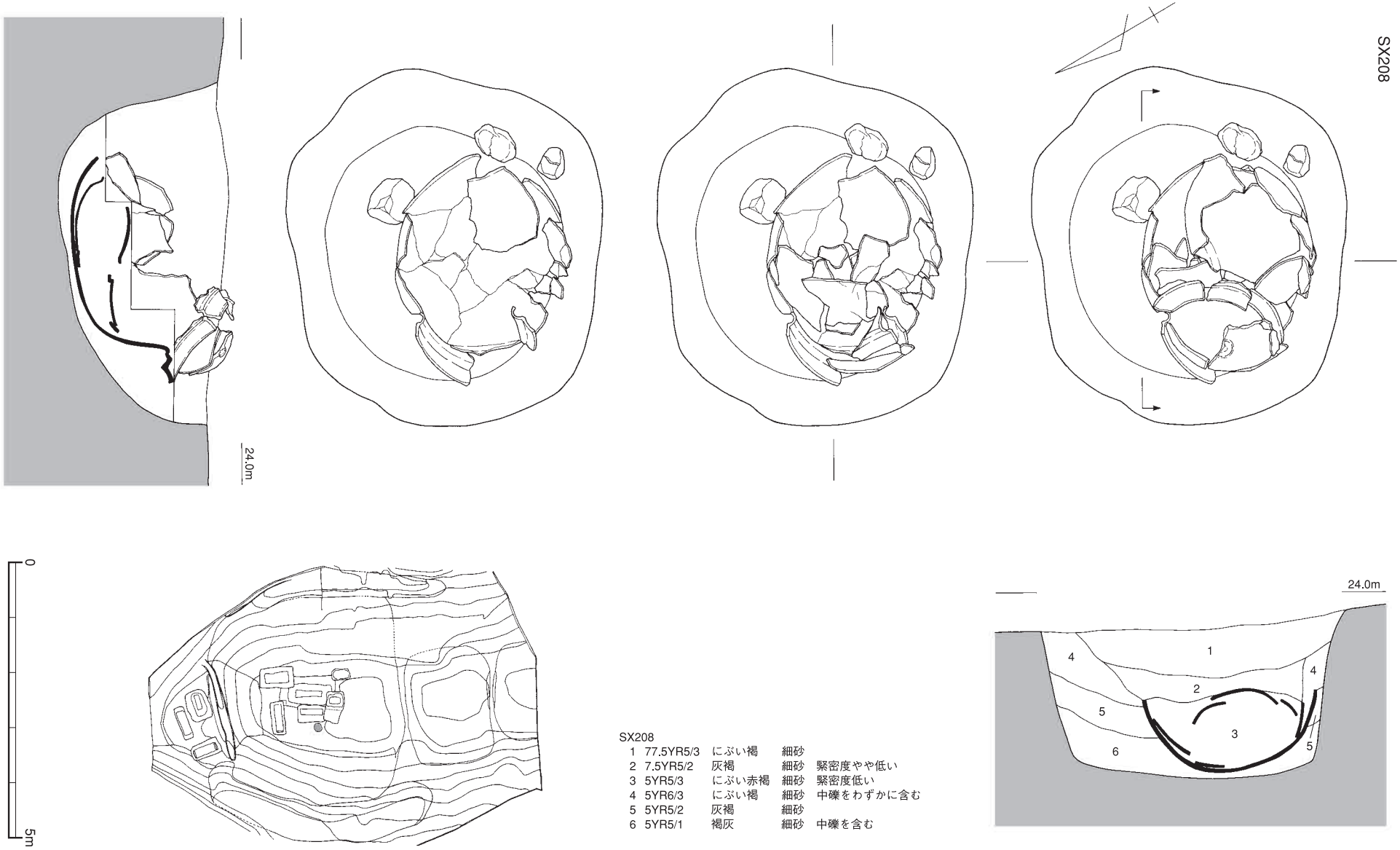


SX207

1	7.5YR6/2	灰褐	細砂	
2	7.5YR6/3	にぶい褐	細砂	
3	7.5YR6/4	にぶい橙	極細砂～細砂	
4	7.5YR5/3	にぶい褐	細砂	中礫を含む
5	7.5YR5/2	灰褐	細砂	
6	7.5YR5/2	灰褐	細砂	
7	7.5YR5/1	褐灰	細砂	
8	7.5YR5/1	褐灰	細砂	中礫を含む
9	7.5YR4/4	褐	細砂	
10	7.5YR4/3	褐	細砂	
11	7.5YR4/1	褐灰	細砂	
12	7.5YR5/2	灰褐	細砂	
13	7.5YR5/1	褐灰	細砂	
14	7.5YR5/2	灰褐	細砂	
15	5YR5/2	灰褐	極細砂～細砂	
16	5YR5/1	褐灰	極細砂～細砂	
17	5YR5/2	灰褐	極細砂～細砂	
18	7.5YR4/1	褐灰	極細砂～細砂	ベース土を多く含む

0 2m

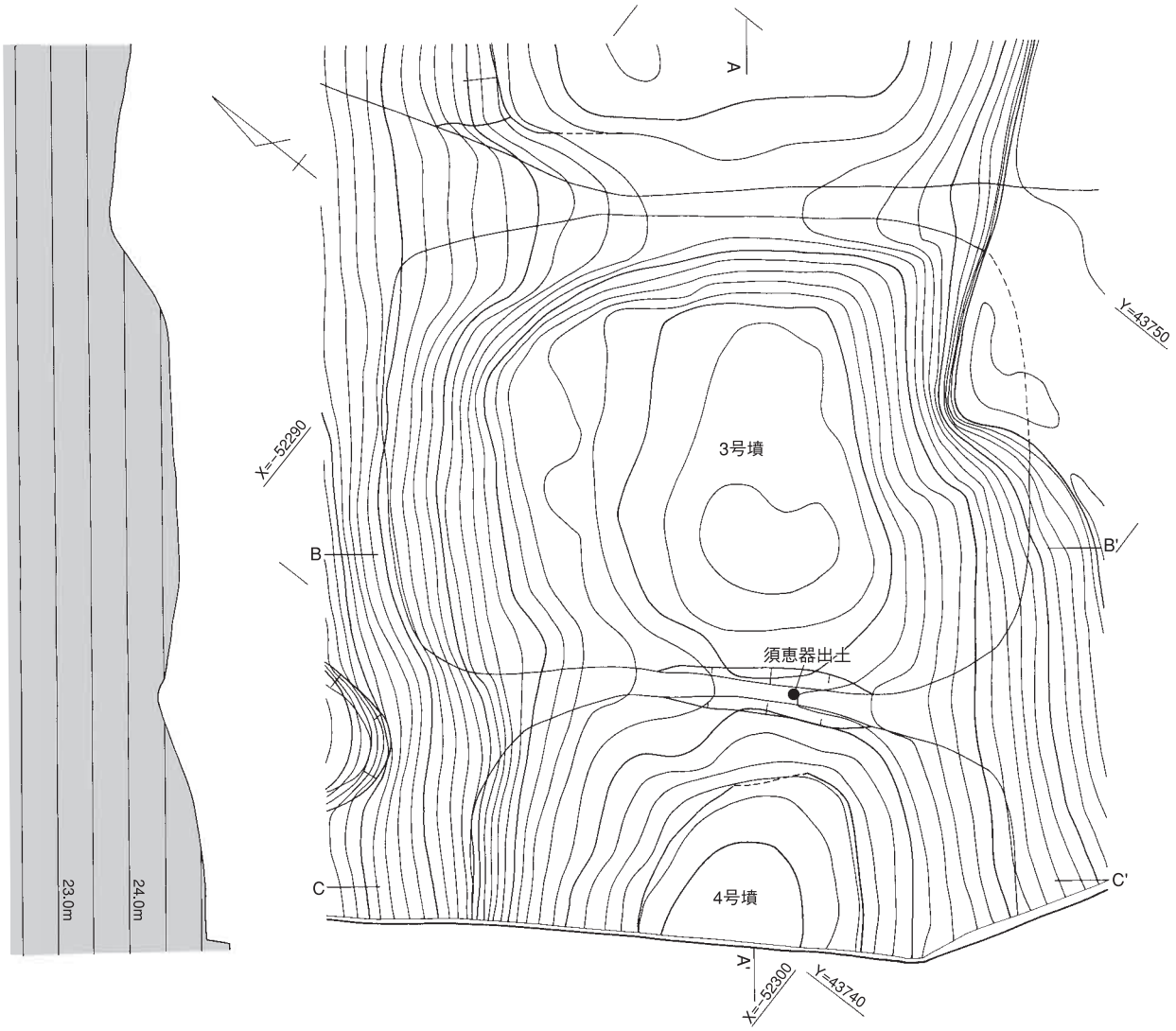
図版30　SX208



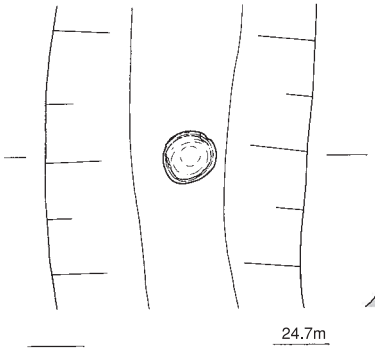
SX208

1	77.5YR5/3	にぶい褐	細砂	
2	7.5YR5/2	灰褐	細砂	緊密度やや低い
3	5YR5/3	にぶい赤褐	細砂	緊密度低い
4	5YR6/3	にぶい褐	細砂	中礫をわずかに含む
5	5YR5/2	灰褐	細砂	
6	5YR5/1	褐灰	細砂	中礫を含む

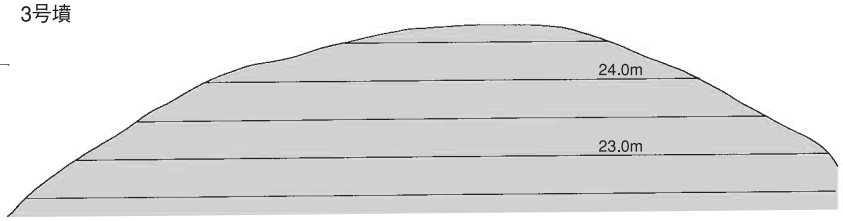
図版31　3号墳・4号墳平面図・断面図

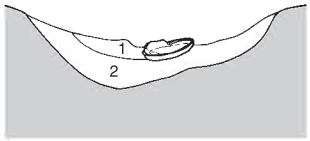


3号墳・4号墳間溝



3号墳

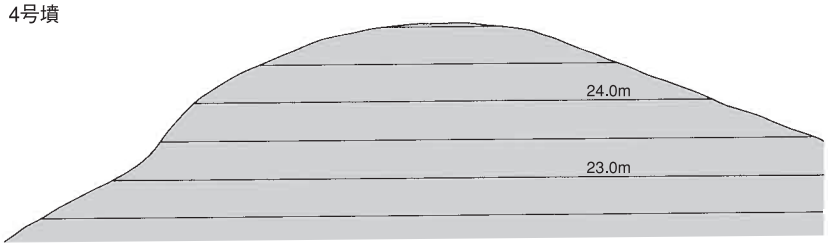




1　2.5YR6/5　シルト質埴壌土　極細砂均一層低圧
2　2.5YR6/5　シルト質埴壌土　極細砂均一層低圧
　　2～5㎝の石を含む

0　50㎝

4号墳



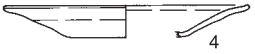
0　5m

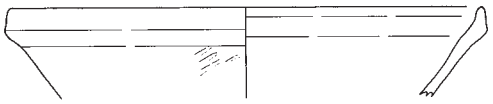
図版32 上層遺構（耕地谷城跡）出土遺物

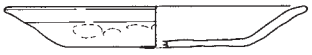
1

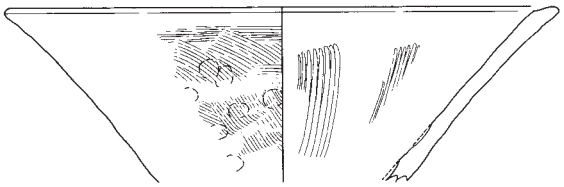
2

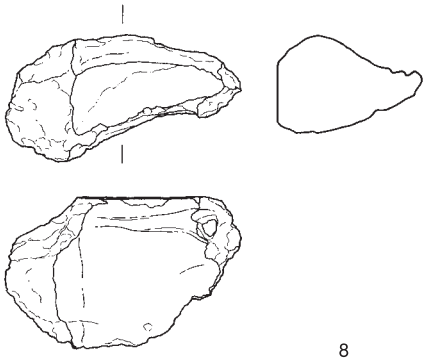
3


4


5


6


7


8

0 20cm

S1

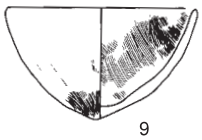
F1

F2

0 10cm

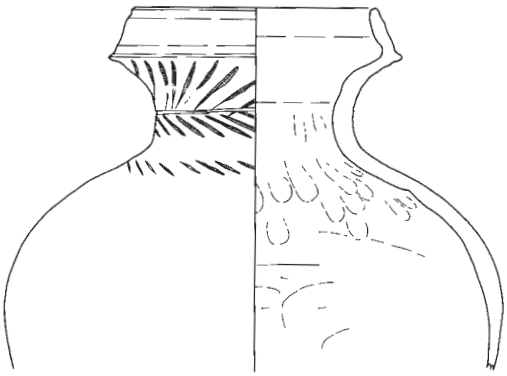
図版33　下層遺構（耕地谷古墳群）出土土器

SX101

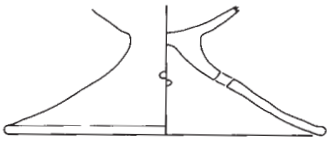


9

2号墳墳頂



10



11

SX201

12

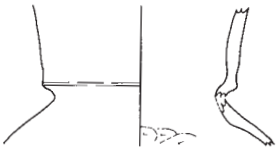
13

14

SX203

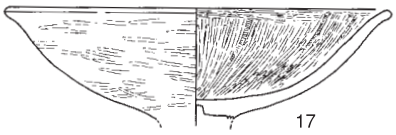
15

SX205

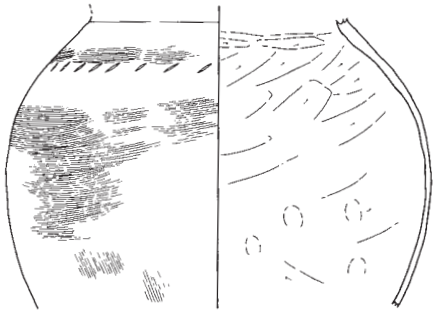


16

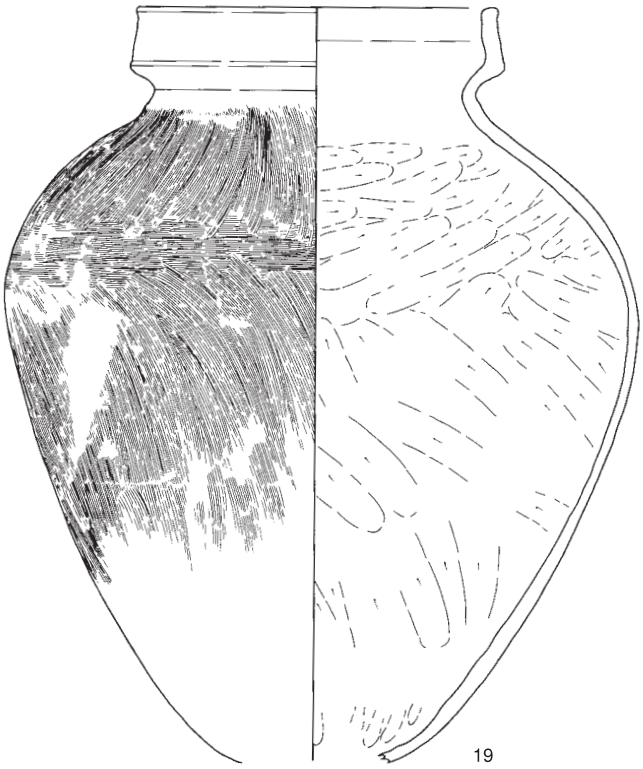
SX208



17

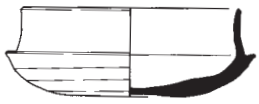


18



19

3・4号墳間溝



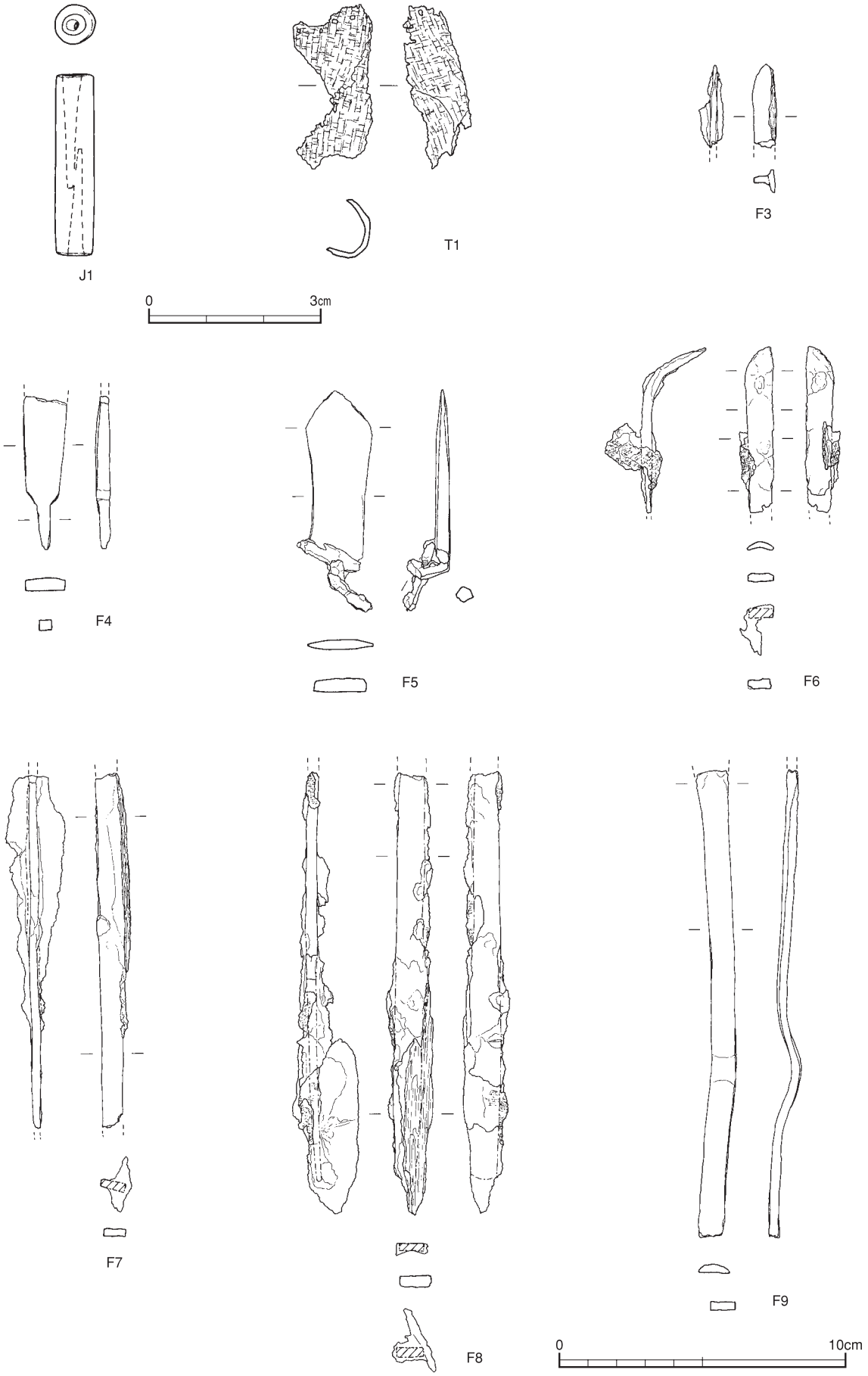
20

包含層

21

0　20cm

図版34　下層遺構（耕地谷古墳群）出土玉類・鉄製品・布製品



写真図版

調査区遠景（北から）

調査区遠景（北東から）

写真図版2　空中写真

調査区遠景（北西から）

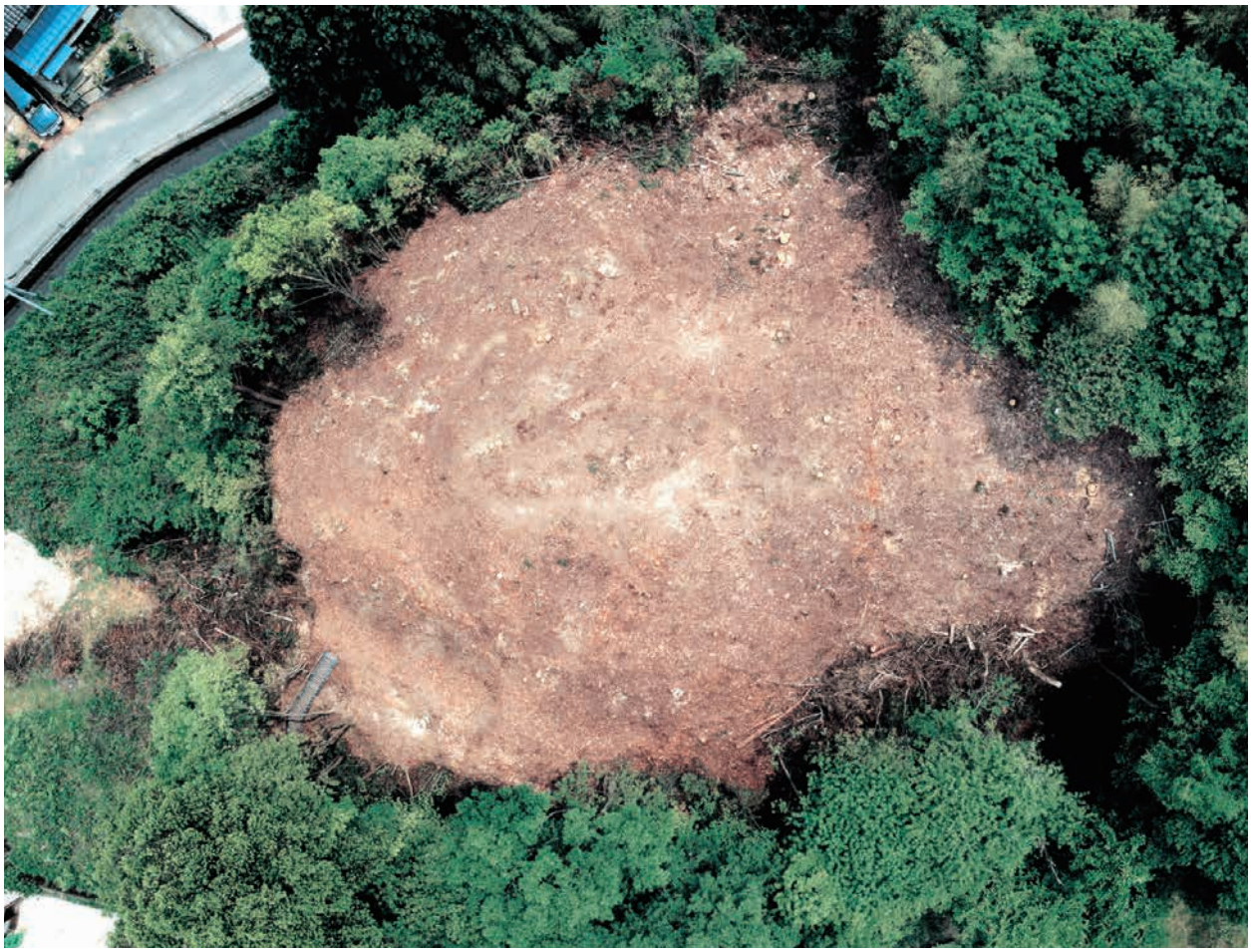
調査区遠景（南東から）

調査区遠景（東から）

調査区近景（北東から）

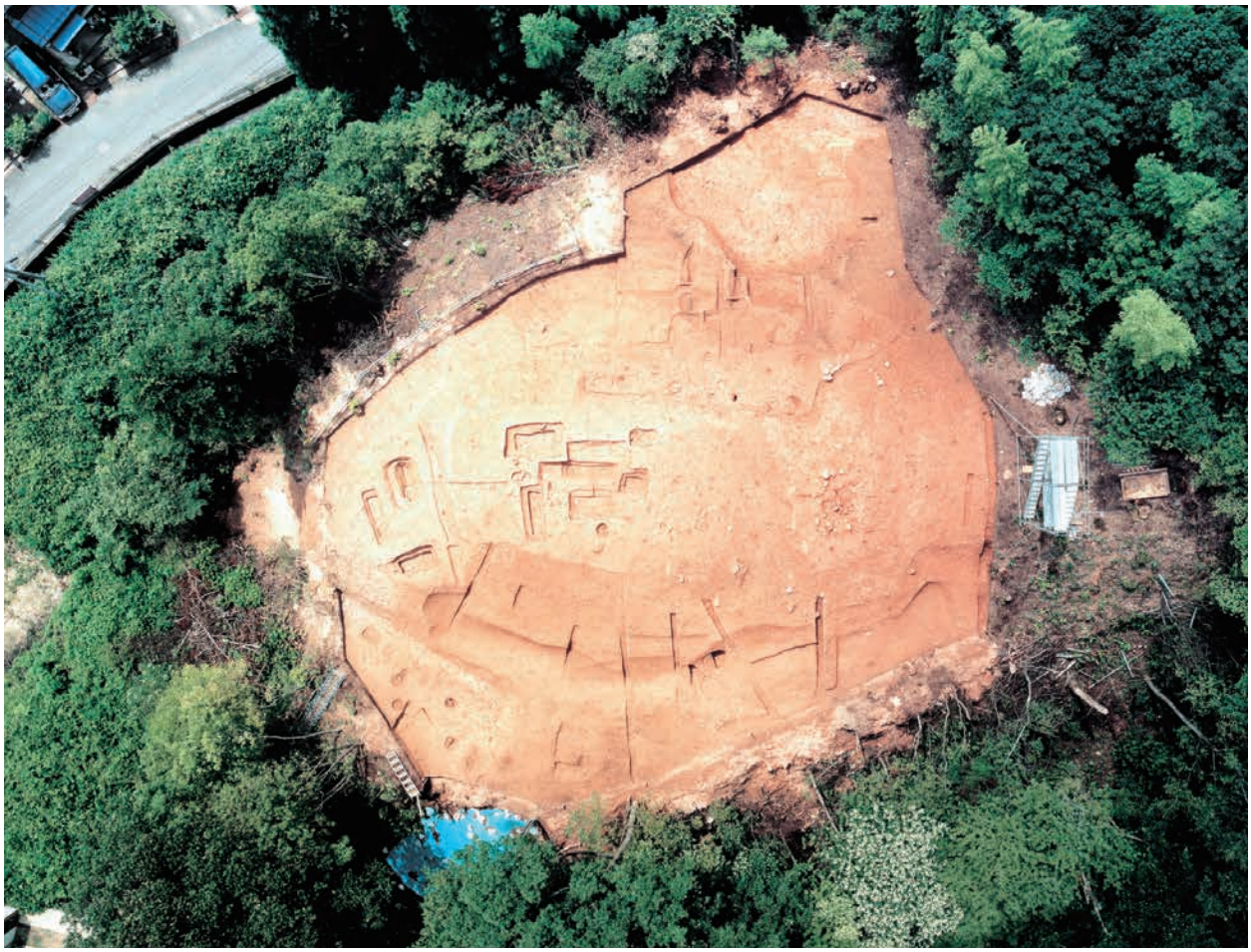
写真図版4　空中写真

調査区近景（東から）



調査前状況（真上から）

耕地谷城跡上層（真上から）



耕地谷城跡下層・耕地谷古墳群（真上から）

調査前全景
（西から）

調査前の尾根
（北東から）

調査前南平坦部
（南西から）

調査前北平坦部
（西から）

拡張区着手前状況
（北東から）

拡張区表土剥ぎ状況
（北東から）

南壁東半部

東西土手３・４号墳間

東西土手２・３号墳間

北４トレンチ
土層断面全景
（南から）

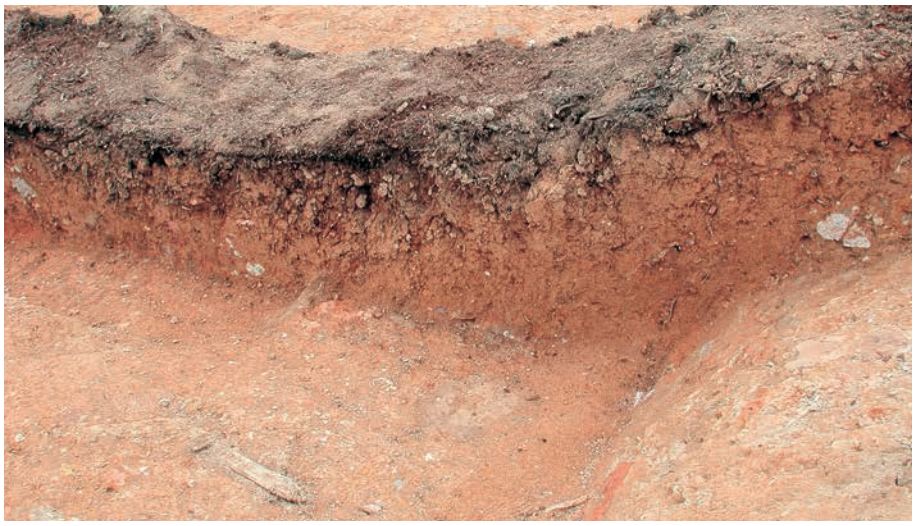
北４トレンチ
中央部断面
（南東から）

北４トレンチ
中央部断面
（北東から）

北テラス通路
東西土手断面
（西から）

北５土手断面
（東から）

南４土手断面
（北から）



南４南平坦部
（北東から）

南４南平坦部
（北から）

南３土手断面北半
（北東から）

北・南４土手
断面全景
（北東から）

北４土手断面
（北東から）

南平坦部３
盛土状況
（北から）

拡張区南北土手
断面北半
（南西から）

東郭・中央郭
（西から）

東郭（西から）

中央郭・西郭
（西から）

中央郭検出状況
（西から）

中央郭（西から）

中央郭全景
（西から）

集石土坑SX001

SX001半裁状況
（東から）

SX001下部断面
（東から）

西郭（西から）

西郭近接

郭外の状況

尾根上の郭全景
（西から）

南平坦部
西コーナーと集石
（南東から）

SD301（南から）

北平坦部
（南西から）

北平坦部１
（南西から）

北平坦部１
（西から）

北平坦部２
（南西から）

北平坦部通路状遺構
（南西から）

北平坦部通路状遺構
（南東から）

北平坦部１柱穴
（東から）

北盛土部分
（南東から）

北盛土
清掃作業状況
（南西から）

南平坦部
（北西から）

南平坦部西コーナー
（南東から）

南平坦部東コーナー
（南西から）

SD001集石
（北西から）

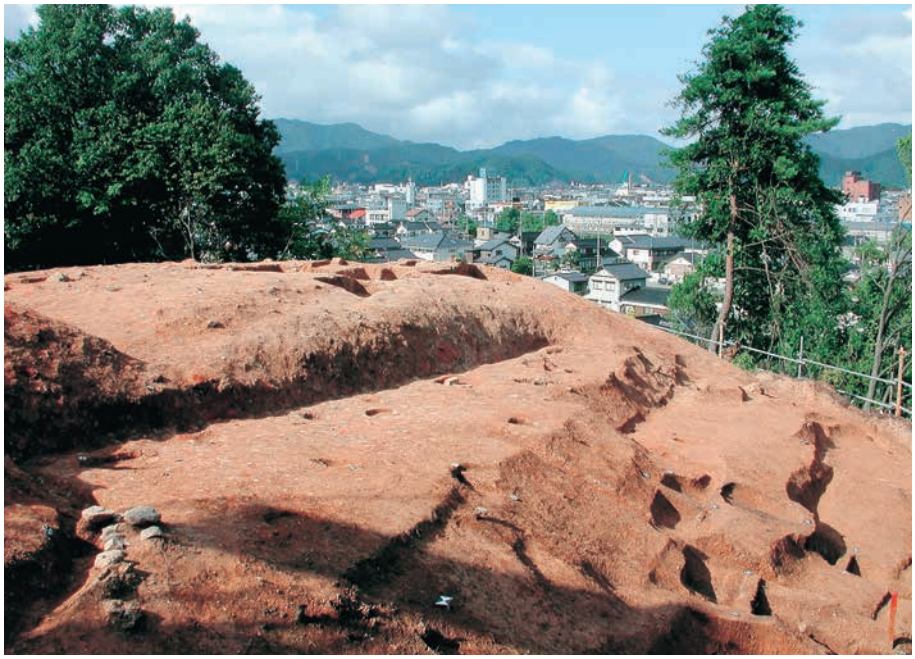
SD001集石
（南東から）

SD001西部
（南東から）

SD001土層断面
（南西から）

SD001列石検出状況
（北西から）

南平坦部清掃作業状況
（北西から）



南斜面南平坦部２
（南西から）

南平坦部２・３
（西から）

南平坦部２・３
（北西から）

拡張区（北から）

南平坦部２・３
及び拡張区
（北西から）

拡張区の玄武岩
（北西から）

拡張区全景
（北西から）

拡張区中段
（北西から）

拡張区中段と下段
（北西から）

写真図版26　古墳群

墳頂から南東方向を
望む（北西から）

１・２号墳全景①
（南西から）

１・２号墳全景②
（南西から）

1号墳墓壙検出状況
（南西から）

1号墳埋葬主体全景
（南西から）

SX101・SX102
（南西から）

SX101全景
（南西から）

SX101棺頭部付近
（南東から）

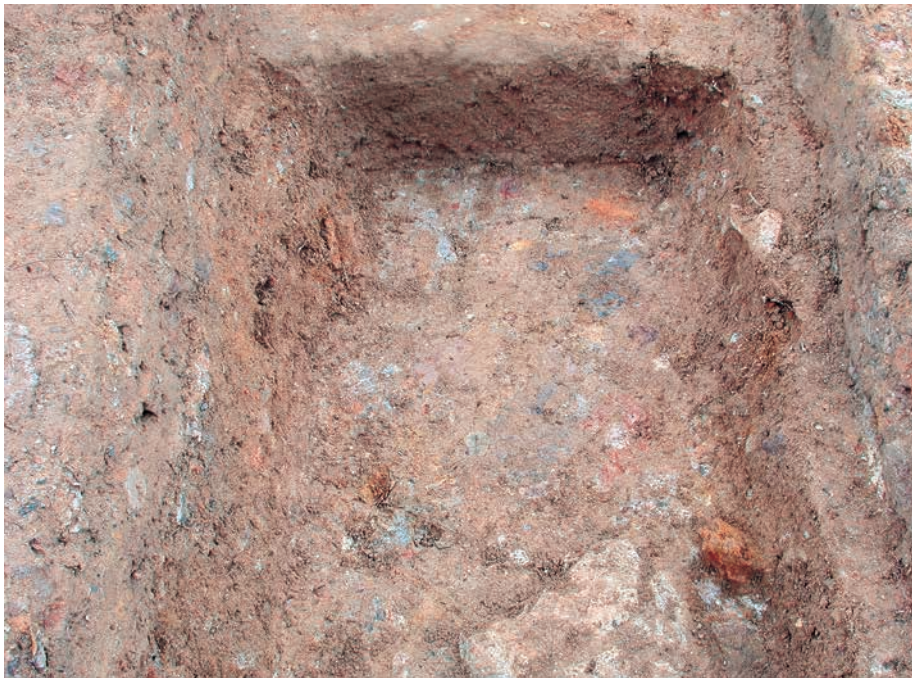
墓壙内破砕土器（東部）出土状況（北東から）

墓壙内破砕土器（西部）出土状況（北東から）

SX101墓壙完掘状況
（北東から）

SX102全景
（南西から）

SX102墓壙完掘状況
（南西から）



SX102棺内鉄器
出土状況
（南東から）

SX102棺内東側鉄鏃
出土状況
（南東から）

SX102棺内西側
ヤリガンナ出土状況
（北東から）

SX103全景
（南東から）

SX103墓壙完掘状況
（南東から）

SX103棺東部鉄器
出土状況
（南西から）

SX103棺東部鉄器
出土状況アップ
（南東から）

写真図版32　２号墳・SX201

２号墳主体部全景
（南西から）

SX201全景
（南西から）

SX201棺付近
（南東から）

SX201棺内鉄器
出土状況
（北西から）

SX201裏込め土内礫
出土状況
（南東から）

SX201墓壙完掘状況
（南西から）

SX202検出状況
（北東から）

SX202墓壙土層断面
（北東から）

SX202墓壙完掘状況
（南西から）

SX203・SX204全景
（南西から）

SX204全景
（南西から）

SX204墓壙完掘状況
（南西から）

SX205全景
（南西から）

SX205墓壙完掘状況
（南西から）

SX205墓壙完掘状況
（北西から）

SX206全景
（北西から）

SX206墓壙完掘状況
（北西から）

SX207全景
（南西から）

SX207墓壙完掘状況
（南西から）

SX208土器棺
上部検出状況
（南東から）

SX208土器棺
下部検出状況
（南東から）

SX208墓壙完掘状況
（北西から）

２号墳と３号墳
（西から）

３号墳墳丘
（西から）

２・３号墳間付近
墳裾から墳丘斜面
（北から）

写真図版40　3号墳・4号墳

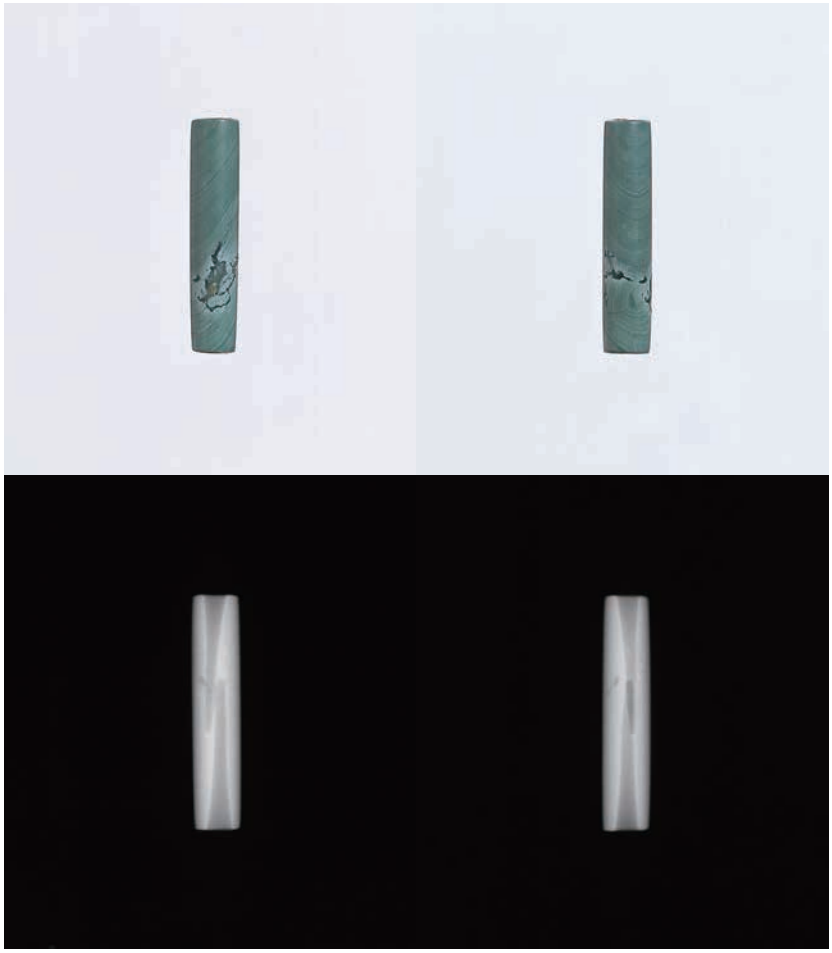
3号墳墳丘
（南西から）

3・4号墳作業状況
（北東から）

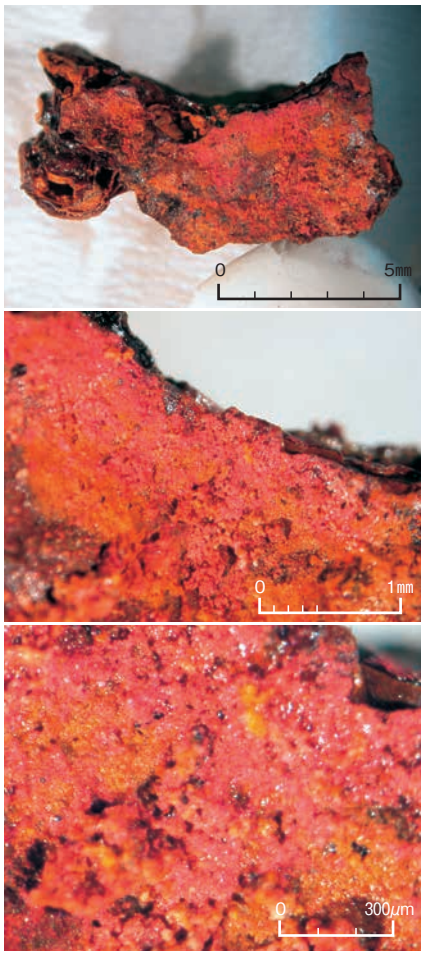
3・4号墳墳丘斜面
清掃状況（北東から）

3・4号墳間溝須恵器出土状況（左南から・右東から）

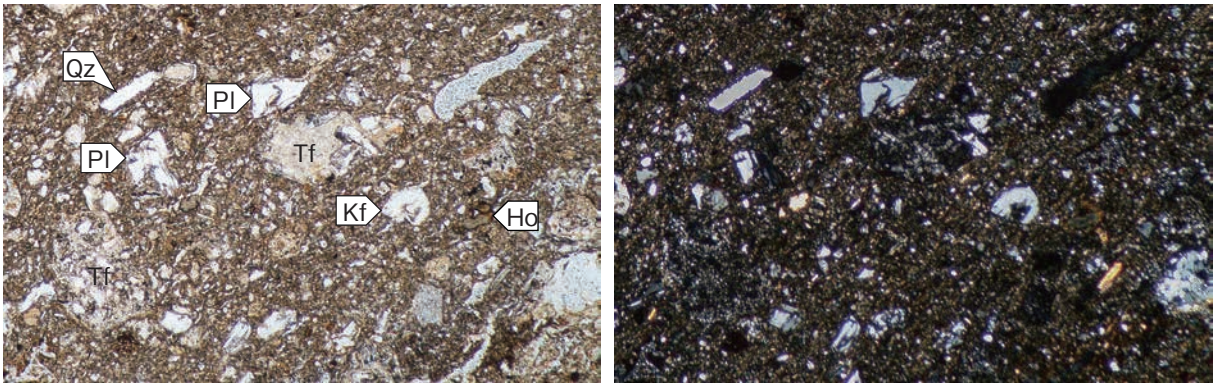
２号墳出土土器



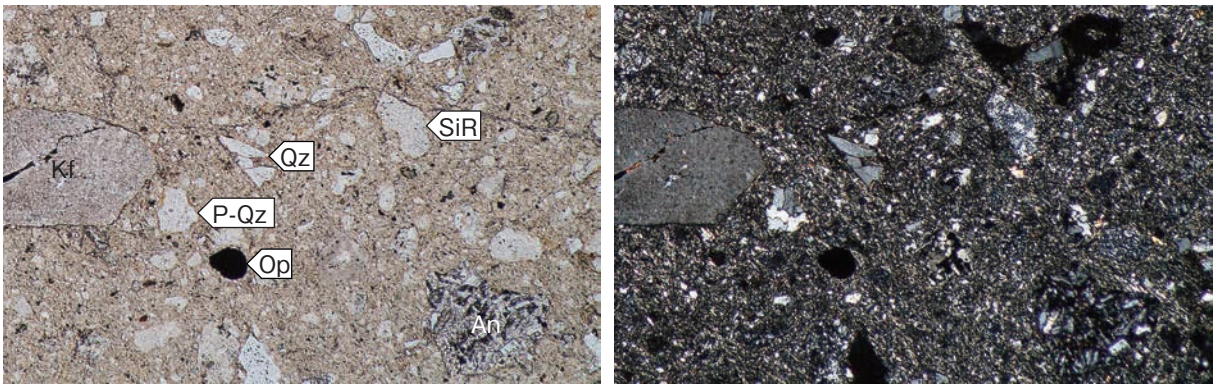
SX101出土管玉



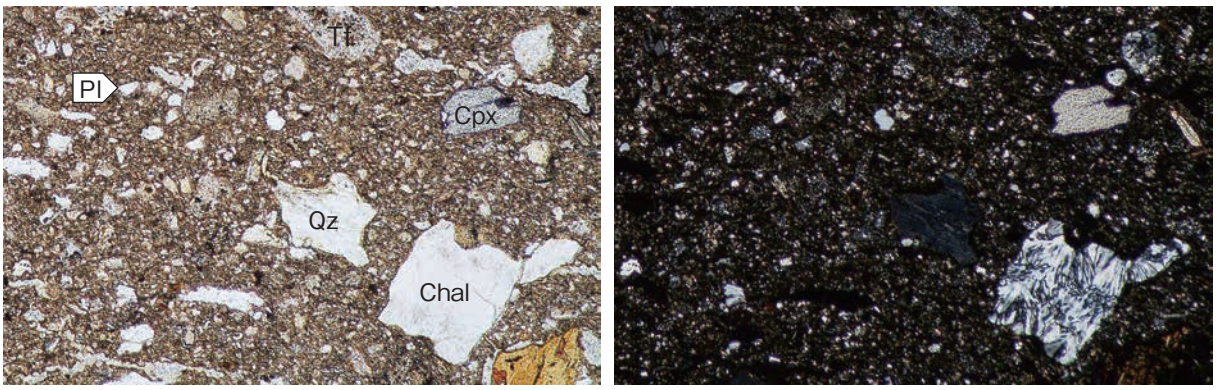
SX201出土ヤリガンナ付着水銀朱



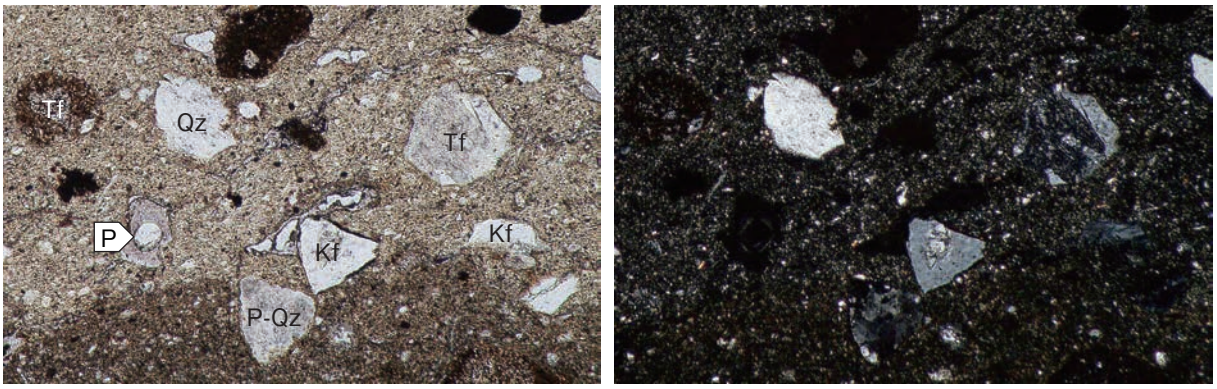
1.試料No.1（土師器　甕　古墳時代前期前半　SX201　図版番号33　報告番号18）



2.試料No.2（土師器　壺　古墳時代前期前半　2号墳墳頂　図版番号33　報告番号10）



3.試料No.3（土師器　高坏　古墳時代前期前半　SX201　図版番号33　報告番号17）



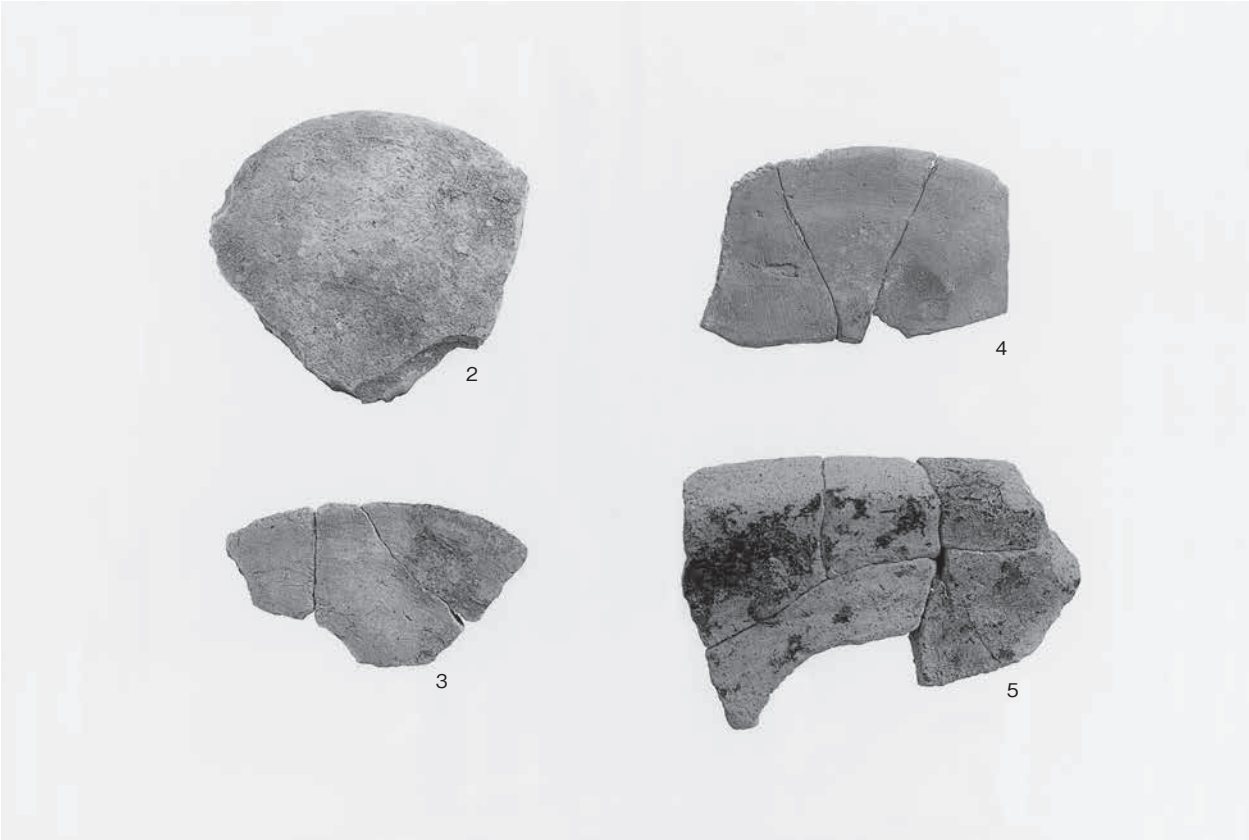
4.試料No.4（土師器　二重口縁壺　古墳時代前期前半　SX201　図版番号33　報告番号19）

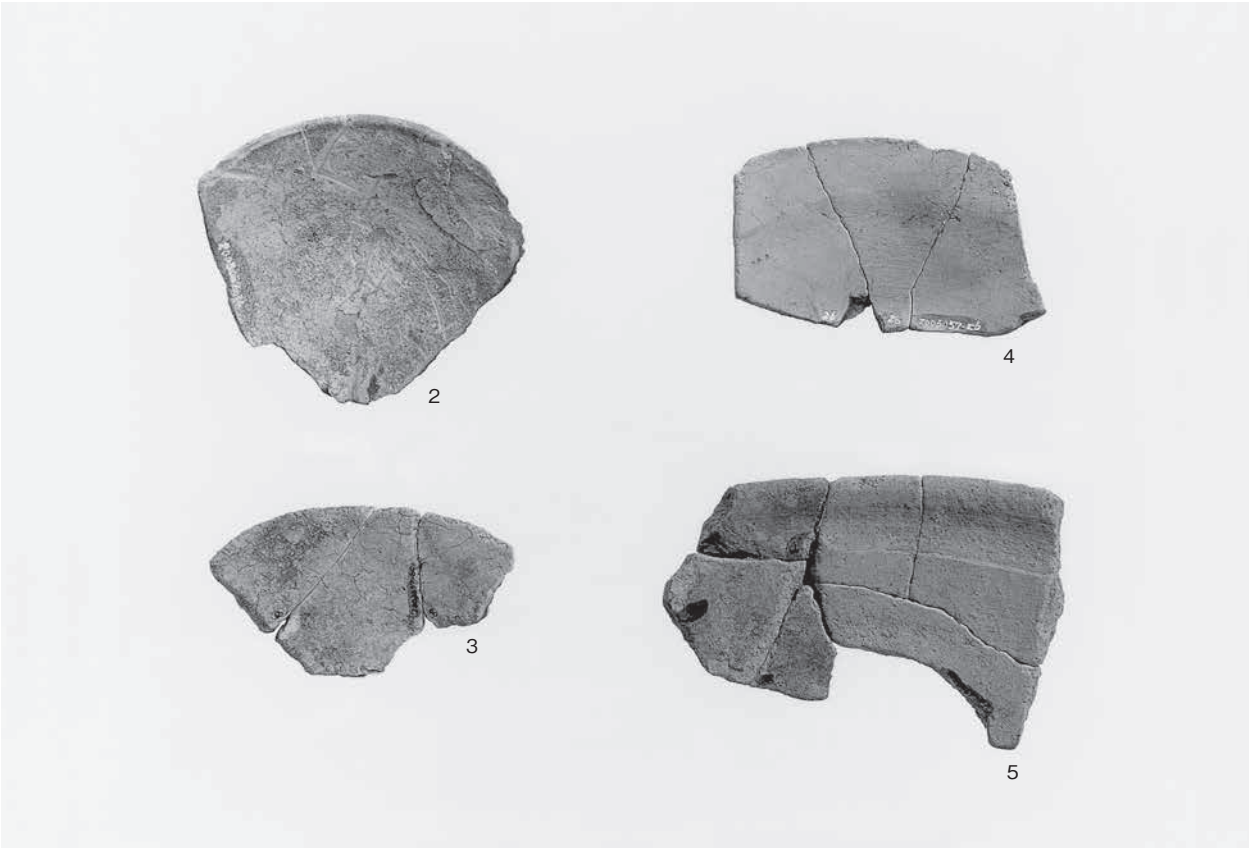
Qz:石英.Kf:カリ長石.Pl:斜長石.Cpx:単斜輝石.Ho:角閃石.Op:不透明鉱物.
Tf:凝灰岩.An:安山岩.P-Qz:多結晶石英.Chal:脈玉髄.SiR:珪化岩.P:孔隙.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

1

6


2
4
3
5


2
4
3
5

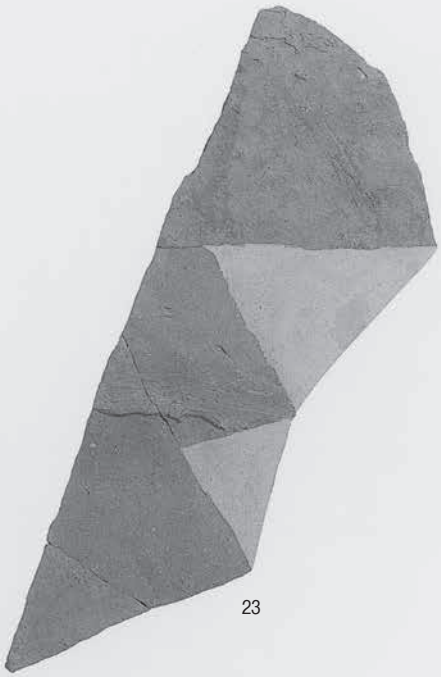
7

7

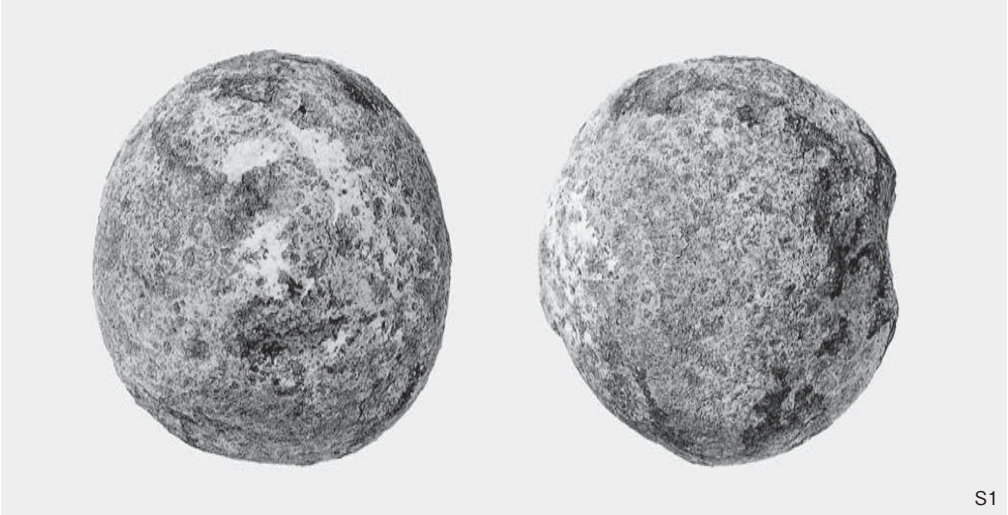
7

7

22


23

8


S1

S2

F1

F2

9

17

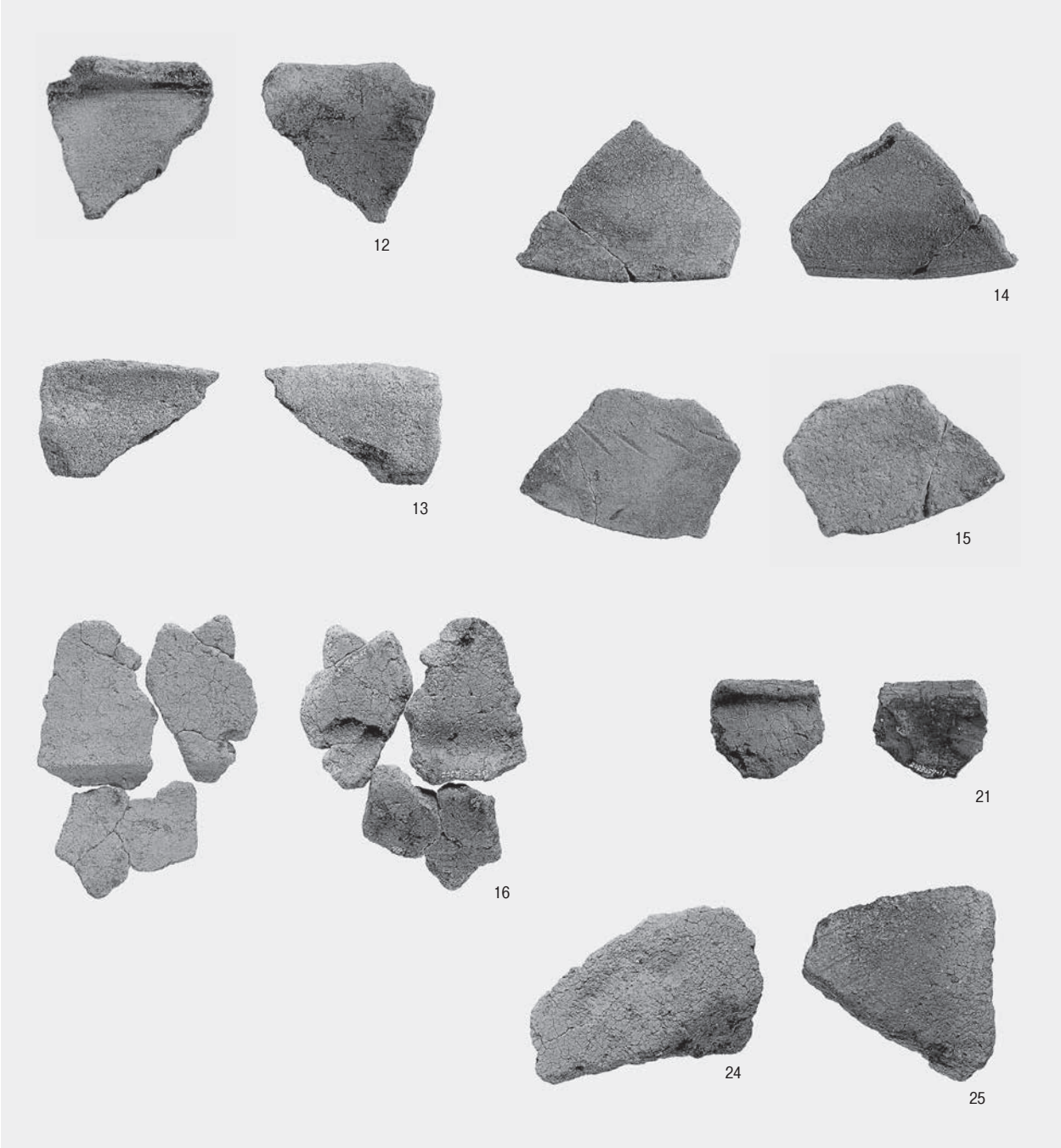
10

19

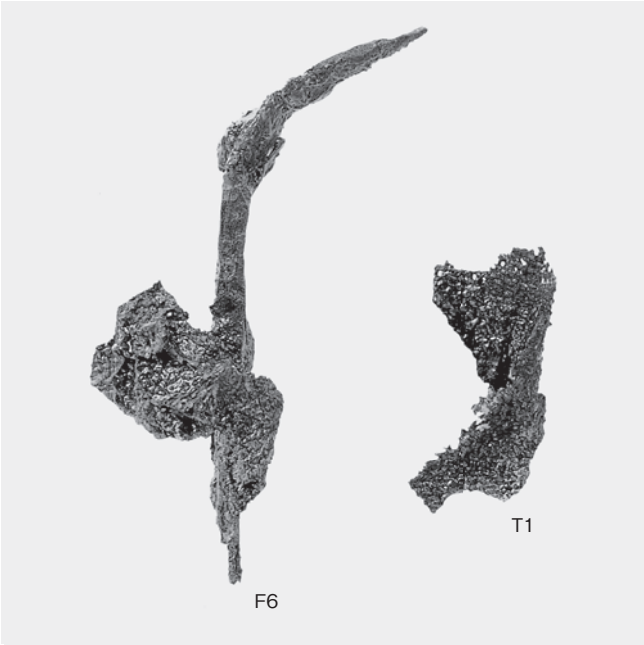
11

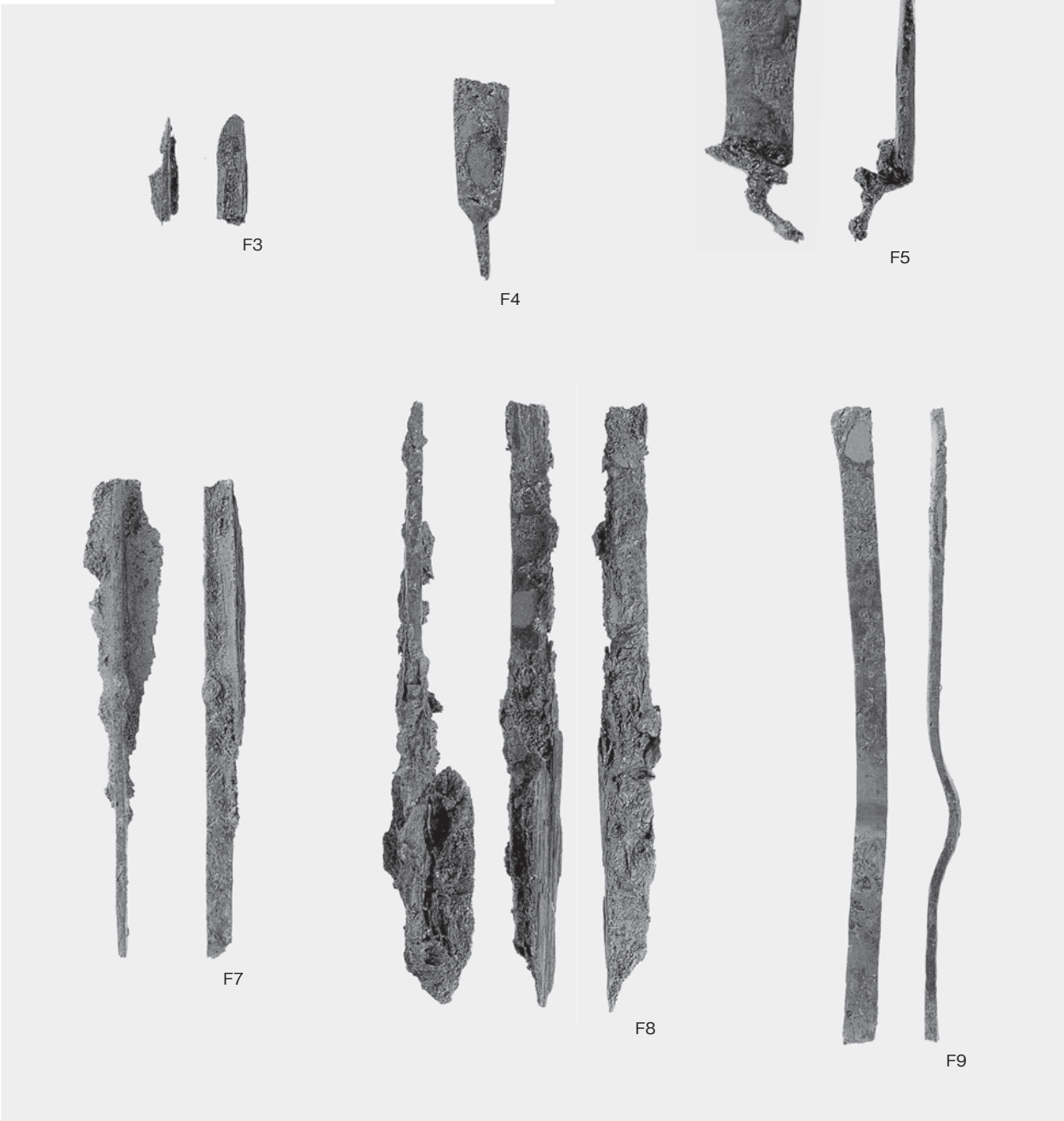
20

18


12
14
13
15
16
21
24
25

写真図版48　遺物





報　告　書　抄　録

ふりがな	こうちだにこふんぐん・こうちだにじょうあと
書名	耕地谷古墳群・耕地谷城跡
副書名	－国道426号交通円滑化事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第377冊
編著者名	上田健太郎・西口圭介・石井智大・パリノ・サーヴェイ株式会社（矢作健二・石岡智武）
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　　TEL　079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　　TEL　078-341-7711
発行年月日	2010(平成22)年３月20日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
耕地谷古墳群 耕地谷城跡	兵庫県豊岡市 九日市下町	28481	2001003	34度 51分 51秒	134度 21分 38秒	20030513 ～ 20030812	707㎡	国道426号豊岡バイパス道路改築事業に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
耕地谷古墳群	古墳	古墳時代前期	古墳	土師器・鉄製品・玉類・布製品	古墳４基を検出。２号墳は台状墓的様相を呈する。
耕地谷城跡	城館	中世	城郭	土師器・石製品・鉄製品	小規模な山城と考えられる遺構を検出。

要約

古墳群では古墳４基を検出した。うち２基は古墳時代前期前半期の属すると考えられる。いずれの墳丘平坦面にも２段掘り墓壙の主体部を１基ずつ有し、ほかに複数の１段掘り墓壙の主体部が伴う。いずれの主体部も木棺墓である。１号墳は２段掘り墓壙の主体部に碧玉製管玉が、他の主体部２基ともに２点ずつの副葬鉄器が認められた。一方２号墳は中心主体にヤリガンナを保有するが、他の主体部７基のうち鉄器が認められたのは１基のみに留まる。

城郭は尾根状にある古墳の墳丘を利用した郭３ヵ所と、南北斜面から大小の平坦面を検出した。特に南斜面では平坦面に排水溝が設けられるなど、複数の平坦面が繰り返し設けられている。軍事緊張の際に地域住民が武装し、たてこもるための施設であった可能性が考えられる。

※緯度・経度は世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告　第377冊

耕地谷古墳群・耕地谷城跡

－国道426号交通円滑化事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－

2010(平成22)年３月20日　発行

編　集　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
TEL 079-437-5589

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　ウニスガ印刷株式会社
〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39

21教Ⓣ1-023A4